（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）

岩倉紙芝居　古典館　宰主　上田啓之

**書紀の対外観　その２　倭の五王**目次

１．沈約自序 [》》](#沈約自序)

２．高句麗傳 [》》](#高句麗傳)

３．百濟傳 [》》](#百濟傳)

４．倭國傳 [》》](#倭國傳)

５．日本書紀 [》》](#日本書紀)

氣長足姫尊と譽田天皇政権 [》》](#氣長足姫尊と譽田天皇政権)

大鷦鷯天皇（仁德天皇）、去來穗別天皇（履中天皇）、瑞齒別天皇（反正天皇）、

雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）政権 [》》](#大鷦鷯天皇（仁德天皇）、去來穗別天皇（履中天皇）)

大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）政権 [》》](#大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）政権)

６．倭の五王 [》》](#倭の五王)

氣長足姫尊（神功皇后）の役割 [》》](#氣長足姫尊（神功皇后）の役割)

譽田天皇（應神天皇）の役割 [》》](#譽田天皇（應神天皇）の役割)

大鷦鷯天皇（仁德天皇）の役割 [》》](#大鷦鷯天皇（仁德天皇）の役割)

去來穗別天皇（履中天皇）、瑞齒別天皇（反正天皇）、

雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）政権の役割 [》》](#去來穗別天皇（履中天皇）、瑞齒別天皇（反正天皇）)

穴穂天皇（安康天皇）の役割 [》》](#穴穂天皇（安康天皇）の役割)

大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）の役割 [》》](#大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）の役割)

７．まとめ [》》](#まとめ)

 **１．****沈約自序**

倭の五王は「宋書」に記される。撰者は沈約（しんやく､441～513）、「宋書、列傳第六十、自序」によれば、宋書は、元嘉十六年（439年）著作郎、何承天（かしょうてん）が「本紀」と「列伝」の草稿を始めたが、武帝（劉裕）周辺と天文、律歴の「志」程度であり、「志」については、孝建初め(454年)に、山謙之（さんけんし）が引き継いだものの病死し、「列伝」については、蘇寶生（そほうしょう）が元嘉の名臣を編纂したが反乱に加担して誅され、中断した。大明の半ばとなり、徐爰（じょかん）が、それらを纏めて、義煕元年(405年) から大明八年(464年〉までを書きあげたのであるが、欠落部分や、同時代の歴史編纂であり、帝意が先立つことや世におもねってみたり、事実として将来に残すに適切を欠くものがあり、また、晋史に入れるべきものとの区別があやふやであったりしたため、沈約が改めて、義煕元年(405年) から昇明三年（479年〉までの編纂をおこなったといふ。

沈約が勅命により「宋書」の編纂にとりかかったのは、斉の武帝（蕭賾：しょうさく）永明五年（487年：46歳頃）、翌年二月に終へて、上表したとある。たいしたスピードであるが、実は、彼はそれなりの準備をしていた。二十歳の頃から晋の歴史の編纂を志しており、宋の明帝より、泰始初（465年）、24歳頃に後に征西將軍となる蔡興宗（さいきょうそう）を通じて、晋史編纂の勅許を得ていた。これは未完に終っているが、晋から宋に至る資料をずっと蒐集していた。蔡興宗は、当時、吏部尚書で、泰始二年二月尚書左僕射（尚書令次官）に就任、翌年三月には安西将軍・郵州刺史となっていた。沈約は、奉朝請から、蔡興宗の安西将軍府の外兵参軍・兼記室となったとされる（訳注『宋書』沈約自序 (二)、注１、北海道大學文學部、川合 安助教授　1998年、東北大学文学部教授）。沈約は武帝の第二子の蕭子良（しょうしりょう）が竟陵（きょうりょう）王に封じられ、一流の文人らを鶏籠山（けいろうざん）の西邸に招いた中（竟陵八友）の一人であり、詩の韻律に秀で、中国語の四声（平、上、去、入）を体系立てた文人でもあり、この時に勅命を得て、宋書編纂を行ったものである。

宋書、列傳第六十、自序に経緯が記されている。(現代語訳は、北海道大學文學部、川合 安助教授、[訳注『宋書』沈約自序 (二)](http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/33703)　により、テキストは、[小說博覽/歷史資料](http://www.novelscape.net/lszl/s/shenyue/ss/100.htm)により、筆者が訓じ、語注を加へた)。

「史臣（沈約）、年十三にして孤、少（わか）くして頗（すこぶ）る學を好み、棄（き）して功無しと曰ふと雖も、伏して膺（よう）して改めず。常に以て晉氏一代、竟（をは）りて全書無し。年二十許（ばかり）、便（すなは）ち撰述の意（こころ）有り。泰始の初め、征西將軍蔡興宗、為に明帝に啟（まう）しあげ、敕（ちょく）有りて許（ゆるし）を賜（たま）ふ。此より今迄、年二十を逾（こ）へ、撰する所の書、凡そ一百二十卷。條を流（し）き舉（あ）ぐと雖も、而して采掇（さいてつ）未だ周（あまね）かず。永明の初、盜に遇ひ第五帙を失ふ。建元四年、未だ終らずして、敕を被（う）けて國史を撰す。永明二年、又奏に朅（ゆ）きて著作郎を兼ね、起居注を撰次す。茲（ここ）より王役にて、撰を搜する暇（いとま）無し。五年春に、又敕を被けて《宋書》を撰す。六年二月に功を畢（を）へ、之を表上して、曰す。」
（私は十三才で父をなくし、幼少よりかなり学聞を好み、無駄に時間を費やして成果がなかったとはいえ、学問自体は続けてきた。常に晋代には結局全代を通じた歴史書ができていないということが気にかかっており、二十才ばかりで、これを編纂したいと思うようになった。泰始の初め(四六五、六年)、征西将軍蔡興宗が私のために明帝に上啓して勅許を得てくれ、これより今に至るまで、二十年をこえ、編纂した書物は、全部で百二十巻。骨格はできあがったが、史料収集が不十分なまま、永明初(四八三)、盗難にあって第五帳を失った。建元四年(四八二)の末、勅命を受けて国史編纂に従事することとなり、永明二年(四八四)、さらに著作郎を兼任して、起居注を編纂することとなった。これより公務のため、史料収集の時聞がなくなった。五年春、さらに勅命を受けて『宋書』を編纂することとなった。六年二月には作業を終え、上表して『宋書』をたてまつった。その表の内容は次の通り。)

「臣約言（まう）す、大禹木を刊（き：*大禹治水し、山に随ひて木を刊*）ると聞く、事は虞書に炳（あきらか）。西伯黎に戡（か：*西伯黎国を討ち勝*）ち、功（いさお）は商典に煥（あきらか）。伏して惟（こ）れ皇基（こうき）を峻積（しゅんせき）し、帝烈（ていれつ）を弘深し、德を往朝に樹（た）て、勳（いさお）を前代に立つ。若し唐世（*堯の世*）に風を觀（み）ずば、以て帝媯（*舜*）の美を見ること無し。自ら秦の余（すえ）を睹亂（とらん）すること非ずば、何ぞ漢祖の業を用知せん。是れ以て掌言し未だ記さざる、爰に天（子）、情を動かせ、史官に曲詔し、大典を追述（ついじ）せしむ。臣、實（まこと）に庸妄（ようもう）、文史多（さは）に闕（か）き、以て茲（ここ）に不才。盛旨を對揚（たいよう）するに、是れ夕惕（ゆうてき）を用（も）て、怀（おもひ）を載（き）し、其の寢食を忘るる者なり。」

（臣約申し上げます。私は、禹が木を切ったことは虞の記録に書いてあり、西伯が黎に勝った功績は、商の記録に書いてあると聞いております。わが斉皇室の基礎がしだいに高まり、皇帝にふさわしい功績が広く深くなってゆき、徳を前王朝に立て、勲功を前代に立てたのでございまして、堯の時代の事績を見なければ、舜の功績がわからず、秦末の混乱を見なければ、漢の高祖の功業を知ることはできません。それゆえ、まだその記録がないということが、陛下のお気持を動かし、私に詔して大事な記録を書きつぐことを命令なさいました。私はまことに凡庸であり、文史の知識に欠落が多いのですが、この不才をもって、ご命令に応えることとなり、そのため終日畏れ多いと感じ、寝食を忘れたことでございます。）

「臣約、頓首死罪*（臣下が*[*皇帝*](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD)*に対して恐縮するときの決まり文句）*。竊（ひそか）に宋氏南面すを惟（おも）ふに、歷を承（う）け天を統（すべ）ること、世、八主を窮（きは）むと雖も、年、百載を減ず。而して兵車亟（しばしば）動き、國の道屢（しばしば）屯（なや）む。文を垂（つた）へ、簡牘（かんとく）すること、事數（じすう*：事象情勢*）繁く廣し。若し夫れ英主、基（もと）を啟（ひら）き、名臣績を建て、世を拯（すく）ひ難を夷（たひら）ぐ功、天に配（なら）び光宅（すま）ふの運（めぐり*：受命のこと）*、亦以て鐘鼎（しょうてい）に勒銘（ろくめい）し、方策（*木版竹簡*）に昭（あき）らかに被（う）くに足る。虐后（ぎゃくこう）暴朝に及びて、前王、罕二（かんじ？）にして、國釁家禍（こっきんかか：*国と家が天より罪過を受く*）、曠古（こうこ：*古をむなしくするようなこと*）未だ書かれず、又以て万葉に式規（しきき）し、后（のち）への鑒（いましめ）と作（な）す可し。 」

（私は畏れ多くも思いますに、宋王朝の支配は、八代で百年にも満たなかったとはいえ、戦争が頻繁におこり、国の命運もしばしば危うくなり、記録に残すべきことが非常に多いです。英主が王朝の基礎を開いたこと、名臣の功績、戦乱を平定した功績、王朝創業の気運なども、記録に残すに足りますが、残虐で乱暴な君主で、歴史に比類のない者、国家の災難で、古来記録されていない事も、永久に手本とし、後世の鑑戒とすることができましょう。）

「宋の故著作郎、何承天（かしょうてん）、始めて《宋書》を撰す。紀傳を草立すも、武帝と功臣に止り、篇牘（へんとう）未だ廣からず。其の志（し）を撰す所、唯《天文》、《律歷》、此より外、悉く委ね朝に奉りて山謙之（さんけんし）に請ふ。謙之、孝建の初め、又詔を被（う）け撰述し、值を尋ぬるも病みて亡し。仍ち南台侍御史蘇寶生（そほうしょう）をして諸傳を續けて造らしむ。元嘉の名臣、皆其の撰する所。寶生、誅を被け、大明の中、又著作郎徐爰（じょかん）に命じて前作を踵（ひきつ）ぎて成す。爰（徐爰）は何（何承天）、蘇（蘇寶生）の述ぶる所に因りて、一史を勒（ととの）へ為す。義熙の初めより起こし、大明の末に訖（をは）る。臧質（そうしつ）、魯爽（ろそう）、王僧達（おうそうたつ）の諸傳に至り、武（孝武帝）の造る所。永光より以來、禪讓に至るに、十余年の內、闕（か）きて續かず、一代の典文、始末未だ舉がらず。且つ事當時に屬し、多（さは）に實錄に非ず。又傳を立つるの方、取舍衷（まこと）に乖（もと）り、進みては時旨（じし）に由り、退きては世情に傍（そ）ひ、之を垂（つた）へて來（将来）に方（くら）ぶは、以て信を取ること難し。臣以て謹しみて更（あらた）めて創立し、新たなる史を制（ととの）へて成す。義熙より始め號を肇（ただ）し、升明三年に終へる。桓玄（かんげん）、譙縱（しょうしょう）、盧循（ろじゅん）、馬（司馬休之：しばきゅうし）、魯（魯宗之：ろそうし）の徒、身は晉賊を為し、后代に關（かん）するに非ず。吳隱（ごいん）、謝混（しゃこん）、郗僧施（ちそうし）は、義、前朝に止（や）み、濫（みだり）に宋典に入れるに宜（よろ）しからず。劉毅（りゅうき）、何無忌（かぶき）、魏詠之（ぎえいし）、檀恁之（だんいんし）、孟昶（もうちょう）、諸葛長民（しょかつちょうみん）は、志（こころざし）、興复（こうふく）に在れど、情、宋を造るに非ず。今、并（あは）せて刊除（かんじょ）し、之を晉籍に歸す。」
（宋の故著作郎何承天が始めて『宋書』を編纂しましたが、紀伝の草案を立てたのは、武帝と創業の功臣に止まり、分量はまだ多くありませんでした。何承天が編纂した志は、天文・律暦のみで、このほかは、すべて奉朝請山謙之に委ねました。山謙之は、孝建初(四五四)、さらに詔を受けて編纂にたずさわりましたが、まもなく病没したので、南台侍御史蘇宝生に列伝を続けて編纂させました。元嘉時代の名臣の伝は、みな蘇宝生の編纂です。蘇宝生が抹殺されると、大明中、更に著作郎徐爰に前作をついで完或させるよう命じました。徐爰は何承天、蘇宝生の編纂した記鋒によって、ひとつの歴史書を完成させ、義煕元年(四〇五) から大明八年(四六四〉までを記録しました。臧質、魯爽、王僧達の諸伝については、みな孝武帝の著述にかかります。永光元年（四六五）以降、禪讓革命(四七九)に至るまでの十余年については、欠落して続けられず、宋一代の記録は、まだ完成に至っておりませんでした。それに事柄がその当時のできごとであるため、多くは事実の記録ではなく、さらに伝を立てる方式も、取捨が適切でなく、進んでは当時の皇帝の意向により、退いては世間の意向に従い、これを将来に残すには信頼を置き難いものでした。私は今謹んで改めて編纂し、新しい歴史書を完成させ、義煕元年(四〇五) から始めて、昇明三年（四七九）までを記録しました。桓玄、譙縱、盧循、司馬休之、魯宗之らは東晋王朝に対する反乱者で、のちの時代に関係がありません。吳隱、謝混、郗僧施は、東晋王朝の人物であり、宋の記録に入れるべきではありません。劉毅、何無忌、魏詠之、檀恁之、孟昶、諸葛長民は東晋の復興（桓玄打倒）の志はあったが、宋王朝を造る気持ちはなかったので、今すべて削除し、晋の記録であつかうことにします。)

「臣、遠く南・董を愧（は）じ、近くは遷（司馬遷）・固（班固）に謝し、閭閻（りょえん：*村里*）の小才を以て、一代の盛典を述ぶ。辭を屬（つらね）て事を比べ、古を望みて慚（は）ずこと良（ふか）く、鞠躬跼蹐（きっきゅうきょくせき：*背をまるめ身をかがめ*）、靦汗亡厝（てんかんぼうそ：*恥じて汗が流れ死んだも同然*）。本紀列傳は、繕寫（ぜんしゃ：*補い清書する*）已に畢（をは）り、志と合せ表七十卷（本紀十、志三十、列伝六十）、臣今謹みて奏呈す。諸志を撰する所、成るを須（ま）ちて續きて上（たてまつ）る。謹みて目錄を條（じょう：*箇条書きする*）し、省に詣（まか）り拜表奉書すを以て聞こしめせ。臣約、誠に惶（おそれ）誠に恐（かしこむ）、頓首頓首！死罪死罪！」

（私は遠くは春秋の南史・董狐に恥じ、近くは司馬遷・班固に恥じ、いなかのけちな才能をもって一代の重要な記録を述べたので、その叙述は昔のりっぱな歴史家に対して恥ずかしく、身の置場もなく、汗顔の至りでございます。

本紀と列伝は編纂が完了しており、すべて七帙七十巻を、私は今謹んで奏上奉呈致します。編纂中の諸志については、

完成をまって上呈致します。謹んで目録を記載し、省に至って拝礼上表し本書を奉呈申し上げます。臣約誠惶誠恐，頓首頓首！死罪死罪！）

沈約の故郷は、江南の呉興（ごこう）郡である。後漢の光武帝の頃、兗（えん）州済陰（せいいん）郡（山東省定陶県西北）に居り、沈戎（しんじゅう）に功あって海昏（かいこん）県候（江西省南昌市）に封じられたが固辞し、会稽郡烏程県の余不郷に移住し、そこで生活を始めた。順帝の氷建元年(126年)に、会稽郡が分割され呉郡が設置され、霊帝の時代には、島程・余杭岡県を分割し永安県が設置され、呉の孫晧のとき、呉郡から呉興郡が分割された。呉興郡は土地が卑湿で、水害多発地帯であった。祖先は、秦末の沈逞まで辿ることができ、尚書関係、軍事関係に携わり、その時々重要な役割を果たしたが、権勢欲はなく、表に出ることを避ける家系であった(１)。沈逞（しんてい）以前は不確かで、沈氏の由来を、史家として手本とした「春秋左氏傳」を引用し、臺駘（たいたい）という汾水の水神を祖先とした。昭公元年条(2)によれば、臺駘は、帝少暭（しょうこう）金天氏の裔子（遠い子）の昧（まい）という水官の長の子であり、帝顓頊（せんぎょく）により汾水に封じられ、大原に居した。これを祀った四氏、沈（しん）･姒（じ）･蓐（じょく）･黃（おう）の沈氏がその祖先といふ。沈国は、周の文王の第十一子、耼叔季（たんしゅうき）の采邑とされるが、沈約は春秋左氏傳、定公四年（BC506年）を引いて、晋が沈を蔡に伐たせて、沈子嘉が晋に連行されて以降、系譜が不明となったとしている。

沈約の父、璞（ぼく）は文帝（劉義隆）に見込まれ、揚州主簿（文書、簿籍、及び印鑑を主管し、一些の文件を起草する）に任命され手堅い運用で信任を得、北魏の侵入を食い止めた功績を臧質に譲っている。ところが、皇太子劉劭（りゅうしょう）が文帝を殺して即位するという事件で、嘆きのあまり身体を壊し、劉駿（りゅうしゅん：孝武帝）に参陣できなかったことを讒訴され、処刑されてしまった。

　父の兄、亮（りょう）は三呉地方の洪水による飢饉対策や墓の盗掘対策を献策し、民力向上を図り、文帝に認められ南陽太守に就任した。南陽（宛）は武関、函谷関から関中へ通じる北方への要衝であり、その守りと周辺蛮族の教化にあたった。ここでも劉駿に献策し、農業振興、堤防の修復、耕地の開拓、学校を開き、礼による教化により成果を挙げ、義成太守となっている。著した詩・賦・煩・讃・三言・誄・哀辞・祭告請雨文・楽府・挽歌・連珠・教記・白事・牋・表・籤・議一百八十九首とされる文人でもあった。

　亮の兄、邵（しょう）は、父の林子と文帝との君臣関係から宮中に入り、欠員であった強弩将軍を拝命し、地方に出て鍾離太守を勤め、恵政であったとの評判で、中央に戻り通直散騎侍郎となり、文帝に直接意見を申し上げる信任を得た。劉紹が江州刺史であったとき、邵は文帝の意向を受け寧朔将軍・安成相に就き、孤児や老人を救済し、農業を奨励し、何度も賞賜を受けている。

　この三兄弟の父の林子は、十三才の時、孫恩の乱に巻き込まれその一味との嫌疑を受け、兄弟ともども逃亡生活を余儀なくされていた。孫恩の部下達は、略奪の限りを尽くしていたが、林子は、軍政厳明であった劉裕（後の武帝）の軍に助命、帰順し、京口に居を与えられ、学問を治め十八才のとき、劉裕の軍に加わり桓玄打倒、建康平定に従軍し、劉裕が揚州刺史となると、資中県五等侯に封建された。察洲まで進軍してきた盧循軍との戦いにおいて、劉裕の別軍を率いて功を挙げ、劉裕の中軍将軍府の参軍に任じられた。後秦の姚泓（ようこう）平定における、林子の手腕は高く評価され信任も厚く、劉裕が劉義隆（後の文帝）を鎮西将軍に昇格すると、林子は鎮西将軍府中兵参軍に任じられ、建威将軍・河東太守を加へられた。劉裕が即位すると(420年)、林子はその功績によって、漢寿県師、食邑六百戸に封建された。林子は、ゆったりとして清廉で、世俗の雑事にかかわろうとせず、謙譲の美徳が家族に著われ、従軍中においても、軍事に言及しなかった。著した詩・賦・賛・三言・箴・祭文・楽府・表・牋・書記・白事・啓事・論・『老子』一百二十一首。文帝は後に林子の文集を読み、嘆息して、「この人が公(大臣)となったなら、王弘の後継者となっていたにちがいない。」 といった（４）、とされる。

これらのことからすれば、沈約は父や伯父、祖父から宋の建国について聞き及び、自らも宋、斉、梁の時代を生き、まさに、政権の近くにいて、直近過去、同時代の百年史を編纂する立場にあったことが分かる。我が国でいえば、昭和の大本営の情報官が明治から太平洋戦争敗戦までの歴史を戦後に編纂するような時間的感覚であろうか。宋書の倭国伝は列伝の第五十七、夷蛮の中にある。第五十六は鮮卑（せんぴ） 吐谷渾（とよくこん）、第五十八は氐胡（ていこ）となっており、列伝の最終部分に当たり、沈約が資料を集めて編纂したとみるべきであろう。

（1）注『宋書』沈約自序 (一)　P30、北海道大學文學部、川合 安助教授

（2）「昔金天氏に裔子有り昧と曰う。玄冥の師と爲り、允格･臺駘を生む。臺駘能く其の官を業にし、汾･洮を宣し、大澤に障して、以て大原に處れり。帝申ねて之を嘉して、諸を汾川に封じ、沈･姒･蓐･黃實に其の祀を守りしを、今晉汾を主りて之を滅ぼせり。是に由りて之を觀れば、則ち臺駘は、汾の神なり。」春秋左氏傳、昭公元年、（[黙斎を語る会](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/shunjuu/shunjuu_20_shoukou1_body.html)）

（3）「三月、公劉子･晉侯･宋公･蔡侯･衛侯･陳子･鄭伯･許男･曹伯･莒子･邾子･頓子･胡子･滕子･薛伯･杞伯･小邾子･齊の國夏に召陵に會して、楚を侵す。夏、四月、庚辰、蔡の公孫姓師を帥いて沈を滅ぼす。沈子嘉を以て歸り、之を殺す。」春秋左氏傳、定公四年（[黙斎を語る会](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/shunjuu/shunjuu_27_teikou1_main.html)）

（4）以上要約、訳注『宋書』沈約自序 (一)　(二)、北海道大學文學部、川合 安助教授

**２．****高句麗傳**

　「三国史記」等のテキストと訓訳は、[古代史獺祭](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sitemap/sitemap.htm#map_3gokushiki)、[古代史日中韓三国](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/)　を、「北史」は、[にゃんごたん 日本語化パッチ](http://nyasanjpn.comli.com/)を参照、参考にさせていただいた。倭の五王の問題点については「倭の五王　空白の五世紀」　坂元義種　教育社に学んだ。

　東晋、宋にとって、朝鮮半島諸国や倭国が如何なる意味をもっていたのか？洛陽を中心とする魏や晋の時代とは異なる。西晋は八王の乱で弱体化し、316年に劉聡により滅ぼされ、西晋琅邪（ろうや）王であった司馬睿が、江南の建業（建康）に逃れ、317年に東晋を建国している。北方では、北魏が436年に北燕、439年に北涼を滅ぼし華北を統一するまでは、五胡十六國といふ不安定な状態にあり、東晋や宋がこれに対応する意味で、朝鮮半島の勢力を手中に置くことが肝要であった。これは三国時代に呉の孫権が公孫淵を燕王に任命し魏を挟撃せんとし、公孫淵が魏に寝返ると、高句麗王を単千（ぜんう）に叙し、公孫淵に圧力をかけたことを想起せしめるものがある。

　高句麗は半島南の百濟や新羅との関係もさることながら、自らの北方の契丹、西方の中国の動向に神経を尖らせていた。三國史記、高句麗本紀によれば、美川（びせん）王（300年－331年）は三年（302年）に、兵三万を率ゐて玄菟郡に侵攻、捕虜八千人を獲得し、これを平壤に移し、十二年（311年）に、遼東郡西安平県を略取、十四年（313年）に、楽浪郡に侵攻し、男女二千余人を捕虜とし、十五年（314年）に、南の帯方郡を侵略している。これに脅威を感じていた前燕は、鮮卑族慕容翰（ぼようかん）の献策により、342年に故國原（ここくげん）王の丸都（がんと：王都：吉林省集安）を攻め落し、城を毀し、生母を質に取り、美川王の墓を暴き、府庫から宝物を奪い取り、男女五万余人を虜囚として連れ帰っている。翌年、故國原王は、平壌の東の黄城に移住を余儀なくされ、前燕に朝貢し藩臣（はんしん）の礼をとり、美川王の屍を引き取ることができたものの、生母を取り返すことができたのは355年、13年を要す屈辱を味はった。前燕からは、都督營州諸軍事（營州軍司令官）、征東大將軍、營州刺史（しし：長官）、楽浪公王に封冊されたが、高句麗が平壌へ南下したことは百濟を圧迫することとなった。故國原王は、369年二万の軍で百濟を攻めるが破れている。ところが、370年に前燕は前秦の孟に討伐され、前燕の太傅の慕容評が平壌に逃げ込むという事態となり、王は慕容評を前秦に送り、前秦との新たな関係が始まった。その翌年の371年には百濟の近肖古（きんしょうこ）王に平壤を攻められ、故國原王は流れ矢に当たり死亡してしまった。

　この敗戦により、小獸林（しょうじゅうりん）王は平壌から北に退き丸都に戻ったのであろう、372年、前秦王の苻堅（ふけん）に帰順し、浮屠（仏教）への順道を受け入れ、同時に文教政策を導入し、儒教に基づき大學を建てて子弟敎育をはじめ、また、律令を定めたとされ、中国風の中央集権国家づくりの基盤を整へようとした。百濟の近肖古王が強力化したのも、楽浪郡経由でもたらされた漢文化の受容、漢人登用による国家づくりにあった。軍事力というものが、部族連合レベルでなく、国家という組織づくりがあってこそ、人的、経済的継続力を維持できることを学んだといふべきであろう。小獸林王は、377年に前秦に朝貢をしているが、南での百濟、北方での契丹との戦いに対する西方での安定を求めるものであったろう。377年に百濟の侵攻を受け、378年に契丹に北方の8部落を奪われおり、軍事的には守勢に立たされていたものの、国家づくりの基礎は小獸林王によって固められていた。ところが、383年、華北を統一した前秦の符堅は、東晋征伐の大軍を発したが、「淝水（ひすい）の戦い」で大敗北を喫して滅び、華北一帯は再び群雄割拠の時代に戻った。

　小獸林王の弟、故國壤（ここくじょう）王は、385年この機に遼東へ出兵し、一時占領するが、前燕の時代から遼東地方は鮮卑族慕容（ぼよう）氏の勢力範囲にあり、逆に、慕容農により遼東・玄菟二郡を占拠される結果となった。高句麗が国力を整へたのは、故國壤王の子、広開土王、談德（だんとく）の時であった。391年百濟と契丹を攻略し（１）、394年に百濟を海戦でやぶるも（２）、遼東における後燕との衝突が激しく（３）、半島の南制圧に十分力を注ぐことはできなかった。405年の冬十二月に、後燕の熙（き）が契丹を襲い、押し込まれた契丹が高句麗に侵入する事態となるが、熙の寒期の行軍は疲労と凍傷により兵馬を損ない失敗に帰し（４）、熙は407年に部下の馮跋（ふうばつ）に殺され、慕容雲が北燕王となるが、慕容雲の祖父の高和は、高句麗の分家にあたり、高句麗と北燕との緊張は緩和する。談德は、410年に東扶余（ふよ）を討った後没し、413年に次の長壽王、璉（れん）の時代を迎へることになった。

　宋書においては、長壽王は高璉と記される。高句麗の支族の庶子の高和が、自らを高陽氏の苗裔（びょうえい）とし、東晋や宋に対して、中国風の姓、「高」を用ゐたのであろう。安帝、義熙九年（413年）に朝貢し、使持節（皇帝から軍令違反者に対する処分の権限を与えられ、九卿よりも下の官職であれば独断で処刑できる。）、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公に叙されていた。劉祐（武帝）が宋を開いたとき（420年）、持節（処分権）、都督（軍司令官、長官）、王、公については、そのままを踏襲し、三年に、散騎常侍（皇帝に騎馬で従ひ、助言できる位：直属機関、勅書関係）を加へ、督平州諸軍事を增した（５）。少帝の景平二年（424年）（６）、璉は答礼で長史の馬婁（ばろう）を派遣し、朝貢している。両者間の共通する関心は北燕の後に進出してきた北魏であった。

　北魏は鮮卑族拓跋（たくはつ）部の珪（けい）の時、前秦が淝水の戦いで東晋に敗れた機会を捉へ、鮮卑各部を統一し、398年に平城（山西省大同）に進出し、北方の旧俗を捨て、官制・律令を定め、北方人も漢人と同じく戸籍に編入する漢化政策により急速に力をつけてきた。珪の子、嗣（し）は漢族の賢人を各地から集め、新たに帰属した民に農具を供給し、農業生産に力を注いだ。劉裕が416年に、後秦を討つために洛陽を落とし、長安に攻め入った時、姻戚関係にあった嗣は救援を求められたが、劉裕が長安を維持はできないとみて、動かずその力を温存した。逆に、422年には宋を攻め、兗・青二州を占領している。425年高句麗は、この事態に北魏へ朝貢の使者を送っている。427年には丸都から平壌に遷都し、北燕、北魏と宋との四元外交を始めた。北燕は馮跋の子、弘（こう）の時に北魏から度々攻められ、438年には弘が高句麗領内に逃げ込み、宋に救援、保護を求める事件となった。弘は毎年宋に朝貢をしており、太祖（文帝）は王白駒（おうはくく）、趙次（ちょうじ）を派遣して保護をしようとしたが、璉はこれを嫌い、孫漱（そんそう）、高仇（こうきゅう）を送り弘を殺した。王白駒、趙次は孫漱を生け捕りにし、高仇ともども殺してしまった。435年、璉は北魏に使者を入れ朝貢し、都督遼海諸軍事、征東將軍、領護東夷中郞將、遼東郡開國公、高句麗王に叙されており、宋を牽制するような動きをすることが可能となっていた。北魏、嗣の子、燾（とう）は、北魏の北方の柔然（じゅうぜん：匈奴）の侵犯に対応するため、当初、宋との修好を求めたものの、柔然に親征して高車族三十余万を帰服させ、426年長安を占領していた夏を攻め取り、逃れた夏が431年に、吐谷渾に滅ぼされると、436年には、北燕の弘を攻め、439年北涼の沮渠牧（しょきょぼ：牛建）も滅ぼして、華北を統一していた。

　439年文帝は北魏を討とうとして、璉に馬を求め、璉は馬800頭を送っている。馬を求めるのみならず北魏に圧力をかけることを要請されていたであろう。しかし、璉は437年、439年に魏に入貢していた（９）。百濟と新羅との緊張があり、北魏との関係も良好に保つ必要もあった。450年に北魏は、宋に攻め込み、長江を渡る直前に引き返したのであるが、北魏軍の通過した郡県は荒涼を極めたといふ。孝武帝の代となり455年に高句麗は長史の董騰を派遣して朝貢し、その国難と復興を慰めている。459年には肅慎氏にも朝貢させ、使持節、散騎常侍、督平營二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公に、車騎大將軍、開府儀同三司（かいふぎどうさんし）が加えられた。車騎大將軍は、大將軍、驃騎大將軍に続く將軍の位であり、將軍となれば將軍府を置き、長史、司馬、諮議参軍を置くことができ、開府の特に重いものを開府儀同三司（10）と称し、三公と同じ礼遇となり、藩屏であった璉に対する異例の叙授であり、期待の大きさが知られる。（[地図](http://nazow.matrix.jp/nazow/wh/c-a.htm)：後漢から隋までの歴史地図）

　宋は北魏を牽制するために、北涼の沮渠牧（しょきょぼく）を、持節、散騎常侍、都督涼・秦・沙四州諸軍事、征西大將軍、領護匈奴中郎將、西夷校尉、涼州刺史、河西王に封じており、この北涼と宋を結び付ける役割を果たした吐谷渾の慕延（ぼえん）を使持節、散騎常侍、都督西秦・河・沙三州諸軍事、鎮西大將軍、領護羌校尉、西秦・河二州刺史、隴西王に、仇池（きゅうち）の楊玄を使持節、征西將軍、平羌校尉、北秦州刺史、武都王に封じている。吐谷渾は、北涼と宋のみならず、柔然との仲介の役割も果たしていた。このような相関関係は高句麗からすれば、必ずしも一致しない。北の契丹、南の百濟、新羅からの脅威のある高句麗は、宋の厚遇はさておき、462年以降はむしろ宋より北魏への傾斜を深めていた。

（１）「秋七月、南に百濟を伐ち、十城を拔く。九月、北に契丹を伐ち、男女五百口を虜とす。又、本國陷沒の民口一萬を招諭して歸す。冬十月、百濟關彌城を攻陷す、其の城の四面峭絶にして、海水環繞し、王軍を七道に分け、攻撃二十日。乃ち拔く。」「三国史記」高句麗本紀　広開土王

（２）「四年秋八月、王、百濟と水の上に戰ひ、大きに之を敗る。虜、八千餘級を獲る。」「前掲書」

（３）「九年春正月、王、使を遣はし燕に入りて朝貢す。二月、燕王盛、我王の禮慢を以て、自ら將兵三萬にて之を襲ふ。以て驃騎大將軍、慕容熙を前鋒と爲し、新城・南蘇の二城を拔く。地七百餘里を拓き、五千餘戸を徙し還る。十一年、王兵を遣はし宿軍を攻む、燕の平州刺史、慕容歸、城を棄てて走る。十三年冬十一月、師を出し燕を侵す。十四年春正月、燕王熙、遼東城に來攻し、且陷す。熙、將士に命じ、先に登るを得る毋（な）く、其の城を平にすを俟（ま）ちて、朕と皇后乘りて入らむとす。是に由り、城中備を嚴しくすを得、卒（つひ）に克たずして還る。」「前掲書」

（４）「十五年冬十二月、燕王熙契丹を襲ひ、北に至る。契丹の衆畏れて、還るを欲す。遂に輜重を棄て、輕兵にて我を襲ふ。燕軍、三千餘里を行き、士馬疲れ凍へ、死者路に屬（つづ）く。我が木底城を攻め、克たずして還る。」「前掲書」

（５）「東夷の高句驪國、今漢の遼東郡を治む。高句驪王は、晉の安帝、義熙九年（413年）に、長史の高翼を遣はして表を奉り赭白馬を獻ず。璉を以て使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公と為す。高祖踐阼して、詔して曰はく、「使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公璉。使持節、督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王映。并せて海外に義を執り、遠く貢職を修む。惟れ新たに告始し、宜しく國休(安)を荷ふ。璉は征東大將軍に可し、映は鎮東大將軍に可し。持節、都督、王、公は故の如し。」三年、璉に散騎常侍を加へ、督平州諸軍事を增す。」宋書、列伝の第五十七、夷蛮、高句麗傳　。

（６）少帝の景平二年（424年）、璉、長史の馬婁等を遣はし、闕（宮門）に詣りて方物を獻じ、遣使これを慰勞す。曰はく、“皇帝、使持節、散騎常侍、都督營平二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公に問ふ。戎を纂（あつ）め東に服し、庸績を繼軌し、厥（そ）の惠既に彰れ，款誠（忠誠）亦た著らかで、遼を逾へ海を越へ、本朝に納貢す。朕、以て不德、鴻緒（皇統）を忝承し、先蹤を永怀（懐）し、遺澤を思覃（深思）す。今、謁者の硃邵伯、副謁者の王邵子等を遣はし、慰勞を宣旨（下知）す。其の茂康と惠政、厥の功を永隆し、式昭往命、朕の意を稱す。” 「前掲書」

（７）是の先、鮮卑の慕容寶、中山を治む。索虜（北魏）破る所と為し、東に黃龍に走る。義熙の初め(405年)、寶の弟熙は其の下、馮跋の殺す所と為し、跋、自ら立ちて主と為し、自ら燕王と號す。其の黃龍城を治むを以て、故に、之を黃龍國と謂ふ。跋、死して、子の弘が立ち、屢（しばしば）索虜攻むる所と為し、下る（継位する）こと能はず。太祖（文帝）の世、每歲、使を遣はし方物を獻ず。元嘉十二年、除授を加へて賜はる。十五年（438年）、复、索虜攻むる所と為し、弘、敗走し、高驪（高句麗）の北丰（豐）城に奔り、表して迎接を求む。太祖、使を王に遣はし白駒、趙次興に之を迎へ、并はせて高驪をして料理(世話)をし資（たす）け遣はせしむ。璉、弘をして南すを欲せず、乃ち將、孫漱、高仇等を遣はし襲ひて之を殺す。白駒等所領七千余人を率ゐ漱等を掩討し、漱を生禽し、高仇等二人を殺す。璉、白駒等專ら殺すを以て、使を遣はし執りて之を送り、上（太祖）、遠國を以て、其の意違ふを欲さず、白駒等獄に下し、原（ゆる）さる。「前掲書」

（８）璉每歲使を遣はす。十六年（439年）、太祖北を討つを欲す。璉に詔して馬を送らしむ。璉は馬八百匹を獻る。世祖（孝武帝）孝建二年（455年）、璉は長史の董騰を遣はし、表を奉り國哀再周を慰め、并せて方物を獻る。大明三年（459年）、又、肅慎氏、楛矢と石砮を獻る。七年（463年）、詔して曰はく、“使持節、散騎常侍、督平營二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公の璉、世事に忠義、海外に籓を作し、誠に本朝に系る。志を剪し險しきを殘し、譯を通じ沙表し、克く王猷を宜す。宜しく褒進を加へ、旌を以て純節。車騎大將軍、開府儀同三司と可し、持節、常侍、都督、王、公、故の如し。”太宗の泰始、后廢帝元徽の中、貢獻絕へず。「前掲書」
（９）「二十五年の春二月、使を遣はし魏に入り朝貢す。」「三国史記」高句麗本紀　長壽王　二十五年（437年）
「二十七年の冬十一月、使を遣はし魏に送りて朝貢す。十二月、使を遣はし魏に送りて朝貢す。」「前掲書」　二十七年（439年）

（10）開府儀同三司は漢の官なり。殤帝（しょうてい）の延平の元年に、鄭騭（とうしつ）を車騎將軍、儀同三司と為す。儀同の名は、此より始まる。魏に及び黃權（こうけん）、車騎將軍、開府儀同三司を以ふ。開府の名、此に起る。・・・諸公及び開府位により公たる者は、品秩第一、食、日五斛（と：180ﾘｯﾄﾙ）を奉る。太康二年、又絹を給すこと、春百匹、秋絹二百匹、綿二百斤。・・・諸公及び開府位による公、持節都督と為り、參車を增し六人と為し、長史、司馬、從事中郎、主簿、記室督、祭酒、掾屬、舍人は常の如くして、兵を加ふを公制とす。晋書、志第十四「職官」

**３．****百濟傳**

広開土王（談德）碑によれば、399年高句麗の奴客として臣従することを誓った百残（百濟）が誓いを反故にして倭と通じ、新羅の救援要請に応じて、談德は、400年五万の歩兵と騎兵を派遣し、新羅から倭兵を追い払い、任那加羅の城をも抜いた。しかし、空になった新羅を安羅が落していた。安羅と倭は通じており、再び倭が城に満ち、城民が逃散した（１）。一旦は倭を任那加羅まで追い落としたが、安羅に背後をつかれ、談德は退却を余儀なくされたことになろう。といふより、高句麗は、401年に平州、遼東において燕の慕容歸（ぼようき）を攻め、新城（撫順）・遼東城（遼陽）を占領しており（２）、さっさと兵を引いてこれに備へたのであろう。402年に新羅が倭に質を入れ（３）、403年に百濟が倭の使者を迎へ新羅を攻めており（４）、倭が百濟との関係を基軸に、依然として、新羅をも影響下に置いていたことになる。404年燕王の熙（き）が遼東城を攻め（５）、405年に契丹を攻めた時、この機を狙ったように倭が404年帯方郡に侵入してきた。談德は396年に水軍で百濟を討ったごとく船を連ね、平壌に入った倭の後方に回り、倭を挟み撃ちにし潰滅状態に陥いれている（６）。ところが、同年冬十二月に、燕王の熙の契丹攻撃により、圧迫を受けた契丹の一部が高句麗を襲い、談徳は平壌、帯方方面から早々に引き揚げざるを得なかったのであろう。倭と百濟にとっては幸いとなった。ところが、燕はこの冬の遠征に失敗し、407年熙が部下に殺され（後）燕は滅亡し、高句麗の支族の庶子の高和を祖父とする雲が王となり、談德は、407年春三月に、使者を（北）燕に遣はし、雲を宗族に叙し、この方面で優位に立つことができるようになったことはすでにみた。
　百濟では405年阿莘王が亡くなり、倭に質となっていた太子、腆支（てんし）を倭は兵士百人で衛送し、王となっていた阿莘王の弟を国人が殺し、腆支が即位した（７）。405年倭が新羅を攻め新羅がこれを撃退し（８）、407年にも倭が新羅の東や南を侵している（９）が、双方共、一方的勝利が得られる状態ではなかった。同年、談德は、再び歩騎五萬をもって、百濟側に一万余の損害を与へ(10）、撃ち破ったものの、翌年には、倭が対馬に兵站基地を設けており(11）、高句麗が決定的な勝利を得るには至っていなかった。すでにみたごとく、後燕、契丹、扶餘との対応に追われ、談徳は平州、遼東、東扶餘(12）を固めたようである。412年に新羅から質をとっており(13）、冬十月に談徳はその生涯を終へる。

沈約の前には陳寿（ちんじゅ：233-297）の「三国志、魏書、馬韓傳」、范曄（はんよう：398-445）の「後漢書、馬韓傳」があった。中国人にとって、馬韓、辰韓、弁韓は知られていたが、百濟は聞きなれない言葉であった。高句麗を討ち、馬韓、楽浪、遼東、遼西、晋平を平定し、369年、廃帝（はいてい：海西公、かいせいこう）の東晋と結び、372年新たに即位した簡文帝（かんぶんてい）から「鎮東将軍領楽浪太守」に叙せられた近肖古王は何者か？「百濟」といふが、後漢書、馬韓伝で范曄が記した「伯濟」のことか(14）？中国王朝に彗星のごとく現れたものの、高句麗王の談德の時代には、近肖古王はもはや過去の人となっていた。大陸の王朝交代に敗れた者が遼東そして半島の南まで逃れる長い歴史があり、漢の武帝が楽浪郡を置いて漢人による統治を行って以来、漢文化を吸収し、馬韓、辰韓、弁韓も変貌し、百濟、新羅、加羅諸國の勃興があった。近肖古王は、建光元年(121)に、濊とともに玄菟郡を包囲する勢いがあった馬韓(15）の流れを汲むものといふ。始祖の温祚（おんそ）は高句麗の始祖朱蒙（しゅもう）の子(16）、扶餘人というが本当か？北の出なのか？南の出なのか？実際、どこまで扶餘で、どこまでが馬韓なのか判然としないのが実情である(17）。

このことに関する中国人の認識に決定的な影響を与えたのは、百濟王余慶（蓋鹵王）が472年に北魏に使者を送り高句麗を攻めるよう要請したとき、百濟と高句麗は、同じく扶餘の出であるが、近肖古王の時、高句麗と袂を分かち、これを攻めたと上表したことである(18）。百濟は、自らがかつて高句麗を凌駕した勢力であった時のことを持ち出し、意図的に高句麗と同じ扶餘人の部分を強調したのかもしれない。これは、北斉の魏収（ぎしゅう：506-572）が編纂した北魏の正史、「魏書」に記されたもので、本紀と列伝の部分は、554年に成立しており、沈約の記述とともに、以降この見解が中国人の見方の主流となった。しかし、近肖古王の時、高句麗と袂を分ったといふのは乱暴に過ぎ、六朝から唐時代に、更に詳細な検討が行はれた。

魏収は、百濟の先祖は扶餘出身で、高句麗から千餘里の小海の南に居り、その民は土着、土地が湿地なので、皆を率いて山に住んだと記した(19）。梁書、百濟伝において、陳の吏部尚書の姚察の子、姚思廉（ようしれん:557-637）は、百濟は馬韓の中から強大となり、西晋の八王の乱のころ高句麗が遼東に進出していた時、本は高句麗と一緒であったが、遼西の晋平二郡を占拠したと記した(20）。ところが、この「晋平二郡を占拠したのが誰で」「馬韓人と扶餘人がどのようにして百濟人となったのか」が説明されておらず、問題が残った。范曄は、後漢書において、玄菟郡を包囲した濊と馬韓を討つために扶餘王が派遣した尉仇台（いきゅうたい）に注目し、この尉仇台が馬韓の地にやってきたとみた。陳寿は、三國志魏書、馬韓伝で、かつて、衛満に追はれた朝鮮の準候が、海を渡り船で韓の地に逃がれ、そこで韓王として統治をしたことを記した(21）。馬韓の北にはそのような歴史があり、それが受け入れられていた。初平元（190）年に遼東地方に独立政権を立てた公孫度（こうそんたく）が高句麗を攻撃したとき、扶餘を取り込むために、公孫度は女（むすめ）を尉仇台に娶せ、尉仇台が百家で馬韓の地に濟（わた）ったことから百濟となった(22）、と北史、百濟伝（李延寿によって659年に完成された）は記した。故地に残った扶餘と馬韓に渡った扶餘といふ認識である。しかし、建光元年（121）の尉仇台が初平元年（190）と同一人物とするには年齢が合致しない。

また、310年代に、高句麗の美川王が玄菟郡、遼東郡、楽浪郡、帯方郡を侵略したとき、平州は、晋の平州刺史、崔毖（さいえん）が治めており、鮮卑の慕容廆（ぼようかい）と対峙していた。慕容廆が崔毖を破り、崔毖が高句麗に逃れ、慕容廆が平州に政権を樹立したのが歴史であり、百濟がこの地を領有していたという記述も合致しない。しかし、何故か、この見解は、「通典」を編纂した唐の杜佑（とゆう：735-812）に受け継がれ、尉仇台が百濟を開き、晋の時、高句麗が遼東を得たとき、百濟が遼西、晋平二郡を拠有し、以降諸国を併合して馬韓故地も拠有した(23）と定着した。

百濟本紀は、沸流（ふつりゅう）と温祚（おんそ）兄弟が朱蒙のもとを逃れて、十臣と共に河南の慰禮城で国を開き、「十濟」と号したとする。沸流は一時、彌鄒（仁川）で暮らしたが、再び戻り百姓（百の氏族）が戻ったことにより、國号を「百濟」としたといふ(24）。その南の馬韓を紀元10年に併合し(25）、この地で一貫して百濟であったとするが、これも歴史の現実とは合致しない。汾西王（ふんせいおう：298 - 304年）が、楽浪郡の西の県に密かに船で兵を渉し、西から攻撃して占拠をした(26）といふ記述があるが、遼東、遼西、晋平を平定するといふは、近肖古王を待たねばならない。

中国に残存する史書において、百濟に言及した最初の記述は沈約のものであろう。彼が、「百濟國、本は高驪と俱に遼東の東千余里に在り、其の后、高驪遼東を略有し、百濟遼西を略有す。百濟治む所は、之を晉平郡晉平縣と謂ふ。」としたことが引き継がれた。しかし、遼西、晋平についての彼の言及は、近肖古王の事跡を示したにすぎない。

近肖古王は、漢人、漢文化を取り込み、部族連合から律や令を備えた中央集権的国家建設に乗り出し、高句麗を破り、北は、遼東、遼西、晋平二郡まで、南は馬韓といふ広大な地域を併合することになる。ところが、このあまりに急速な軍事的膨張は、百濟のみではまかない切れなかった。高句麗と新羅を抑へるために、近肖古王は、369年、廃帝の東晋と結び、372年新たに即位した、簡文帝から「鎮東将軍領楽浪太守」に叙せられ、外交的には目的を果たした。しかし、叙授の権威はそれを実効たらしめる軍事的裏付けが必要であり、倭の軍事力で新羅や南方面に備へざるを得なかったのであろう。談德の時代となれば、倭軍が百濟の前面に出るという展開をみせていたが、沈約はその現実に気付いていたわずかな中国人の一人であった。

談德の時代以降は、陸路で東晋へ朝貢する百濟のルートは、高句麗との友好なくしては成立せず、南燕が山東半島を抑へており、海路も困難となっていた。これが回復するのは、劉裕が410年に南燕の慕容超（ぼようちょう）を滅ぼし、海路が開けてからのことである。416年に百濟王、余映（腆支）の朝貢が可能となり、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王に叙され、高祖（劉裕）即位(420年)の時、鎮東大將軍を號（なづ）けられ、少帝の景平二年（424）長史の張威を朝貢させ、元嘉二年（425）、太祖（文帝）より、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王に叙された(27）。鎮東大將軍とは東夷を平定する義であるが、征東大將軍の格下になる。北魏との対応からすれば、宋にとっては高句麗の重要性ははるかに高いが、高句麗を牽制できる百濟の存在を手中に置くことは意味があったろうし、周辺国の入貢を好むのが中国王朝であった。

これらは沈約が生まれる前の出来事であったが、これらの朝貢により、百濟に関する情報は豊かになっていたはずである。472年に北魏に百濟王余慶（蓋鹵王）が使者を送って述べたことは、当時31歳の沈約にどのように伝はったかは分からない。彼が宋書を編纂し終えたのは46歳（487年）であり、彼が占めた地位、事件を客観化して見ようとする態度からすれば、これらの情報を総合して、百濟傳の記述を完成させたと考へていいだろう。

百濟が宋に求めたことは、高句麗の南下政策への牽制であった。そのため百濟は宋に軍事情勢を伝へ、助力と叙任を求めたのであろう。百濟にとって、高句麗が427年に丸都から平壌に遷都したことが脅威となった。412年に質を高句麗に送っていた新羅にとっても微妙な展開となっていた。百濟王、余毗（毗有：腆支の孫）は、433年、434年に新羅に使者を出し馬や鷹を贈り、関係改善を図っている(28）。430年に余映（腆支）と同じ爵号を授かり(29）、宋との関係を確かなものとして、新羅との関係修復を行い、高句麗と対抗することが、新羅の利益と合致する状況が生まれていた。この間、431年、440年、444年に倭は新羅を攻めており(30）、倭と百濟は新羅に対して共同歩調を取ってはいなかった。むしろ、新羅と百濟が連携をはじめていた。宋が北魏に攻め込まれた450年には、高句麗と新羅の辺境で、猟に出た高句麗の辺将が新羅の城主に不意打ちを受け殺されるという事件が発生し、新羅が謝罪して事が収拾したが、以降、両者の関係は悪化する(31）。454年高句麗は新羅の北辺を侵し(32）、455年に高句麗が百濟を侵した時、新羅は之を救援している(33）。この時期、高句麗の南下政策が百濟と新羅の共通の脅威となっていた。

450年の百濟の入貢は、この状況からすれば、高句麗との対抗上、軍事的に領土を安堵できるような叙任を再確認したいところであったろう。しかし、北魏との対抗上、高句麗の協力を優先する宋の立場からすれば、応じられるものではなかった。百濟が得たものは、《易林：「周易」に暦を配置したもの》、《式占：天盤と呼ばれる円形の盤と地盤と呼ばれる方形の盤を組み合わせた占い》、腰弩（腰を使って引っ張り上げ矢を張る弩）(34）であった。宋の制度、文化、技術を導入することも朝貢の大きな目的であるが、百濟にとっては満足すべきものではなかったであろう。百濟本紀では、百濟王、毗有、十四年（440）に「冬十月　遣使入宋朝貢(35）」と簡潔に記されているだけで、450年の入貢には言及がない。
　百濟のこの意向は、余毗の子、余慶（蓋鹵王）の時に実現される。宋にも政変があり453年に太子の劉劭（りゅうしょう）が弟の劉濬（りゅうえい）と父の文帝を殺し、第三子であった劉駿（孝武帝）がこれを討伐して帝位につく。その大明元年（457）に、余慶は使者を出し入貢し、除授を求め許されたとあり、改めて、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王を認められたのであろう。翌年には、配下の11名の自署将軍が宋から叙任された将軍とすることをゆるされた(36）ことになろう。沈約の記述は、太宗泰始七年（471）に百濟から貢献があったと記し、百濟傳を終へている。472年に百濟が北魏に入貢したことを無視した。何故書かなかったのか？彼の地位、立場からすれば、その内容は知っていたはずである。

沈約が無視した内容を確認しておく必要があろう。百濟が北魏に上表した内容(37）は、倭が宋に上表した内容を見るうえでも、興味深い。

余慶（蓋鹵王）は北魏に叙されたものではないが、冠軍將軍、駙馬都尉の弗斯侯、長史の餘禮、龍驤將軍、帶方太守、司馬の張茂等を派遣し、高句麗の非道を訴へ、追討軍の派遣を要請した。まず、高句麗が北魏への朝貢ルートを閉ざしていることを非難する。高句麗とは同じ夫餘の出であるが、須（近肖古王の子、近仇首王）が釗（故國原王）を討ったため、南（百濟）を顧みることはなくなったが、北燕が滅びてから高句麗は強大となり、臣（百濟）の国境を侵すようになった。この三十年間で財は尽き、軍事力も尽き、疲弊の極みにある。一将を派遣して、救援していただきたい。さすれば子弟を入れて、北魏に奉仕をいたしましょう。決して領土的野心はありません。今、高句麗の内部は、大臣が自らの族のみの利益を図り、殺戮をして罪を重ね、民の心は離反しており、滅亡の期にあり、これに加担すべきではありません。北燕や辺境、楽浪諸郡から連れ来られた兵馬は故郷に帰ることを願っており、北魏が征軍を送っていただくなら、戦はずして勝てましょう。臣も軍を率いて馳せ参じ命に服しましょう。高句麗の不義であること、南は宋に通じ、北は柔然に通じており、この害悪を今取り除くことをしなければ、将来の禍根となりましょう。440年に小石山の北の國の海中に10体の屍と馬具を見つけましたが、これは高句麗のものではなく、王（北魏）のものであり、臣の国（百濟）に向かうところを高句麗によって海に沈められたもので、臣下でなくとも、憤りを覚へる。この機を逃さず、敵を討ち名をあげたまへ、辺鄙（百濟）でありますが、万代まで信服しましょう。天下の大道を塞ぐ高句麗を取り除くため、鞍を献上いたしますので、どうかご出陣ください。

　魏書では、この要請を受けた北魏の対応が記されている(38）。長史の餘禮等を謁見したのは顯祖（献文帝）であった。献文帝は辺境から朝献を敢行した一行を禮遇（礼に則り遇）し、詔を宣下し、邵安を派遣して一行を送り返した。

　宣下の内容は、以下の通りである。

　帝は、五服（中華）の外より万難を排して朝献したことを労（ねぎら）ひ、天下清一にして、義行はれ遠方より民の慕ひ来る治世を誇り、余慶に詔した。卿（余慶）よ、義に順（したが）ひ、仁を以て守るなら高句麗とて恐れるに足らぬ。以前に使者を卿の国へ送り、海を渡るも帰り来ず、何も分からなかった。卿が持参した鞍は、中国の昔の物と比べたが、中国の物ではなかった。贋物を献上してはならない。志すことは別にあろう。

　高句麗が卿の朝献を阻み、卿の地を侵し、民を苦しめ、辺境に難を及ぼし、国が危急にあるとの訴へには誠があろう。そうであれば、義を広め、弱きを救ふため、直ちに軍を興すが、高句麗は先朝から藩屏となり、卿と諍い有りと雖も犯令の過ちはない。卿が始めて命により高句麗を討つべしと求めるにより、その事実を集め、検討したが、その理は立たない。使者を平壌に送り、原因や状況を調べたが、高句麗の返答には事理があり、法的にも問題はなかった。もし、それが間違いで、過咎が露見するようなことがあれば、軍を興して討つであろう。さもなくば、九夷の國は、道が行はれず、恩恵が齎（もたら）されないとして、肅慎氏のごとく、朝貢を疎かにしよう。

　卿は高句麗との情勢を現況、往年、風俗に渡り述べたが、贋物献上でよろしくないところもあるが、その大略には見るべきところがある。今、中夏（中華）は治まっているが、辺境の民を救い皇風を遠く広めたい。今の高句麗に問題はないが、もし、この意に従はないならば、卿と連携し軍を興す故、先頭となって勝利を挙げられよ。卿の進物はまだ届いていないが、卿の至心は明らかであり、返礼物を賜ふ。

　献文帝は、璉（長壽王）に邵安等を護送すべく詔を告げたが、邵安等が高句麗に着くと、璉は通過させず、邵安等は北魏に戻るしかなかった。献文帝は、これを厳しく責めた。475年に、邵安等を派遣したが、一行は東萊（とうらい：山東省東部）より海を渡って、餘慶に璽書を賜はむとしたが、風で漂流して果たせず帰国した。

　三国史記、百濟本紀によれば、餘慶は北魏が出兵しないのを怨んで朝貢をやめたとある。餘慶には余毗の如き新羅を巻き込み宋との外交を進める首尾一貫性がなく、孤立をしてしまったようである。一方、璉は百濟へ僧の道琳（どうりん）を間諜として送り、道琳は、碁を以て博奕好きの餘慶に取り入り、信を得たところで、国防のために城郭を整備させ、次いで、宮殿の修理、楼閣、高殿造営に至らしめ、人民を困窮、財政を破綻せしめ、人心が離れたところで、高句麗へと逃げ帰った。475年九月に、璉は百濟に侵入し、都城の漢城を陥落させ、餘慶を殺しており(39）、献文帝の試みは意味を成さないものとなっていた。

　百濟が北魏に進物を携へ使者を派遣するには、陸路では不可能であり、北魏の使者が東萊を経由したごとく、海を渡り迂回して平城に到着したのであろう。百濟が軍事的援助を求めること危急であり、宋にこれを期待することが出来ず、決死の覚悟で使者一団を派遣したものと思はれる。北魏がこれを禮遇したといふことは、中国王朝が如何に朝貢を重要視したかが分かる。これは高句麗を牽制するといふ視点もあろうが、高句麗がそのルートを閉ざすといふことは、周辺国が徳を慕って朝貢するという王者の風を阻害する行為であり、百濟が自らをもってそれを証しようとしたことは一理あった。

　璉（長壽王）は献文帝の意向に逆らひ、邵安を含む一行の百濟への道を閉ざした。献文帝は、これを厳しく責めたとあり、百濟の訴へは一定の効果をあげていた。実のところ、献文帝は、若くして俗世を厭うようになり471年に五歳の長男（元弘：孝文帝）に位を譲り、太上皇帝として粗末な別殿（崇光殿）で国事の報告を受ける立場にあった。しかし、帝は、472年十月には、蠕蠕（ぜんぜん：柔然）、吐谷渾遠征を行ひ(40）、翌年には、南方を討ち河南の牧（長官）で法を無視し、民の声を抑える者に、詔を下して使者を派遣し、風俗を観、獄を調べ、人材登用、窮民の救済を行はせ(41）、四年二月に巡行から帰還しており、軍事外交を主導していた。百濟の訴へに従ひ、高句麗に圧力を加へる意向はあったものと思はれる。472年八月に百濟が朝献し、帝は十月に遠征に出ており、献文帝が高句麗を厳しく責めたのは、平壌へ使者を派遣して事情聴取をしていることからすれば、時間的に見て、遠征前のことではあるまい。魏書によれば、473年二月、八月、474年三月、七月、475年二月、八月に、高句麗は使者を朝献させており、大きな問題となった形跡はない。献文帝は五年（475）十月には北郊で大規模な閲兵を行っているが、翌年（476）6月に二十三歳の生涯を閉じている。馮太后により毒殺されており、百濟との一件は過去のものとなってしまった。

この間、北史、魏本紀、「高祖孝文帝」によれば、北魏と宋の間に、聘問（へいもん）の使者が毎年往来しており、儀礼的関係は保たれており、宋からの使者が北魏において、このような百濟と高句麗の動向情報を収集していたかもしれない。百濟が北魏との関係樹立を策動しており、必ずしも宋一辺倒ではないという情報は、474年に朝献した高句麗の使者から宋に伝へられたとしても、おかしくはない。これは同時に、高句麗が北魏とも微妙な問題を抱へていたことを示すものであり、宋も慎重に推移を見守ったことであろう。自序にあるごとく、沈約は、徐爰が大明八年（464）まで記述した後を受けて禪讓革命「479年：順帝は、かつて自分を帝に擁立した蕭道成（しょうどうせい）に帝位を禅譲し、宋は滅びた。」までを埋め、全体を改めて監修しており、沈約がこれらの情報を蒐集しなかったはずはない。しかるに、百濟に関して、472年北魏朝貢以降のことについて、餘慶の死を含めて一切を記さなかったのは、どうも気になる。

（１）「九年己亥(399年）、百残（百濟）は誓を違へ、倭と和通す。王、平穰に巡下し、新羅、使を遣はして王に白（まう）して云く、倭人其の國境に満ち、城池潰破し、奴客（高句麗に臣従した新羅）を以て民と爲す。王に歸し命を請ふ。太王■慈衿其忠誠■遣使還告以■■十年庚子(400年）歩騎五萬を敎遣し、住（ゆ）きて新羅を救ふ。男居城より新羅城に至るに、倭其の中に満つ。官兵、方（まさ）に至り、倭賊退く。■■■■■■■■背に來りて急追して任那加羅に至る。城を抜くによりて、城即ち歸服す。安羅人戍兵、新羅城を■。■城倭満ち、倭城を潰す■■■■■■■■■■■■■■■■■■■盡更■安羅人戍兵来りて満つ■■■■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■辭■■■■■■■■■■■■■潰■以隋■安羅人戍兵、昔し、新羅寐錦未だ有身來■■■■■■■土境を開き、好太王■■■■寐錦■■僕句■■■■朝貢 」広開土王碑　釈文：水谷悌次郎、訓は筆者

（２）「宿軍を攻撃、燕平州刺史慕容歸は城を棄てて逃げた。」「三国史記」　高句麗本紀　十一年（401年）

（３）「新羅は倭国と好みを結び、奈勿王子、未斯欣を人質に入れた。」「三国史記」新羅本紀　實聖尼師今　元年（402年）

（４）「春二月、倭國使者至る。王迎へて特に厚く勞（ねぎら）ふ。秋七月、兵を遣して新羅の邊境を侵す。」「三国史記」百濟本紀、阿莘王十二年（403年）

（５）「燕王熙が遼東城を攻撃し、陥落させた。」「三国史記」高句麗本紀、広開土王十四年（404年）

（６）「十四年甲辰(404年）にして倭、軌ならずして帯方界に侵入す■■■■■石城■連船■■■■■率■■■平穰■■■鋒相遇し、王幢して要截盪刺、倭寇潰敗し斬殺すること無數」広開土王碑　釈文：水谷悌次郎、訓は筆者

（７）「十四年、王薨る。王の仲弟の訓解、攝政す。以て太子の國に還るを待つ。季弟の石枼禮、訓解を殺し、自ら立ちて王と爲る。腆支、倭に在りて訃を聞く。哭泣し歸るを請ふ。倭王、兵士百人を以て衛送す。既に國界に至るに、漢城人、解忠、來りて告げて曰す、大王、世を棄て、王の弟、石枼禮兄を殺し自ら王となる。願くば太子、輕に入ること無かれ。腆支、倭人に留りて自衛し、海島に依りて以て待つ。國人、石枼禮を殺し、支を迎へて即位せしむ。妃、八須夫人、子の久入小辛を生む。」「三国史記」百濟本紀、腆支王

（８）「倭兵來りて明活城を攻むも、克たずして歸る。王騎兵を率ゐ、之を獨山の南に要（もと）む。再び戰ひて之を破る。殺して獲ること三百餘級。」「三国史記」新羅本紀、實聖尼師今四年（405年）

（９）「春三月に、倭人、東邊を侵す。夏六月に、又、南邊を侵し、一百人を奪掠す。」「三国史記」新羅本紀、實聖尼師今　六年（407年）

(10）「十七年丁未(407年)、歩騎五萬を敎遣す。■■師■■■■■■城■■合戦し斬殺蕩盡し、獲る所の鎧鉀は、一萬餘領。軍資器械は數を稱す可からず。還りて沙溝城、婁城■■城■■■■■■那■城を破る。」広開土王碑　釈文：水谷悌次郎、訓は筆者

(11）「春二月に、王聞く。倭人、對馬島に營を置き、兵革資粮を以て貯へ、謀を以て我を襲ふ。我先ず其れ未だ發せざるを欲す。精兵を揀（えら）び兵儲を撃破せむ。舒弗邯の未斯品が曰く、臣聞く、兵は凶器なり、戰は危事なり。況（いわん）や巨浸（対馬海峡）を渉（わた）り以て人を伐（う）つは、萬一利失なはば、則ち悔追ふ可からず（悔やみきれない）。嶮に依り關を設くに若（し）かず。來れば則ち禦ぐ。侵猾（侵入して乱す）得せしめず、便すれば則ち出でて禽（とら）ふ。此れ所謂（いわゆる）、人に致りて人に致されず（孫子の兵法：人を制し、人に制されず）、策の上なり。王これに從ふ」「三国史記」新羅本紀、實聖尼師今七年（408年）

(12）「廿年庚戌（410年）東夫餘、舊（もと）是れ鄒牟王の属民、叛に中（あた）りて貢せず。王躬（みず）から率ゐて往き討つ。軍餘城(東夫餘)に到りて餘城國■■■■■■那■■王恩は晋虚（日の上るような大きさ）にして、是に旋還（旋帰）す。 又、其れ慕化して官に随ひ來る者 、味仇婁鴨盧（官名）、卑斯麻鴨盧、■立婁鴨盧、 粛斯舎■■■■■」広開土王碑　釈文：水谷悌次郎、訓は筆者

(13）「奈勿王子、卜好を以て高句麗に質とす。」「三国史記」新羅本紀、實聖尼師今　十一年（412年）

(14）「韓、三種有り。一に曰く馬韓、二に曰く辰韓、三に曰く弁辰。馬韓西に在り、五十四國有り。其の北は樂浪と、南は倭と接す。辰韓、東に在り、十有二國、其の北濊貊と接す。弁辰、辰韓の南に在り、亦十有二國、其の南亦倭と接す。凡て七十八國、伯濟は是れ其れ一の國ならむ。」後漢書　馬韓伝
(15）「秋（建光元年:121年）、宮と遂（遂成）馬韓と濊貊數千騎を率ゐ玄菟を圍む。夫餘王子の尉仇台を遣はし將に二萬餘人、州郡と力を并せて之を討ち破り、五百餘級を斬首す。」後漢書　高句麗伝

(16）「百濟の始祖、温祚王。其の父は鄒牟、或ひは朱蒙と云ふ。北扶餘より難を逃れ、卒本扶餘に至る。」「三国史記」百濟本紀　温祚王

(17）[書紀における対外観](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/taigaikan-1.doc)　―その1　仁徳紀以前：百濟―どこまで扶余でどこまで馬韓か？　上田啓之

(18）「臣と高句麗、夫餘に源出す、先世の時、篤く舊款を崇し、其の祖、釗（故國原王）、鄰好を輕廢し、親ら士衆を率ゐ、臣境を陵踐す。臣の祖、須（近肖古王の子、近仇首王）、旅を整へ、電邁し、機に應じて馳せ撃つ。」魏書、百濟伝

(19）「百濟國、其の先、夫餘より出ず。其の國、北に去ること高句麗、千餘里、小海の南に處す。その民は土着、土は下湿多く、皆を率ゐ山に居る。」前掲書

(20）「百濟は、其の先、東夷、三韓國に有り。一に曰く馬韓、二に曰く辰韓、三に曰く弁韓。弁韓、辰韓各十二國、馬韓五十四國有り。大國は萬餘家、小國は數千家、總て十餘萬戸、百濟は即ち、其の一つなり。後に漸（しばらく）して強大、諸（もろもろ）の小國を兼ね、其の國は、本は (高)句驪と與に遼東の東に在り。晉の世、句驪、既に遼東を略有し、百濟、亦、遼西、晉平二郡の地を據有し、自ら百濟郡を置く。」梁書、百濟伝

(21）「準と滿戰ふ、敵ならず。その左右の宮人を將（ひき）いて走（のが）れ海に入り、韓地に居し、自ら韓王と號した。」　三國志魏書　馬韓伝

(22）「東明の後に仇台有り、仁に篤く信、始めて帶方故地に國を立つ。漢の遼東太守、公孫度、女（むすめ）を以て之に妻（めあは）す、遂に東夷の強國と為る。初め百家を以て濟（わた）り、因りて百濟を號（よば）はる。」北史、百濟伝

(23）「百濟、即ち、後漢末の夫餘王、尉仇台（いきゅうたい）の後、魏の時、百濟王、上表して云ひて語ぐ、「臣と高麗、先に夫餘を出ず。初め以て百家にて海を濟（わた）り、因みて百濟と號（な）づく。」「晉の時（265年－316年）、句麗、既に遼東を略有し、百濟、亦、遼西、晉平二郡を據有す。今柳城、北平の間。晉より以後、諸國を呑并し、馬韓故地を據有す。」通典、「百濟」

(24）「温祚、河南の慰禮城に都す。十臣を以て輔翼し、國を十濟と號す。是れ前漢の成帝鴻嘉三年（BC18年）なり。沸流、彌鄒を以て、土は濕（しつ）し水は鹹（しおから）く、安居を得ず。歸りて慰禮を見るに、都邑鼎定（ていてい：都を定める）、人民は安泰、遂に慙悔して死す。其の臣民は皆慰禮に歸す。後に以來時に百姓樂しみて從ひ百濟に改號す。其の世系高句麗に與（くみ）す、同じく扶餘に出づ、故に扶餘を以て氏と爲す。」「三国史記」百濟本紀　温祚王

(25）「二十六年(9年)秋七月、王曰く「馬韓、漸弱し、上下は離心し、其の勢久しく能はず。儻（も）し他の并（あは）せる所と爲さば、則ち唇亡くば齒寒し、悔及ぶ可からず。人に先じて之を取るに如ず。以て後艱を免る」。冬十月、王出師し、田獵と陽言（狩と称）し、潛かに馬韓を襲ひ、遂に其の國邑を并す。唯だ圓山・錦峴の二城は、固く守りて下らず。」前掲書

「二十七年(10年)夏四月、二城降る。其の民於漢山の北に移す。馬韓遂に滅ぶ。」前掲書

(26）「七年、春二月、潛師し樂浪の西縣を襲ひ取る。冬十月に王、樂浪太守遣す所の刺客の爲す賊害にて薨ず。」「三国史記」百濟本紀、汾西王

 (27）「百濟國、本は高驪と俱に遼東の東千余里に在り、其の后、高驪遼東を略有し、百濟遼西を略有す。百濟治む所は、之を晉平郡晉平縣と謂ふ。義熙十二年（416年）、以て百濟王、余映、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王と為す。高祖踐阼、進めて鎮東大將軍を號く。少帝景平二年（424年）、映は長史の張威を遣はし闕に詣りて貢獻す。元嘉二年（425年）、太祖詔して曰はく、“皇帝、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王に問ふ。葉を累して忠にして順ひ、海を越へ誠を效（いた）す、遠く王戎を纂（あつ）め、先業を聿修し（いっしゅう：祖先を慕ひその徳をのべおさめる）、義を慕ふこと既に彰らか。厥（そ）れ赤款（まごころ）を怀（懐）き、驪水に桴を浮かべ、騕（駿馬）を獻じ贄（礼物）を執り、故く位を嗣ぎ方(国)を任じ、籓（藩）を以て東服し、勉勖（べんきょく：勉め励む）所に蒞（臨）み、前蹤（しょう：事跡）を墜すこと無し。今、兼謁者の閭丘恩子、兼副謁者の丁敬子等を遣はし、宣旨し慰勞し朕意を稱す。”」 　宋書、列伝の第五十七、夷蛮、百濟

(28）「七年（433年）、春と夏、雨ふらず。秋、七月、使を遣はし新羅に入りて和を請ふ。八年、春、二月、使を新羅に遣はし、良馬二匹を送る。秋、九月、又、白鷹を送る。冬、十月、新羅聘に良金明珠を以て報ふ。」「三国史記」百濟本紀、毗有王
(29）「其の后、每歲、使を遣はし表を奉り、方物を獻る。七年（430年）、百濟王の余毗は复（また）、貢職を修し、映を以て爵號、之を授く。」宋書、列伝の第五十七、夷蛮、百濟
(30）「十五年の夏四月、倭兵來りて東邊を侵し、明活城を圍む。功無くして退く。」「三国史記」新羅本紀、訥祇麻立干　十五年（431）
「二十四年、倭人南邊を侵す。生口を掠め取りて去る。夏八月、又東邊を侵す。」前掲書　二十四年（440）
「二十八年の夏四月、倭兵、金城を十日圍み、糧盡きて乃ち歸る。王、出兵して之に迫らむと欲す。左右が曰く、“兵家の説きて曰く、窮寇追ふ勿れ。王其れ之を舎つべし。”聽かず、數千餘騎を率ゐ、獨山の東に追及し合戰し、賊に敗れる所と爲り、將士の死者は過半。王、蒼黄し馬を棄て山に上るも、賊之を數重に圍む。忽昏霧（突然の農務）、咫尺（しせき：至近距離）を辧せず。賊陰助有りと謂ひ、兵を収めて退歸す。」前掲書　二十八年（444）
(31）「三十八年　新羅人、邊將を襲ひ殺す。王、怒りて、將兵を擧げて之を討つ。羅王、使を遣はし謝罪す。乃ち止む。) 「三国史記」高句麗本紀　三十八年（450年）
「三十四年　秋七月　高句麗の邊將、悉直之原に獵す。何瑟羅城主の三直、出兵して之を掩殺（えんさつ：不意打ちして殺す）。麗王、之を聞きて怒り、使來たりて告げて曰く、“孤（我）と大王、修好して歡に至る也。今出兵し我邊將を殺す。是何の義や。”乃ち師を興し我が西邊を侵す。王、辭を卑くし之を謝す。乃ち歸る」「三国史記」新羅本紀、訥祇麻立干　三十四年（450年）
(32）「三十八年の秋七月、霜と雹が穀を害す。八月、高句麗、北邊を侵す。」前掲書　三十八年（454）
(33）「三十九年の冬十月、高句麗、百濟を侵す。王、兵を遣はし之を救ふ。」前掲書　三十九年（455）
(34）「二十七年（450年）、毗が上書し方物を獻り、私假台使馮野夫の西河太守は、表して《易林》、《式占》、腰弩を求め、太祖并せて之を与ふ。」　宋書、列伝の第五十七、夷蛮、百濟傳
(35）「十四年　夏四月の戊午の朔、日、之を食す有り。冬十月、使を遣はし宋に入り朝貢す。」「三国史記」百濟本紀　毗有王　十四年（440年）

(36）「毗が死し、子の慶が代りて立つ。世祖の大明元年（457年）、使を遣はし除授を求め、詔して許す。二年（458年）に、慶は使を遣はし上表して曰く、“臣の國は葉を累して、殊恩を偏受（ひたすら受ける）し、文武良輔し、世蒙（謙った言い方）爵に朝す。行冠軍將軍右賢王の余紀等十一人、忠勤宜しく顯進（高位に昇る）在り、伏して愿（つつし）みて愍（あわれみ）を垂れ、并せて賜除を听（き）きたまへ。”仍ち行冠軍將軍右賢王余紀を以て冠軍將軍と為す。行征虜將軍左賢王の余昆、行征虜將軍の余暈を以て并せて征虜將軍と為す。行輔國將軍の余都、余乂を以て并せて輔國將軍と為す。行龍驤將軍の沐衿、余爵を以て并せて龍驤將軍と為す。行宁朔將軍の余流、麋貴を以て并せて宁朔將軍と為す。行建武將軍の于西、余婁を以て并せて建武將軍と為す。太宗泰始七年（471年）、又使を遣はし貢獻す。」宋書、列伝の第五十七、夷蛮、百濟
(37）延興二年（472年）、其の王、餘慶、始めて使を遣はし、上表して曰く、「臣、東極（東の果て）に建國し、豺（山犬）と狼（獰猛な獣：高句麗）が路を隔て、世（々）靈化（王化）を承くと雖も、藩を奉る由（よし）莫く、雲闕（雲の向こうの宮殿：北魏）を瞻望（せんぼう：慕い尊ぶ）し、情馳せること極り罔（な）し。涼風に微（かすか）に應じ、惟れ皇帝陛下に伏して、天（子）の休（安らかなさま）に協和す。係る仰（あがめ）る情に勝（た）へず、謹みて私署する冠軍將軍、駙馬都尉（そばとい）の弗斯（ふつし）侯、長史の餘禮（よれい）、龍驤將軍、帶方太守、司馬の張茂（ちょうも）等を遣はし、波の阻（はば）むに舫（ふね）を投じ、玄津（北魏の港）に徑（みち）を搜し、自然の運に命を託し、（帝の）萬一の誠に進（士）を遣はす。神祇の感を垂れ、皇靈の洪覆（こうふく：溢れ覆う）を冀（ねが）ひ、克（よ）く天庭（北魏の朝廷）に達し、臣の志を宣暢（せんちょう：広く知らしめて述べる）すれば、旦（早朝）に聞き夕べに沒すと雖も、永く恨みを餘すこと無し。」又云く、「臣と高句麗、夫餘に源を出し、先世の時、篤く舊款（かん：よしみ）を崇（たっと）ぶ。其の祖、釗（故國原王）、鄰好を輕廢し、親（みづか）ら士衆を率ゐ、臣境を陵踐（りょうせん：犯し踏みにじる）す。臣の祖、須（近肖古王の子、近仇首王）、旅を整へ、電邁（まい：勇みて行く）し、機に應じて馳せ撃ち、矢石を暫（しば）し交へ、釗（故國原王）の首を梟（さら）し斬る（通常流れ矢に当たって死んだとされる）。爾（それ）より已（以）來、敢へて南を顧ること莫し。馮氏（北燕）の數終（命運が尽きる）より、餘燼（遺民）奔竄（ほんざん：逃げ去り）、醜類（しゅうるい：悪党:高句麗）漸盛（ざんせい：次第に盛んとなり）、遂に（百濟を）陵逼（犯しせま）るを見る。怨を構へ禍を連ねること、三十餘載（年）、財は殫（つ）き力も竭（つ）き、自ら轉じて孱踧（てきしゅく：おとろえつつしむ）。若（も）し天（子）、慈（いつく）しみて曲げて矜（あは）れみ、遠く無外（最果て）に及び、速（すみ）やかに一將を遣はし、來りて臣が國を救ふならば、當（まさ）に奉りて鄙女を送り、後宮を掃すを執（はか）らひ、并（あは）せて子弟を遣はして、牧（場）、外廄（厩舎）の圉（馬飼）とせむ。尺の壤（土地）も匹夫、敢へて自ら有さず。」又云く、「今、璉には罪有り、國自ら魚肉にして、大臣、族を強ひて、戮殺して已無く、罪は盈（み）ち惡は積まれ、民庶は崩れ離る。是れ滅亡の期、假手（手を貸す）の秋なり。且つ馮族の士馬、鳥畜の戀有り（故郷を思ふ）。樂浪の諸郡、首丘（故郷の丘）の心を懷く。天（子）の威一に舉げ、征する有らば戰（いくさ）無し。臣、不敏と雖も、志を效（つく）し力を畢（つく）し、當（まさ）に統べる所を率ゐ、風を承（う）け響に應ず（命に従ふ）。且つ高麗は不義にして、逆（さから）ひ詐（さ）ぐこと一に非らず。外に隗囂（かいごう：後漢初期の武将）の藩卑の辭を慕ひ、内に兇禍に豕突（ちょとつ）の行を懷（おも）ふ。或は南に劉氏（宋）に通じ、或は北に蠕蠕（柔然）と約し、共に相ひ脣齒（緊密な関係）とし、謀りて陵王を略す。昔し唐堯、聖に至り、丹水に致り罰す。孟（甞君）、常に仁を稱し、詈（悪口）で塗（けが）すを捨（さしお）かず。涓流（けんりゅう：細流）の水、宜しく早く壅塞（ようそく：ふさぐ）べし、今、若し取らずば、將（まさ）に後悔を貽（のこ）さむ。去る庚辰年(440年)の後、臣は西界の小石山の北の國の海中に屍十餘を見、并せて衣器鞍勒（馬用の鞍と轡）を得、之を視るに高麗の物に非ず。後に聞くに乃ち是れ王（北魏）の人、臣の國に來降し、長蛇（高句麗）路を隔て、以て海に沉（沈）む。未だ委るに當らずと雖も、深く憤恚（怒）を懷ふ。昔し宋は申舟を戮（ころ）し、楚の莊（王）は徒跣（とせん：裸足で歩く：開戦の口実に申舟を殺させ急いで攻撃に出た）し、鷂（はい鷹）は放した鳩を撮り、信陵(君)は食はず。敵に克ち名を建つ、美隆已に無し。夫れ區區（取るに足らない）偏鄙（辺鄙：百濟）を以て、猶、萬代の信を慕ひ、況や陛下、天地を合氣し、勢（いきほひ）山海を傾ける。豈に小豎（小僧：高句麗）をして、天逵（てんき：天下の大道）を跨ぎ塞（ふさ）がしむるや。今、得る所の鞍一つ上（たまつ）りて、以て實驗（実際に試す）為さむ。」魏書　百濟傳

(38）「顯祖（献文帝）は、（一行が）其の僻遠きを冒險して朝獻すを以て、優れて厚く禮遇し、使者の邵安（しょうあん）を遣はし、其の使と倶に還す。詔して曰はく、「表を得て之を聞く、恙無く甚だ善し。卿は、東の隅に在りて、五服の外に處り、山海を遠しとせず、魏の闕（宮門）に誠を歸（おく）ること、欣(よろこ)び嘉(よみ)し意至り、懷に用（も）て戢（おさ）む。朕、萬世の業を承け、四海に君臨し、群生を統御す。今、宇内（天下）清一にして、八表（八方の果て）義に歸す、襁負（きょうふ：子を背負う）して至る者、數を稱す可からずして、風俗の和し、士馬の盛んなること、皆、餘禮等親しく聞見する所。卿は高麗と穆（むつま）ず、屢（しばしば）陵犯（侵犯）を致す、苟（いや）しくも能く義に順（したが）ひ、仁を以て之を守らば、亦、寇讎（こうしゅう：仇敵）を何ぞ憂へむ。前に使を遣はした所、海に浮び（渡り）以て荒外の國を撫（やすん）じ、從來より積年（長い間）、往きて返らず、存亡も達否も、未だ能く悉（ことごと）く審（つまびらか）ならず。卿が送る所の鞍は、舊乘と比校（比較）するに、中國の物に非ず。疑似の事を以てす可からず、以て必然の過を生む。權要（権力ある人）の經略（国を経営すること）は、已に別旨を具（そな）ふ。」又詔して曰はく、「高麗が疆（さかい）を阻み、卿の土を侵軼（しんいつ）し、先君の舊怨を修め、民の大德を棄息し、兵を交へること累載（歳）、荒邊に難を結ぶを知る。使は申胥の誠を兼ね、國に楚越の急有り、乃ち應じるに義を展べ微を扶け、機に乘り電舉（軍を興）す。但し以て高麗は藩を稱すこと先朝、職を供（たてまつ）ること日久しく、彼に昔よりの釁（闘争の原因）有りとて雖も、國に未だ犯令の愆（あやまち）有らず。卿は始めて命を通じしめ、便（すなは）ち伐つに致るを求め、事を尋討し（尋ねきはめ）會（あつ）むも、理亦た未だ周（そなは）らず。故に往年、禮等を遣はし平壤に至り、其の由狀を驗（しらべ）るを欲した。然るに高麗は奏請すること頻煩にして、辭理倶に詣（いた）る。行人、其の請を抑（おさ）むこと能はず、司法以て其の責成すこと無し。故に其の啟（まう）す所を聽き、禮等に詔して還へす。若し今、復（ま）た旨を違はば、則ち過咎益れ露はれ、後に自ら陳（の）ぶと雖も、罪を逃れる所無し。然る後に師を興し之を討つ、義に於いて得と為す。　九夷の國、世海外に居り、道暢（の）まば（しきひろげる）則ち藩を奉り、惠戢（とどま）らば則ち境を保つ。故に羈縻（きび：異民族間接支配）は前典に著（あらは）れ、楛貢（楛矢：肅慎氏が貢納）歳時に曠（おろそか）にす。卿は強弱の形（勢）を備（つまびらか）に陳（の）べ、往代の跡を具列（詳しく取り上げ）し、俗を殊（わ）け事を異にするも、擬貺（ぎきょう：賜物を似せて）乖衷（かいちゅう：まことを離れる）す。洪規（こうき：大計）大略、其の致るところ猶ほ在らむ。今、中夏は平一し、宇内は虞（おそれ）無く、毎（つね）に陵威東極すを欲す。懸旌（けんせい:旗を下げ）域（さかい）を表（しる）し、偏方（辺鄙の国）に荒黎（果ての黎民）を拯（すく）ふ、皇風を遠く服す（国）に舒（ひろ）めむ。良く高麗を即ち敘すに由り、未だ卜征に及ばず。今若し詔旨に從はざれば、卿の來りて謀るに則り、載（すなは）ち朕意に協（かな）ひ、元戎（げんじゅう：連発式の弩弓）啟行（けいこう：出発）せば、將に遠くと云はず。便ち豫（あらかじ）め率ゐ同じく興（おこ）す可し、具（そな）へて以て事を待ち、時に使を遣はし報ず、速（すみや）かに彼の情を究め。之れ師を舉ぐる日、卿は郷導の首と為り、大捷（大勝利）の後、又、元功（大手柄）の賞を受くは、亦た善からずや。獻（たてまつ）る所の錦布海物悉く達せずと雖も、卿の至心は明らか。今、雜物別の如く賜ふ。」又、璉（長壽王）に安等を護送するべく詔す。安等高句麗に至る。璉は昔し餘慶と讎（仇敵）有りと稱し、東へ（通）過せしめず、安等是に皆還へる。乃ち詔を下し切に之を責む。五年（475年）、安等をして東萊より浮海し、餘慶に璽書を賜ひ、其の誠節を褒む。安等は海濱に至るも、風に遇ひ飄蕩し、竟に達せずして還る。」前掲書

(39）「九月、王の帥兵三萬、百濟を侵し、王が都とする所の漢城を陷れ、其の王の扶餘慶を殺し、男女八千を虜として歸る。」「三国史記」　高句麗本紀　長壽王　六十三年（475年）

(40）「二年(472年)冬十月、蠕蠕塞を犯し、五原に及ぶ。十有一月、太上皇帝親（みず）から之を討ち、將に漠を度（わた）り襲擊す。蠕蠕軍の至るを聞き、大きに懼れ，北に走ること數千里。以て窮寇して遠く遁る。追ふ可ずして、乃ち止む。…（三年）夏四月戊申、假司空、上党王長孫觀等に詔して、吐谷渾拾寅を討つ。」魏書、高祖紀上（孝文帝）

(41）「三年冬十月、太上皇帝親ら將（ひき）ゐて南を討つ・・・十有一月戊寅、河南七州の牧（長官）、多を守るに法を奉らずして、新邦の民能く上に達する莫きを致すを以て詔し、使者を遣はして風を觀、獄を察し、幽明を黜陟（ちゅっちょく：暗愚者を退け、賢明の者を用ゐる）す。其の鰥寡孤獨、貧しくして自ら存せざる者有りて、其の雜徭に复（ふく）す。年八十を已に上ぐれば、一子役に從はしめず。力田（農事に骨折る者）、孝悌（父母、目上によく仕える者）、才器が時に益有り、信義が鄉閭（里）に著しき者、具（つぶさ）に名を以て聞く。癸巳，太上皇帝南巡し、怀（懐）州に至る。過ぐる所民に疾苦を問ひ，高年、孝悌、力田に布帛を賜ふ。十有二月庚戌、詔して關（宮門）の外苑の囿（ゆう：鳥や獣を飼う所）民の樵（しょう：雑木）を采るを听（き）く。」前掲書

**４．****倭國傳**

　まずは、沈約の記する所を辿ろう(1）。中国人は、高句麗を起点にして、東夷の位置を示した。百濟は、高句麗より千余里、倭國は東南の大海の中にあり、万里（非常に遠い）から、世々貢職を修めた。貢とは方物を献上する、職も貢と同義に使はれるが叙授した職でもある。沈約は陳寿の魏志倭人伝により、魏の時代から倭が朝貢を行ひ、卑弥呼やその家臣が叙授されてきたことを以て、世々としたのであろう。

百濟は、369年、廃帝の東晋と結び、372年新たに即位した簡文帝から「鎮東将軍領楽浪太守」に叙せられたが、416年より海路により入貢を再開するまでは、高句麗広開土王以降、ルートが閉ざされていた。一方、高句麗は北燕、秦にルートを遮られ、東晋に入貢したのは413年であった。劉裕（高祖）が420年に安定した軍事政権を確立したことにより、この流れは加速し、倭もこれに加わった。倭の賛（讃）に対して高祖は、永初二年（421）に叙授を賜ったが、何を叙授したかは記されていない。太祖（文帝）の元嘉二年（425）にも入貢したが、賛は死すとあり、具体的な叙授はなかった。この時、使者となった人物が司馬曹達とあるが不詳である。将軍を叙授され、長史、司馬、諮議参軍を置くことが出来、安東将軍府の「安東司馬」の職にある者が軍事的目的を達するために派遣されたとする説があるが(2）、賛が何を叙任したか分からず、職名であれば自署の可能性もあり、また、長史抜きで司馬が使者となるのは、軍司令官が筆頭外交官といふことで、吐谷渾（とよくこん）、高昌（こうしょう：トルファン）、宕昌（とうしょう：甘粛省南部）の司馬派遣の例を挙げられているが、倭人の軍司令官の長、半島に派遣されたNo１の将軍で中国風の曹達という名は見当たらず、「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」の叙授を求める使節としては礼を欠く。「親魏倭王」であった卑弥呼の過去の歴史と司馬氏の関係を持ち出し、帰化した漢人のつてを辿りその末裔のごとき人物、司馬曹達を使者に立て、宮廷工作をするくらいのことをしておかしくあるまい。

賛の弟の珍は、「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を自称して、「安東將軍、倭國王」に除されたと記されている。倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓の使持節（処分権）、都督（長官）、諸軍事（司令官）を自称し、叙正を求めたとは、大海の中の倭國が半島南の六國の背後で実権を行使している現実に照らして正すべしと主張したことになる。太祖（文帝）は、元嘉二年（425）に、余映（腆支）を使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王に叙しており、宋が珍に認めたのは、安東將軍、倭國王のみであった。すでにみたごとく、この時期、百濟と倭は共同歩調を執るといふより、対宋外交においては対立しており、百濟は新羅と関係改善を図り、共に高句麗の脅威に備へていた。宋は高句麗からも、この実態について情報を収集することは可能であったろう。宋は半島の南で起こっていることについて、倭國の現実に注意を払ったものと見へ、倭隋等十三人を平西、征虜、冠軍、輔國將軍とすることを認めた。宋は注意深く倭の動向を見定めていた。沈約は倭から上（たてまつ）られた過去の表の記録を蒐集し、検討したものであろう。

元嘉二十年（443）に、宋は倭の次の王、濟を安東將軍、倭國王に叙し、ついに二十八年（451）には、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓（＋倭國）六國諸軍事を加へ、併せて、二十三人を軍、郡に叙しており、軍事の官、郡政の官にすることを認めたことになる。宋は、百濟を除いた半島南の軍事を倭が掌握していると見なした。450年の入貢で百濟が得たものは、易林、式占、腰弩であり、叙授がなかったことはすでに見た。しかしながら、世祖（孝武帝）の大明六年（462）においては、宋は濟の世子の興を安東將軍、倭國王に戻した。そして、その弟の武はこれを不服として、順帝升明二年（478）に上表して、再び、使持節、都督倭、新羅、任那加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事を回復した。この時の表を沈約が倭國の条に記したことで、これが歴史に残った。

わが国は、遠く離れて、外に藩をなし、先祖代々、自ら甲冑を纏い、山川を越え休む間もなかった。東の毛人を征すこと五十五国、西に多くの夷を服すこと六十六国、海を渡り半島を平らぐこと九十五国、王道を通じて安泰をはかり、畿内を広げてきた。代々春秋に拝謁することを欠かさず、臣は下愚といえども、先緒を引き継ぎ、統治する所のものを率ゐて、宋朝に帰崇し、遥か百濟を通り、船を仕立ててきた。しかるに、高句麗は無道にして、周辺國を見下し、略奪し、殺戮することを止めようとしない。常に、路を留め滞らせ、良風を損ね、或る時は通じ或る時は通じさせない。臣の亡き父、濟はまことに仇敵が宋朝への路を閉塞させることを憤激し、弓を引く兵百万、義声に感激し、まさに大舉せむとした。しかし、にわかに父と兄を失ひ、目前の功をひとかけらも得ることがなかった。喪に服しており、兵を動かすこともなかった。このため休息をしていまだ勝つことがない。今を迎へ、甲（鎧）を練り兵を治め、父兄の志を申し上げたい。義士、勇士が文武の功を尽くし、大難の前の小難を顧みることなく、もし、帝徳の恵みを得て、この強敵を挫き、よく国難を靖んずれば、これまでの功を替へることなし。秘かに自らを開府儀同三司に比し、皆の者もそれぞれを位を仮に与へ、忠節に勤めむ。

半島を平らぐこと九十五国の内訳は分からないが、順帝は詔を発して、武を使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王に叙した。

沈約は、百濟に関する記述を471年をもって打ち切り、倭に関しては、列伝の他に、太祖紀の元嘉七年（430）正月、十五年（438）四月、二十年（443）、二十八年（451）七月、世祖紀の大明四年（460）十二月、六年（462）三月、順帝紀の升明元年（476）冬十一月己、二年（478）五月条(3）に倭関連の記事を掲載している。彼は半島の南で起こっている事態に注目をし、かつての親魏倭王の國から使者を送ってきた倭の五王に関する情報を蒐集した。どうやら、百濟は微妙であるが、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓に関しては倭が軍事的に実権を握っているようである。高句麗を経由して情報を蒐集しても、高句麗が遭遇する敵の前面に倭軍がおり、こっぴどく損害を与えているが、一向に懲りるようでもない。百濟の東に新羅、その南に任那、加羅、百濟と新羅の間に秦韓(4）、百濟の南に慕韓があり、それらを押さえているようである。百濟は北魏に救援を求めるも腰が定まらず、高句麗の計略に国を疲弊させている。百濟は新羅と結び、倭とは距離を置こうとしており、倭が宋との関係を深めるにつけ、百濟は北魏へ走ったのかもしれない。その倭の表を沈約は取り寄せ、順帝の詔を記した。陳寿の魏志倭人伝に記された、卑弥呼への魏の制詔を意識していたのかもしれない。倭の狙いは、宋に、百濟を含めた半島における支配権を示す叙任であった。478年、宋は、百濟を含めることを除いたものの、倭に重点を移していたのであろう。

しかし、この表に記された内容は、後の日本書紀の編纂にあたっては、中国へ臣従したことを物語るものであり、卑弥呼への制詔と同じく、徹頭徹尾無視されねばならない記述となった。

(1）「倭國、高驪の東南の大海の中に在り、世(々)貢職を修む。高祖永初二年（421年）、詔して曰はく、“倭の贊、万里、貢を修む、遠く誠に宜しきこと甄（あきら）かにして、除授を賜ふ可し。”太祖、元嘉二年（425年）、贊、又、司馬曹達を遣はし表を奉り方物を獻（たてまつ）る。贊、死す。弟の珍、立つ。使を遣はして貢獻す。自ら使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王を稱す。表して除正を求む。詔して安東將軍、倭國王に除す。珍、又、倭隋等十三人を平西、征虜、冠軍、輔國將軍に號（なづ）くことの除正を求む。詔して并せて听（ゆる）す。二十年（443年）、倭國王、濟、使を遣はし(表)を奉り（方物を）獻りて、复（また）、以て安東將軍、倭國王を為す。二十八年（451年）、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事を加へ、安東將軍は故（もと）の如くす。并せて上（たてまつ）る所の二十三人を軍、郡に除す。濟、死す。世子の興、使を遣はし貢獻す。世祖、大明六年（462年）、詔して曰はく、“倭王の世子、興、奕世（えきせい：代々）載（すなは）ち忠にして、籓を外海に作（な）し、（王）化を稟（う）け境を寧（やすん）じ、貢職を恭しみて修め、新たに邊（辺境）にて業を嗣ぐ。宜しく爵號を授く。安東將軍、倭國王とす可し。”興、死す。弟の武、立ちて、自ら使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王を稱す。
　順帝升明二年（478年）、使を遣はし表を上りて曰く、“封國（我國）は偏ること遠く、籓を外に作（な）し、昔より祖禰（でい：死んだ父）、躬（みづか）ら甲胄を擐（つらぬ）き、山川を跋涉（ばつしょう：山を越え、川を渡る）し、寧処（ねいしょ：ゆっくりする）に遑（いとま）あらず。東に毛人を征すること五十五國、西に眾夷を服すること六十六國、渡りて海北を平ぐこと九十五國、王道融泰（ゆうたい：融合して安泰）にして、土（くに）を廓（ひら）き畿（き：都域）を遐（はるか：拡大）す。累葉（代々）朝宗（春夏に拝謁）し、歲に愆（たが）はず。臣、下愚と雖も、忝（つつし）みて先緒（先人の始めたこと）を胤（つ）ぎ、統ぶる所を驅率し、天極に歸崇（従い尊ぶ）し、遙か百濟を道（ふ）み、船舫を裝ひ治む。而るに句驪、無道にして、圖（はか）りて見吞を欲し（見下し）、邊隸（周辺國）を掠抄（略奪）し、虔劉（けんりゅう：殺す）して已まず。每（つね）に稽滯を致し、以て良風を失ふ。曰く路を進むと雖も、或は通じ或は（通ぜ）不（ず）。臣が亡考（父）、濟、實（まこと）に寇仇、天路を壅塞するを忿り、控弦（こうげん：弓を引く兵士）百万、義聲に感激し、方（まさ）に大舉せむと欲し、奄（にはか）に父兄を喪（うしな）ひ、垂成（すいせい）の功をして、一簣に獲ざらしむ。居諒暗に在り、兵甲を動かさざる。是を以て偃息（えんそく）して未だ捷（か）たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申すを欲す。義士虎賁（こほん：勇士）、文武功を效（つく）し、白刃前に交はるは、亦、顧ざる所（宋書、袁顗伝に、白刃前に交はれば流矢を顧りみず：大難を前にしては小難を顧みない、とある。）若し帝德の覆載（ふくさい：恵み）を以て、此の彊敵を摧（くじ）き、克く方難を靖（やす）んぜば、前功を替へること無し。竊（ひそか）に自ら開府儀同三司を假し、其の余は咸（み）な各（おのおの）假授して、以て忠節を勸む。”詔して武を使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王に除す。」宋書、列伝の第五十七、夷蛮、倭國

(2）「倭国は重要な軍事目的をもって、軍事と関係深い“司馬”－安東将軍府の司馬、つまり“安東司馬”－を宋朝に派遣した。・・・讃も軍事的な要請をしたと考えて、まずは間違いないであろう。」倭の五王　空白の五世紀　坂元義種　教育社　「外交使節の司馬曹達」p103-123

(3）太祖文皇帝諱義隆　元嘉七年（430）　正月　倭國王遣使獻方物

　　　　　　　　　　十五年（438）　四月　以倭國王珍為安東將軍

　　　　　　　　　　二十年（443）　是歲，河西國、高麗國、百濟國、倭國并遣使獻方物

　　　　　　　　　　二十八年（451）　七月　安東將軍倭王倭濟進號安東大將軍

世祖孝武皇帝諱駿　大明四年（460）　十二月　倭國遣使獻方物

　　　　　　　　　　六年（462）　三月　以倭國王世子興為安東將軍

順皇　　　　　　　升明元年（476）　冬十一月己酉，倭國遣使獻方物

　　　　　　　　　　二年（478）　五月戊午，倭國王武遣使獻方物，以武為安東大將軍　宋書

(4）中國人は辰韓を秦韓と呼んだようであるが、ここでは、秦韓・慕韓は百濟・新羅と並記されており、秦韓は辰韓のなかで当時新羅に服していない地、慕韓は馬韓のなかで百濟に服していない地とする説をとりたい。辰韓には秦からの流民を居住させた地があり、列島にも渡来しており、倭と通じる者として秦韓とする地があったのであろう。慕韓は前方後円形墳、倭人の墓がある全羅南道の栄山江流域に比定される説が有力とされる。中國の会稽方面から山東半島を経て列島に稲作をもたらした中國人流民の後裔の地ともされ、倭人の楽浪への海路の中継拠点であり、また、五島列島、有明の勢力と全羅南道との交易ルートともされる。

**５．****日本書紀**

**氣長足姫尊と譽田天皇政権**

　卑弥呼への制詔を打ち消すものとして日本書紀が用意したものは、氣長足姫尊（神功皇后）紀であった。氣長足姫尊は、仲哀天皇九年冬十月（AD200.10）に船出し新羅に至り、新羅王、波沙寐錦（微叱己知波珍干岐）を捕え、飼部（みまかひ）とし、重寶の府庫を封印し、圖籍文書を收め、内官家屯倉を定め、王を質とし、朝貢を約せしめて、日本（やまと）に連れ帰ったと記した(1）。書紀は自らを日本（やまと）とし、朝貢の歴史を引きづる倭（わ）を廃そうとし、氣長足姫尊は卑弥呼以前にすでに新羅を従へていたという歴史を編纂した。歴史的には、新羅はまだ成立しておらず、辰韓の時代であり、半島では公孫氏が勢力を有しており、大陸は魏呉蜀の三国時代であった。新羅が日本に質を出すのは、新羅本紀、実聖尼師今（在位 402-417）の元年のことであり(2）、氣長足姫尊の条で描かれる半島との交渉は、通常謂われる干支二運（120年）どころでなく、場合によっては、三～四運前倒ししたものとなっている。氣長足姫尊五年（205）条に、朝貢に派遣された新羅の使者が質の微叱許智伐旱（微叱己知波珍干岐）を新羅に逃がす事件が記されているが(3）、これは、新羅本紀、訥祗 麻立干（在位 417-458）の二年条に現れる(4）。この時、大和葛城の豪族、葛城襲津彦（かづらきのそつびこ）を新羅に派遣し、蹈鞴津（たたらのつ）から草羅城（さわらのさし）を拔き、捕虜として漢人（鍛冶技術者）を連れ帰り、桑原・佐糜（さび）・高宮・忍海（おしぬみ）、凡て四の邑の漢人等が始祖となった、とも記している(3）。書紀の編者の時代にはキリスト暦という一貫した暦がなく、干支で暦が記されるため、干支さえ合っておれば、同時代と見まがうことが起こり、書紀はそこに目をつけて時代をワープさせた。

　書紀は、氣長足姫尊三十九年（239）に「魏志に云く、明帝の景初三年の六月、倭の女王、大夫難斗米等を遣はして、郡に詣り、天子に詣むことを求めて朝獻す。」と記した。日本國（やまと）には、氣長足姫尊といふ正統な政権があり、倭（やまと）は奈良であり、その地の女王が明帝に朝献の使者を送ったとした。卑弥呼という名は伏されている。また、魏志により、「正始の元年（240）に、建忠校尉梯携等を遣して、詔書印綬を奉りて、倭國に詣らしむ。」「正始の四年（243）に、倭王、復、使大夫伊聲者掖耶約等八人を遣はして、上獻す。」とさらりと言及し、「親魏倭王」に叙されたことも伏せた。それ以上に詳しく記したのは、日本（やまと）と百濟の関係の樹立の経緯であった。

氣長足姫尊四十六年（246）条で、卓淳國の王の所に百濟の肖古王の使者、久氐（くてい）等が訪れ、日本に朝したいので仲介をするよう頼んで来たことから、両者の関係が始まった(5）とした。四十七年（247）条に、新羅と百濟が同時に来朝したが、百濟の貢物が非常に見劣りした。百濟の久氐を問い詰めると、道を誤り新羅に迷い込み監禁され、貢物を新羅の物と取り換えて朝することを強要され、口外すれば命がないと脅されていたとの訴へがあり、千熊長彦を新羅に派遣して詰問させると、事実と判明した(6）。四十九年（249）に、将軍荒田別、鹿我別を派遣し、久氐等と共に卓淳國に至り新羅を討たせたが、兵が足りず、更復（また）、沙白（さはく）、蓋盧（かふろ）の兵を募り、百濟の将軍木羅斤資（もくらこんし）等の加勢を得て新羅を撃ち破った。その勢いで、比自火本（ひしほ）、南加羅（ありひしのから）、喙國（とくのくに）、安羅（あら）、多羅（たら）、卓淳（とくじゅん）、加羅（から）七つの國（[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）を平定した。その後、古奚津（こけいのつ）に至り、忱彌多禮（とむたれ）を討ち、そこに、近肖古王（在位　346-375）と王子の貴須（近仇首王、在位　375-384）が合流し、比利（ひり）、辟中（へちう）、布彌支（ほむき）、半古（はんこ）も平定され、これらを百濟の地とした。千熊長彦は王と共に百濟國に至り、日本と百濟との固い絆が結ばれたとする(7）。五十二年（252）には、久氐が千熊長彦に従ひ来朝し、近肖古王からの七枝刀一口・七子鏡一面、及び種種の重寶を獻上したとあり(8）、この刀には制作年、泰和四年（369年）の銘もあり、これらの半島に関する記述からすれば、氣長足姫尊は350年以降400年前半に生きていなくてはならなくなる。また、千熊長彦は武藏國の人で、書紀編纂時は、額田部槻本首等の始祖とされ(9）、荒田別も上毛野君の祖とあり(10）、関東の武人が動員されていたことになり、大王時代の人間でなくてはならないことになる。

氣長足姫尊は卑弥呼の存在を打ち消すために、妙な役割を押しつけられたものの、閉鎖的な政策を大転換させ、半島へ進出し、旧勢力を討ち河内政権の基礎を築いた傑女であったろう(11）。卑弥呼が、交易を通じて大陸の文物を取り込むため、公孫氏を飛び越えて魏と手を握ったに等しい外交感覚が氣長足姫尊にもある。魏が半島における軍事を掌握した卑弥呼の時代と異り、半島での存在を確保するには、自前の軍事力を投入しなければならなかった。また、書紀の編纂上、中国王朝に臣従した痕跡を残してはならず、独立自尊を装っているが、倭王、武の上表を見れば、その動機は、卑弥呼の外交の延長線上にあったことは明瞭である。

譽田天皇（應神天皇）三年（272）に百濟の辰斯（しんし）王（近仇首王の次男）に禮を失する行為があり、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を遣して詰問し、百濟は辰斯王を殺し、紀角宿禰等が、阿花（あくゑ：阿莘）を立てて王として歸った(12）と記している。紀角宿禰は紀國、羽田矢代宿禰は、大和國高市郡、石川宿禰は河内國石川郡、木菟宿禰は大和國平群郡の豪族である。三国史記、百濟本紀においては、392年に辰斯王は広開土王談徳に北方の十四城を陥され、談徳を恐れ兵を出すことなく、漢江の北の諸部落も奪われ、要衝の関彌（かんみ）城も攻め落され、猟に出た先の行宮で亡くなり、嫡男の阿莘が即位したとする(13）。兵を出すことなく易々と侵入を許し、関彌城を落されたことを日本（やまと）側が厳しく詰問したと思はれる。百濟傳の冒頭でみたごとく、399年に談徳が臣従を誓った百残（百濟）が誓いを反故にしたと碑に記したごとく、辰斯王とその子阿莘王は双方から厳しく臣従を迫られていた。

八年（277）には、百濟記を引用し、阿花（阿莘）王が日本（やまと）の枕彌多禮（とむたれ）、峴南（けんなむ）、支侵（ししむ）、谷那（こくな）（[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）、東韓の地を奪はれ、王子直支（とき：典支）を日本に質として送ってきたと記している(14）。百濟記は失はれて無く、百濟本紀には、そのような記述はないため、誰に奪はれたか確認ができないが、旧馬韓の勢力に奪われたとしか考へようがあるまい。半島の南と南西の主要な港は、日本にとっては、百濟への海路を確保する上でその安定は必須であり、それが慕韓にこだわる理由であった。また、洛東江を遡り、鳥嶺、竹嶺から百濟へ至るルートも重要であった。これ等のルートは後漢の時代から倭人が楽浪郡、洛陽へと至るために加羅と共に築いてきたものであり(15）、書紀の記述においては、任那がそれらへの拠点であった。洛東江の北方に進出し、卓淳國を足がかりにして加羅諸国を軍事的に支へる形で、新羅と対抗したことが百濟の注目する所となり、中国王朝との直接交易を行う上で障害となる高句麗に対抗するために、歩調を共にしたということになろう。すでに見た如く、近肖古王が高句麗を破り、北は、遼東、遼西、晋平二郡まで、南は馬韓といふ広大な地域を併合し、東晋に入貢しこの地の支配権を安堵せんと叙任をした。しかし、この急速な軍事的膨張は、百濟のみではまかない切れず、日本（やまと）への軍事傾斜が高まり、この反撃に出た談徳と激突することになる。

395年には、百濟は関彌城奪回を目指すも、浿水（ばいすい）で談徳に大敗を喫し、397年に太子の典支を倭國に送ったとしている(16）。402年に新羅が質を日本に送ったことは上にみた通りで、この時点で、半島で高句麗との矢面に立っていたのは、実態としては、日本（やまと）であったと見るべきであろう。書紀は該当する年代として、大鷦鷯天皇（仁德天皇）の晩年、去來穗別天皇（履中天皇）瑞齒別天皇（反正天皇）雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）を充てたが、その軍事的、外交的推進者としては、氣長足姫尊と譽田天皇政権を充てた。もう少し、譽田天皇政権に与へられた記述を見ておきたい。

譽田天皇（應神天皇）十四年（283）に百濟王（阿花）が縫衣工女を貢ぎ、弓月君が一族を率ゐ帰化するのを新羅が道を塞ぎ、加羅に留めおかれたのを、葛城襲津彦を派遣して迎へようとしたが、三年を要し(17）、その間十五年（284）に、百濟王が阿直伎（あちき）を派遣し、馬を献じ、阿直伎の助言で、荒田別を派遣し、王仁（わに）を迎へ(18）、十六年に王仁が來り、懸案の弓月君を迎へる為に新たに平群木菟宿禰、的戸田宿禰を新羅に送り、これを実現した(19）、とある。この年に阿花王は亡くなり（405年）、質となっていた直支（典支）を譽田天皇は百濟に戻し、東韓の地を与へて王とした。東韓の地とは甘羅城、高難城、爾林城とされるが、これは錦江の南岸一帯であり、何故、東韓といふか分からない、南韓といふべきものである(19）。二十年（289）に、阿知使主（あちのおみ）とその子都加使主（つかのおみ）等一族が帰化し(21）、二十五年（294）に直支王が亡くなり（420年）、その子、久爾辛（久尓辛）が立ったが、木滿致（もくまんち）が王の母と通じ国政を乱したのを、譽田天皇は召して注意したといふ(22）。二十八年（297）に高句麗が使者を派遣した時の表に「高麗の王、日本國に敎ふ。」といふ下りがあり、太子の菟道稚郎子（うぢのわきのいらつこ）が激怒した (23）とある。しかし、三十七年（306）に阿知使主・都加使主を呉（くれ）に派遣して縫工女を求めるに際し、高句麗に至り、高句麗王は久禮波（くれは）・久禮志（くれし）に道案内させ、呉王（こきし）から、工女兄媛・弟媛、呉織、穴織、四の婦女を賜り(24）、四十一年（310）に帰国するが、譽田天皇の死には間に合わなかったとあり(25）、高句麗との往来があった。書紀では呉を“くれ”、呉王を“こきし”と訓じ、中国の何処だか、半島の王のような呼び名で不明なものとなっている。百濟王との関連からすれば、この時の高句麗王は長壽王（璉）であり、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公に叙されていた。

書紀は、譽田天皇の時代に、馬がもたらされ、縫衣、縫工の技術をはじめとして、百濟から逃れる漢人達が、集団で日本（やまと）に帰化してきたとした。工人ばかりでなく、文人が本格的に導入されており、半島で行われていた部族連合から中央集権的な国家形成の息吹を吸収せんとする動きを記している。近肖古王が東晋に入貢し、「鎮東将軍領楽浪太守」に叙せられたこと、典支王（てんしおう）が宋から、使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王に叙せられたことも知っていた年代設定となっている。また、長壽王の時代の高句麗とは敵対しているのみならず、使節の往来があり、高句麗王を仲介して呉に使者を送ったと記していることは、十分注意すべきである。この時代に呉はすでになく、明らかに東晋、宋であるが、東晋、宋に朝貢したことを隠すために、国号を呉とし、縫工女を求めたと素知らぬ顔をした。倭は後漢の「漢委奴國王」の昔から「親魏倭王」の時代まで、洛陽へのルートを有しており、卑弥呼の使者を遇したのは司馬氏であり、その末裔が東晋を開いたものであり、倭が全く無縁といふものではない。中国の史書を読めば、高句麗とてその歴史はまぎれのない事実と認めざるを得ない。書紀はそのことを伏せるが、倭の五王と称される王がそのことを強調して、高句麗と渡り合ったとしても不思議はない。ただ、宋へのルートは分からなかった。そのために、譽田天皇は、阿知使主・都加使主などの漢人を用ゐ高句麗との往来を求め、宋へのルートを開発せむとした。ここまでの役割を書紀が譽田天皇に見たとなれば、譽田天皇が宋に使者を派遣し叙任を求めなかったと考へることは難しい。

唐の房玄齢（578～648）が659年に撰述した「晋書」によれば、413年に高句麗、倭國及び西南夷の銅頭大師が並んで方物を献上し、「太平御覧」に引用された「義煕起居注」によれば、倭国の方物は、貂皮と人参等であり、659年に李延寿が編纂した「南史」によれば、その倭王は讃といふ(26）。高句麗と敵対する倭が東晋に一緒に入貢することはあり得ず、倭が貂皮と人参という高句麗的な方物を献上するといふのも不自然で、これは高句麗が点数稼ぎに、倭人の捕虜を使者に仕立てて持たせて入貢させた、と釈する説が通用している(27）。そうであろうか？ 事実は小説より奇なりといふこともある。讃は「使持節、都督倭、**百濟**、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」の叙任を求めており、百濟としては、讃の東晋への入貢は阻止すべきであり、百濟が讃より先に東晋に入貢して「使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王」の叙任を得ようとする、というのが当時の情勢であろう。416年まで百濟は東晋への入貢を果たせずにおり、焦っていたとしてもおかしくはない。讃が百濟に先んじようとして、高句麗に頼って入貢したとしてもあり得ないことではない。

(1）「遂に其の國の中に入りまして、重寶（たから）の府庫（くら）を封（ゆひかた）め、圖籍文書（しるしのふみ）を收む。即ち皇后の所杖（つ）ける矛を以て、新羅の王の門に樹て、後葉の印としたまふ。故、其の矛、今猶新羅の王の門に樹てり。爰に新羅の王波沙寐錦（はさむきむ）、即ち微叱己知波珍干岐（みしこちはとりかんき）を以て質として、仍りて金銀彩色及綾羅（あやきぬ）縑絹（かとりのきぬ）を齎（もたら）して、八十艘の船に載れて、官軍に從はしむ。是を以て、新羅の王、常に八十船の調を以て日本國に貢る。其れ是の縁なり。是に、高麗、百濟、二の國の王、新羅の圖籍（しるしへふみた）を收めて日本國に降りぬと聞きて、密に其の軍勢を伺しむ。則ちえ勝つまじきことを知りて、自ら營の外に來て、叩頭みて款して曰す、「今より以後は、永く西蕃と稱ひつつ、朝貢絶たじ。」故、因りて、内官家屯倉（うちつみやけ）を定む。是所謂三韓なり。皇后、新羅より還りたまふ。」日本書紀　氣長足姫尊（神功皇后）仲哀天皇九年冬十月

(2）「元年（402年） 三月 倭国と好（よしみ）を通ず。奈勿王の子、未斯欣（みしきん）を以て質と為す。」三国史記　新羅本紀　実聖 尼師今

(3）日本書紀　氣長足姫尊　[五年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#五年春三月（やよひ）)　蹈鞴津（たたらのつ）は慶尚南道釜山の多大浦の古名、製鉄用の踏み鞴（ふいご）を”たたら”ともいふ。草羅（さわら）城（さし）の草羅は地名(歃良、ラは地名をつくる語尾)、慶尚南道梁山、梁山は蹈鞴津から北に陸路で新羅に向かう要衝の地、歃sapの音が鉏（さひ）、草（さわ）に通じ、鉏は鉄製農具、”すき”であり、農耕、土木工事に欠かせない道具、”すき”を入手できる方向をさす言葉として、鉏海、草羅が用いられると注される（日本書紀、巻二p414、415、岩波文庫）。葛城襲津彦はそれらの地の漢人技術者を連れて帰った。桑原の漢人とは、和名抄、大和國葛上郡桑原郷（御所市大字東寺田、旧掖上）、天平宝字二年六月条に桑原直を賜った時に、先祖を後漢苗裔鄧言興・帝利らが仁徳朝に高麗から帰化したとする（続紀）、あるいは、漢高祖七世孫、又は、高麗國人の万徳使主の後、又は狛國人漢匈月の後（姓氏録）、と注される（日本書紀、巻二p415、岩波文庫）。佐糜（さひ）の漢人とは、葛上郡佐味（御所市大字西佐味）、河内國石川郡佐備郷（富田林市佐備）、”さひ”は鉏であり韓鍛冶の技術に係わる者と注される。高宮は、「坐（ス）一言主（ノ）神社、即此、大和志云、高宮郷廢、今森脇、宮戸（ノ）二村存（邨岡良弼先生著、[日本地理志料](http://www.geocities.jp/huzisan/tirisiryou.htm)、[私設万葉文庫](http://www.geocities.jp/huzisan/)）」とあり葛上郡高宮郷は廃止され、御所市森脇、宮戸あたりに存した地となろう。忍海は、大和國忍海郡（葛城市新庄～脇田一帯）。養老三年十一月条に、雑戸忍海手入広道、同六年三月条の金作、韓鍛冶ら七十一戸の雑戸のうちに忍海漢人安得（伊勢）、麻呂（播磨）、忍海部乎太須（近江）などがある（続紀）、と注される（日本書紀、巻二p415、岩波文庫）。

(4）「二年（418年）秋 王の弟、未斯、倭國より逃げ還る。」三国史記　新羅本紀　訥祗 麻立干

(5）日本書紀　氣長足姫尊　[四十六年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十六年春三月)

(6）日本書紀　氣長足姫尊　[四十七年夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十七年夏四月)

(7）日本書紀　氣長足姫尊　[四十九年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十九年春三月)

(8）日本書紀　氣長足姫尊　[五十二年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#五十二年秋九月)

(9）「千熊長彦は、分明しく其の姓を知らざる人なり。一に云はく、武藏國の人。今は是、額田部槻本首等が始祖なりといふ。」日本書紀　氣長足姫尊　四十七年

(10）「時に上毛野君祖荒田別、巫別を百済に遣し、仍りて王仁を徴す。」日本書紀　応神紀

(11）氣長足姫尊の政策転換について　「[書紀における対外観　―その1　仁徳紀以前](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taigaikan-1.doc)」　上田啓之

(12）日本書紀　譽田天皇（應神天皇）　[三年の冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#三年冬十月（かむなづき）辛未)

(13）三國史記　百済本紀　[辰斯王八年](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/250316gen.htm)（392）

(14）日本書紀　譽田天皇（應神天皇）　[八年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#八年春三月（やよひ）)

(15）三章　漢文化を求めて　半島への進出、[書紀における対外観　―その1　仁徳紀以前](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taigaikan-1.doc)　上田啓之

(16）三國史記　百済本紀　[阿莘王四年（395）及び六年（397）](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/250317gen.htm)

(17）日本書紀　譽田天皇（應神天皇）　[十四年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十四年春二月（きさらぎ）)

(18）前掲書　[十五年秋八月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十五年秋八月（はづき）)

(19）前掲書　[十六年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十六年春二月（きさらぎ）)
(20）この東韓は、甘羅城、高難城、爾林城と記されている。甘羅（kam-ra）は史記の甘勿阿（kam-mur-a）今の全羅北道の咸悦とされ、爾林（ni-rim）は魏志、韓伝の馬韓の児林（ni-rim）、今の忠清南道の大興の古名、任城と比定(鮎貝房之進、日本書紀朝鮮地名攷)。末松保和氏は、史記の金堤郡利城県の古名、乃利阿（nai-ri-a）、咸悦の南三百里余、万項江の南岸、高難は未詳。錦江の南岸、万項江を中心とした一帯とされる（任那興亡史：古代の日本と朝鮮、吉川弘文堂p56-57）。東といふより南であり、何故東韓となるかは不明。末松氏の比定は倭の海路の要衝の一地域ひとまりと見ておられ合理的である。爾林を大興とすると、内陸部であり特別の事情がなければ、統治するメリットよりデメリットが大きい。

(21）前掲書　[廿年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿年秋九月（ながづき）)

(22）前掲書　[廿五年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿五年)

(23）前掲書　[廿八年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿八年秋九月（ながづき）)

(24）前掲書　[卅七年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#卅七年春二月（きさらぎ）)

(25）前掲書　[卌一年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#卅┼一年春二月（きさらぎ）)

(26）「是歳（九年）　高句驪、倭國、及び西南夷の銅頭大帥、並びて方物を獻ず。」晋書　安帝紀 義熈九年（413）

「倭国、貂皮・人参等を献ず。詔して細笙・麝香を賜う」義煕起居注　太平御覧　香部一、麝条

「晉の安帝の時、倭王讃使を遣はし朝貢す。」南史　東夷傳

武帝紀太康八年十二月条の「南夷扶南　西域康居各各使ひを遣はして来たり献ぜしむ。」同十年条の、「是の歳、東夷絶遠三十余國、西南夷二十余國、来献す。」「高句麗倭國及西南夷銅頭大師」で「高句麗倭國西南夷及銅頭大師」でないことから、高句麗、倭國及び西南夷の銅頭大師とする。倭の五王　空白の五世紀　坂元義種　教育社

(27）倭の五王　空白の五世紀　坂元義種　教育社

　　建康実録、巻十六、東夷高麗國条の「國に銀山有り。採りて貨と為す。并びに人参、貂皮（有り）」から、人参、貂皮は高句麗の産物と知られる。倭の特産品としては、珠類がある。倭國の使者が倭國の特産を持参せず、高句麗の特産を献上したというのは倭國本来の使者ではないことを示す。高句麗の「粛慎の楛矢・石砮」献上策は外交政策で粛慎の入貢を演出し、宋皇帝の自尊心をくすぐった。高句麗は倭との戦いで捕虜を獲得しており、倭國の使者とはその捕虜であったろう。唐代にも白村江の戦いで降伏した「倭衆」を封禅の儀に列し、唐帝の威徳を高めるに資している。遠夷入貢の名目で東晋の歓心を買い、自己の威勢を示した、としておられる。

　**大鷦鷯天皇（仁德天皇）、去來穗別天皇（履中天皇）、瑞齒別天皇（反正天皇）、雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）政権**

　書紀は、譽田天皇（應神天皇）政権以降413年に至るまで、半島関係の記述はパタリと影を潜める。十二年（324）に、高句麗が鐵の盾、鐵の的を貢ぎ、天皇は、高句麗の客人を招き、群臣及び百寮その的を射させたとある(1)。高句麗との間は必ずしも敵対ばかりしていたわけではない。石上神宮に伝わる５世紀の古墳時代の鉄の盾は143.32cmｘ83.63cmあるいは59.38cmｘ71.21cmの大きさがあり、鍛鉄の板を重ね合わせ、鋲で留められたもので、戦闘で実際に使はれたものではなく、儀式の際に置盾として用ゐられた、とみられている(2)。高句麗では、鉄は農具、武具のみならず、運搬用の引き車の車輪にも用ゐられていた。薄い鉄を車輪に巻き付ける技術があったとされる(3)。木製の盾に薄い鉄を貼り付けるなら、戦闘用にも用ゐることはできたであろう。武器のみならず、そのような技術を導入する目的で、招聘をしたのかもしれない。氣長足姫尊五年条に、草羅から連れ帰った鍛冶に携わる桑原の漢人は、高句麗から仁徳期に帰化してきたと注されており、高句麗を敵とばかり決め込むのは考へものであろう。高句麗の先の北魏に対する情報を得るためには、高句麗との交流を必要とした。

十七年（329）に新羅が朝貢しなかったため、的臣の祖砥田宿禰、小泊瀬造の祖賢遺臣を派遣して詰問したのであろう、八十艘の貢獻を回復した(4)、とある。八十艘を回復したことが余程印象的な出来事であったのだろう。四十一年（353）に、紀角宿禰を百濟に遣はして、國郡の境界を分かち、何を産出するかを記させた。これは税徴収の根本であり、これが出来ていなかった。百濟では、禮を失する王族、酒君（さけのきみ）がおり、それが出来ず、紀角宿禰が叱責し、百濟の王は、酒君を捕へ襲津彦に渡し、日本へ送った。酒君は、ところが、天皇が罪を赦し貴方の家に預けたとして石川錦織首（いしかはのにしこりのおびと）許呂斯（ころし）の家に逃げ込み、天皇も後にこれを許した、といふ(5)。石川錦織首許呂斯は葛城をも含む住吉大社の広大な神領の山を管理しており、姓氏録、右京諸蕃、刑部に「百済国より出る酒王なり」、和泉国諸蕃、百済公にも、「出自百済国酒王也」、六人部連に、「酒王之後也」とあり(6)、神領管理に渡来人を用ゐたのであろう、後（四十三年「355」条）に天皇の鷹狩りにも同行しており(7)、葛城襲津彦がつけた知恵かもしれない。通常、酒君進上の話は事実と認めがたいとされるが、切り捨てるのみでは如何なものか？五十八年（370）に呉國、高麗國が朝貢してきた(8)、ともある。呉としているのは宋であろう、書紀は呉までが日本に朝貢してきたという立場を執り、大鷦鷯天皇（仁德天皇）政権が朝貢するなど、あり得ないと宣言した。呉が朝貢してくるなどはあり得ない。倭には呉の末裔と称する勢力があり、魚豢（ぎょかん）の魏略、逸文に、「帯方より女國に至るは万二千余里、其の俗、男子皆黥して文す。其の旧語を聞くに、自ら太伯の後と謂ふ。」と記されており、中国人の意識を逆手にとって、こう記したのかもしれない。また、倭王珍の安東将軍、濟の安東大将軍の叙任には、宋からの使者が倭に派遣されており、それを日本（やまと）への朝貢としたのかもしれない。ただ、去來穗別天皇（履中天皇）、瑞齒別天皇（反正天皇）政権に至っては沈黙状態であり、雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）の三年（414）に、醫を新羅に求め、天皇の病を治し、厚く醫を賞して國に歸した(9)、と挿話があるにすぎない。

　かくも、言及が少ないのは、譽田天皇紀が半島情勢において、久爾辛王（くにしん、在位420－427）の時代までをカバーしており、書くべきことがないといふ事情による。まして、書紀の編者達は中国に朝貢した日本（やまと）の王は居ないといふ立場であり、中国の史書に現はれる朝貢する倭の王は、卑弥呼同様、伏せねばならなかった。

　大鷦鷯天皇（仁德天皇）は、当時、百姓が疲弊しており、「其れ天の君を立つるは、是百姓の爲になり。然れば君は百姓を以て本とす。是を以て、古の聖王は、一人も飢ゑ寒ゆるときには、顧みて身を責む。今百姓貧しきは、朕が貧しきなり。百姓富めるは、朕が富めるなり。未だ有らじ、百姓富みて君貧しといふことは。」と三年租税を免除し、民の生活を優先し、宮殿朽ち壞れて、府庫已に空しくも、その回復を待ったといふ。百姓は中国では姓があり官につく諸々の氏族、書紀では“おほみたから”と訓じられ民、全般を指す。日本（やまと）にも、中国の聖王、堯のごとき治世が行はれたとする(10)。これは、菟道稚郎子が王仁の教えに達せざることなし(11)としたと同じく、中国を意識して先王の道が行われていたと主張したものである。

大鷦鷯天皇の治世を際立たせるのは治水工事であった。「今朕、是の國を視れば、郊も澤も曠く遠くして、田圃少く乏し。且河の水横（よこさま）に逝（なが）れて、流末（かはじり）駚（とか）からず。聊（いささか）に霖雨（ながあめ）に逢へば、海潮逆上りて、巷里（むらさと）船に乘り、道路亦泥になりぬ。故、群臣共に視て、横なる源を決りて海に通せて、逆流を塞ぎて田宅を全くせよ。(12)」とあるように、難波は、北は淀川沿いの白肩（枚方）の津（船着場）南は大和川沿いの草香之津（盾津：八尾市）まで内海となっていた。海への水路を築く、水抜き池を造成し、堤防工事を行ふ。難波も奈良も水抜き工事を要し、巨大な陵墓造りもこの一環として行はれたものであろう。このために必須となったのが鉄製の道具である。武器も必要であるが、最新の土木機具と技術が田地を作り、農業を促進し、国富を増進し、兵力を養ふ。それ故、蹈鞴津（たたらのつ）から漢人鍛冶も連れ帰った。

上町台地上の高津宮の北の郊原を掘って、そこに南の川、大和川、或は、その支流を引き込んで、西海、外海、現在の大阪湾に流し、内海から外海への排水にとどまらず、港を外海側に設置することを可能にした。続いて淀川に大波が逆流したり、長雨で水が溢れるのを防ぐために、枚方付近に茨田（まむた）堤を築き(12)、十三年に茨田屯倉を立てている(13)。平野川に対しては横野堤を築いた(14)。十二年に山背の巨椋池の南側にあたる地に大溝を掘り、百姓が豊かになった(15)といふ。十四年に旧平野川の東岸、百濟から豚を飼う渡来人の集まる猪甘津に橋を架け港とした。高津宮の南門から直線で、奈良盆地をつなぐ竹内街道と交わる交通の要所である丹比（曳野市）まで大道を整備し、巾8m、深さ4m、長さ数kmの古市古墳群の古市の大溝も整備し、石川の水を引いて四万余の田を得、凶作の年がなくなったとも記している(16)。

譽田天皇の時代から、韓人等を領ゐて、劔池・輕池・鹿垣池・廐坂池などを作らせた(17)とあるが、大鷦鷯天皇の治世に行はれた治水事業による耕地の造成、道路、港の整備は、それ自体が巨大公共事業であり、食糧増産を促し、交易を振興させ、国を富ませ、半島へ進出への経済的基盤を生みだしていたのであろう。ただ、この政権については、前、前々政権のような対外的強行路線を感じさせるような記述はない。

1. 日本書紀　大鷦鷯天皇　[十二年秋七月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十二年秋七月（ふみづき）)
2. [橿原日記](http://www.bell.jp/pancho/kasihara_diary/2004_01_11.htm)
3. 「三国時代の生活③　高句麗、その二 鉄が歴史を動かした。」[韓国の歴史](http://www.coara.or.jp/~mieko/koreahistory/koreahistory17.htm)　永野美恵子
4. 日本書紀　大鷦鷯天皇　[十七年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki26.htm#十七年　新羅（しらき）)
5. 前掲書　大鷦鷯天皇　[四十一年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#卅┼一年春三月（やよひ）)　「天皇、酒君を召して、鳥を示せて曰はく、「是、何鳥ぞ。」酒君、對へて言す。「此の鳥の類、多に百濟に在り。馴し得てば能く人に從ふ。亦捷く飛びて諸の鳥を掠る。百濟の俗、此鳥を號けて倶知と曰ふ。」【是、今時の鷹なり。】乃ち酒君に授けて養馴む。幾時もあらずして馴くること得たり。酒君、則ち韋の緡を以て其の足に著けて、小鈴を以て其の尾に著けて、腕の上に居ゑて、天皇に獻る。」
6. 前掲書　巻二、p267 岩波文庫
7. 前掲書　大鷦鷯天皇　[四十三年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#卅┼三年秋九月（ながづき）)
8. 前掲書　大鷦鷯天皇　[五十八年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#五十八年夏五月)
9. 日本書紀　雄朝津間稚子宿禰天皇　[三年春正月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#三年春正月)
10. 前掲書　大鷦鷯天皇　[四年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#四年春二月（きさらぎ）)　[七年夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#七年夏四月（うづき）)　[十年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十年冬十月（かむなづき）)
11. 日本書紀　譽田天皇　[十五年秋八月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十五年秋八月（はづき）)
12. 日本書紀　大鷦鷯天皇　[十一年夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十一年夏四月（うづき）)　冬十月
13. 前掲書　大鷦鷯天皇　[十三年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十三年秋九月（ながづき）)
14. 前掲書　大鷦鷯天皇　[十三年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十三年秋九月（ながづき）)
15. 前掲書　大鷦鷯天皇　[十二年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十二年秋七月（ふみづき）)
16. 前掲書　大鷦鷯天皇　[十四年冬十一月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki25.htm#十四年冬十一月（しもづき）)
17. 日本書紀　譽田天皇　[七年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#七年秋九月（ながづき）)　[十一年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十一年冬十月（かむなづき）)

**大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）政権**大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）は、木梨輕太子以来の一族のスキャンダルに決着をつけるために、眉輪王（まよわのおほきみ）や兄の八釣白彦皇子（やつりのしろひこのみこ）と坂合黑彦皇子（さかあひのくろひこのみこ）を殺し、彼らが頼った圓大臣（つぶらのおほおみ）をも討った。また、穴穗天皇が後事を託した市邊押磐皇子（いちのへのおしはのみこ、去來穗別天皇「履中天皇」と葦田宿禰の女(むすめ)、黑媛との子）を狩に誘い出し、射殺しもした(1)。天皇に即位したときに、平群臣眞鳥を大臣とし、大伴連室屋、物部連目を大連としており(2)、彼等が葛城の勢力にとって代わった。かつては武内宿禰（たけしうちのすくね）の子、羽田矢代宿禰（はたのやしろのすくね）、巨勢小柄宿禰（こせのおからのすくね）、蘇我石川宿禰（そがのいしかはのすくね）、平群木菟宿禰（へぐりのつくのすくね）、紀角宿禰（きのつのすくね）、葛城襲津彦（かつらぎのそつびこ）等が、千熊長彦、荒田別、鹿我別など関東の武将と共に半島での政策を遂行していた。わけても、葛城襲津彦はその女（むすめ）の磐之媛が大鷦鷯天皇（仁德天皇）の皇后となり、その子葦田宿禰の女が去來穗別天皇（履中天皇）の皇妃となり、葛城勢は大きな力を有していたが、その子(3)、玉田宿禰、その子圓大臣が誅され力を失ったごとく、大泊瀬幼武天皇の登場は、新旧世代交代による新たな展開をみせた。しかし、この世代交代は半島政策においては、実力者達を欠き、高句麗と対抗した軍事展開を行うことは出来ず、百濟が高句麗に漢城を落されるのを座視せざるを得ないものとなった。
　大泊瀬幼武天皇は草香幡梭姫皇女を皇后とした。その兄は大草香皇子、日下の地にあり、新羅や高句麗との関係を持っていたが、その妻中蒂姫命（名形大娘皇女）を手中にせむとした穴穗天皇により討たれていた。その妹を皇后としたこと、続いて圓大臣の女（むすめ）、韓媛を妃にしており、日下や葛城の族との関係修復を図り、半島政策への協力をとりつけようとしたのであろう。つづいて、吉備の上道臣（あるいは吉備窪屋臣の女）、と和珥臣の女を妃としており、これも同じ路線にあった。
　即位の二年（458年）に驚くべき事件を記している。百濟の池津媛を迎へ、道中、石川楯の館に逗留させたのであろう。石川楯は、百濟の酒君を預かった石川錦織首と同系、そこで池津媛が石川楯を誘惑したといふ。天皇は激怒し、大伴室屋大連に命じて、二人を夫婦として四支を木に縛り焼き殺した(4)。百濟新撰によれば、己巳年（429年）のことで、455年即位の葢鹵王の年代と合致しないのであるが、天皇が阿禮奴跪（あれなこ）を派遣し、女郎（えはしと、身分ある女子をいう古代朝鮮語）を求め、百濟は、慕尼夫人の女を荘飾して、適稽女郎として貢進したとする。五年（461年）条に、葢鹵王が「女人を貢りて采女とせり。而るを既に禮無くして、我が國の名を失へり(5)。」としており、適稽女郎を采女としているが、二年条に置かれていることからすれば、一連の婚姻政策のなかにあり、大泊瀬幼武天皇は妃として、百濟王との姻戚関係を結ぼうとしたのかもしれない。采女の過失なら焼き殺すこともあるまい。慕尼夫人は未詳であるが、夫人は通例国君の妻を言ふ用語(6)、葢鹵王の夫人の娘と荘飾した可能性もあり、激怒して極刑に処したともみられる。

　歴史的には、倭王は讃の時より「使持節、都督倭、**百濟**、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」の叙任を求め、百濟に対する軍事権を中国側に認めさせようとして得られず、百濟は新羅と連携し、倭の影響力を排して、高句麗と対抗し、東晋以来「使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王」を維持せんとしていた。大泊瀬幼武天皇以前から、日本（やまと）は皇位継承の内乱、世代交代で半島への影響力も衰へており、天皇の側にも苛立ちがあった。

これに懲りて、葢鹵王は弟の軍君（崑支）を天皇に仕へさせたとしている。崑支は奇妙な行動を執った。王の婦を賜りたいその上で派遣してくれといふ。夫人は皇后に当たり、婦は妃に相当する。崑支にはすでに五人の子があり、その婦は自分のためではあるまい。王は更に奇妙なことに、妊婦、自分の子を宿している妃を賜ひ、子が生まれれば送り返すよう申し渡した。結果からすれば、その婦が筑紫の各羅嶋で生んだ子が、嶋君（斯摩）、後の武寧王となり(7)。また、崑支の第二子、末多王が東城王となる(8)。書紀は廿年（476年）条で、百濟記を引き、「蓋鹵王の乙卯年の冬に、狛の大軍、來りて、大城を攻むること七日七夜。王城降陷れて、遂に尉禮を失ふ。國王及び大后　王子等　皆敵の手に沒ぬ。」とし、更に廿一年条で、「天皇、百濟、高麗の爲に破れぬと聞きて、久麻那利を以て汶洲王に賜ひて、其の國を救ひ興す。・・・汶洲王は蓋鹵王の母の弟なり。」とした。つまり、葢鹵王、大后、王子すべてが殺され、葢鹵王の母の弟、汶洲を王とした。王子の名、人数は不明であるが、百濟内では王の血を引くものがすべて絶へたといふのが書紀の立場である。
　一方三國史記では全く様相が異なる。汶洲王は文周王で、葢鹵王の子であり、落城前に新羅に救援を求めさせており、王のあとを嗣ぎ、都を熊津に移し、弟の崑支を内臣佐平としたとある(9)。適稽女郎も、嶋君も、崑支が日本（やまと）に来た話も一切なく、崑支は文周王三年（477年）秋に熊津で没し、崑支の子が東城王、その二子が武寧王と、血が受け継がれたとしている。
　しかし、武寧王の墓が発掘され、墓碑、「寧東大将軍百済斯麻王、年六十二歳、 癸卯年（523年）五月丙戌朔七日壬辰崩到」からすれば、生年を461年とする書紀の年代と合致する。また、三國史記の葢鹵王に関する記述は、即位から14年間が空白であり、15年高句麗との戦いから始まり、北魏への使者派遣、そして漢城での滅亡で終わる。この空白期には、葢鹵王を一発逆転の北魏外交に踏み切らせた、日本（やまと）に対する上記のごとき幻滅の交渉があり、削除されたとみることができる。熊津における百濟政権の問題に入る前に、吉備を巡る事件を見ておきたい。

　大泊瀬幼武天皇は多くの血で地を染め、伊勢大神に仕へる長女を死に追いやる事件も起こし(10)、神々の不興を招き、葛城の一事主神(11)、三輪の大物主神、菟田の墨坂神(12)との和解を試み、吉野(13)や泊瀬(14)においても、国見のような行為を行ひ、国土安堵を願っている。ところが不穏な動きは、吉備に飛び火していた。七年(463年)帰郷した官者（とねり）の吉備弓削部（きびのゆげべ）虚空（おほぞら）が帰って来ないので、不審に思った天皇が身毛君（むけつきみ）大夫（ますらを）を吉備に派遣すると、吉備下道臣（きびのしもつみちのおみ）前津屋（さきつや）が虚空を留め置いていた。虚空の報告によれば、前津屋に不穏な下心(15)があり、天皇は物部兵士卅人を遣はして、前津屋并せて族七十人を誅殺した、とある。吉備下道郡は造山古墳・作山古墳の地であり、塩、鉄生産と海運により力を蓄えていた豪族であろう。

実は、この年に、吉備上道臣（きびのかみつみちのおみ）田狹（たさ）の自慢の美人妻、稚媛（わかひめ）を天皇は女御にし、田狹を任那國司にし、天皇はその間に稚媛を婦（妃）とした(16)。これは単なる女性問題にとどまらない。ある本によれば、稚媛は毛媛であり、玉田宿禰の女（むすめ） (17)としており、葛城勢力との関係が深く、天皇はここを手中に押さえようとしていたのであろう。六年夏四月(462.04)に、「呉國、使を遣して貢獻る」とあり、これは、宋書の「世祖孝武皇帝諱駿の大明四年（460）、十二月、倭國、使を遣し方物を獻ず。六年（462）、三月、倭國王の世子、興を以て安東將軍と為す」と合致する。武を大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）とするなら、これは興に対するもので合致しない。武はこれを不満とし、「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を自称し、順皇二年(478年)に「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王」に除されたことはすでにみた。南斉書よれば武は479年に鎮東大将軍、梁書によれば502年に征東大将軍に叙されており、大泊瀬幼武天皇が即位廿三年(478年)八月に崩じたとする書紀の記述とも合致しない。武、興の比定の問題があるが、歴史的には、呉國の使とは、宋からの叙任の使者とみられ、八年（464年）の春二月に、「身狹村主（むさのすぐり）靑（あを）・桧隈民使（ひのくまのたみのつかひ）博德（はかとこ）をして呉國に使しむ」とポツンと記されているのは、叙任の答礼となろう。
　同じく宋への叙任を求め入貢できなかった百濟の葢鹵王は、倭王の叙任は苦々しいが、安東将軍にとどまったことにはほっとしたことであろう。倭の半島における勢力の低下は宋の対応でも明らかであった。天皇は、半島に吉備の勢力を投入したのであるが、女性問題がこじれ、田狹はこともあろうに、新羅に救援を求めた。「時に、新羅、中國に事へず。」と記しているが、この中國とは中國（みかど）と訓じられ、日本（やまと）の天皇と注されている。天皇に仕へずの意味であるが、実に紛らはしく、中國の宋と勘違ひするので、注意を要する。この事態に、天皇は、田狹臣の子、弟君(18)と吉備海部直赤尾に新羅を討たせようとした。しかし、この時、西漢（かふちのあや）才伎歡因知利（てひとくわんいんちり）が韓國（からのくに）の才伎（工人）を連れ帰るよう進言し、新羅を討つというに、奇妙なことに、百濟に入っている。結局新羅を討つことなく、歡因知利が才伎を多数連れ帰っており、宋よりの叙任を百濟に告げ、祝い替はりに才伎を得たように映る。田狹臣は百濟に入った我が子、弟君に、お前もいづれ自分と同じ目に遭わされる、自分は任那に止まるのでお前は百濟に止まり日本（やまと）へ帰るなと使者を送り、背くよう促し弟君も迷ひ、派遣軍の立場は微妙なものとなった。ところが、弟君の婦（樟媛）が夫を秘かに殺し、吉備海部直赤尾と葢鹵王の献つる多数の才伎を連れ、一旦、大嶋（慶尚南道の南海島）に逃れ、天皇が日鷹吉士（ひたかのきし）堅磐（かたしは）固安錢（こあんぜん）を派遣して廣津(難波)に連れ帰ったとしている。日鷹吉士にも諸説があるが、紀伊や難波の水軍であろう(19)。どうやら、新羅、百濟と通じる勢力もあり、新羅、百濟側からの工作の手も及んでいたのかもしれない。吉備における内紛が半島情勢を不安定なものにしていた。
　八年条によれば、大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）が即位した頃から、新羅は日本（やまと）へ貢物を入れなくなり、「大きに中國の心を懼りたてまつりて、好を高麗に脩む」と記している。この中国も中國（みかど）である。日本（やまと）を恐れて、高句麗の精兵（騎兵）百人を駐留させていた。ところが、危急で本国から帰還命令を受けた高句麗兵に同行していた新羅の馬飼いが、「高句麗によって新羅が破れるのは先のことではない」と聞かされ、病と称して逃げ帰り、これを新羅の王に伝へ、これを聞いた新羅の王が秘かに高句麗の守備兵を殺させた。高句麗は、すぐさま、慶尚北道大邱、卓淳に大軍を送り、夜に歌舞を樂し、四面を包囲したと知らしめた。切羽詰まった新羅王は任那王に使者を送り、日本府（やまとのみこともち）の行軍元帥等（いくさのきみたち）の救援を求めた。任那王、勸膳臣（かしはでのおみ）斑鳩（いかるが）・吉備臣（きびのおみ）小梨（をなし）・難波吉士（なにはのきし）赤目子（あかめこ）がこれを救援した(20)。膳臣は天皇の食膳をまかなうことから起こった臣であり、ここでは天皇直属の系列の元帥となろうか。吉備と難波の駐留軍が動いた。“みこともち”とは天皇の御言（みこと）を以て政を行ふことであり、任那には国司（文官）と元帥（武官）がいた。日本府というものは、現在否定される方向にあるが、倭王濟のとき、「二十八年（451年）、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事を加へ、安東將軍は故（もと）の如くす。并せて上（たてまつ）る所の二十三人を軍、郡に除す（武の上表書）。」とあるごとく、将軍に叙授されると、長史、司馬、諮議参軍を置くことが出来、何らかの組織が編成される。更に、二十三人の軍（武官）、郡（文官）が叙任しており、倭が半島に何らかの強力な軍事行政機関を有しておらねば成立しない。いづれにせよ、書紀はこれを機に、新羅と高句麗の間に怨みが生じたとみている。これは百濟が新羅と手を組み、高句麗に対抗したという歴史とも合致する。
　氣長足姫尊（神功皇后）以来、日本（やまと）には、新羅は元来神託により、神が服することを約束された国とする意識が根底にある(21)。然るに、「朕が天下に王となると、對馬の外に出没し、匝羅（さふら：草羅、慶尚南道梁山）の表に潜伏し、高麗（高句麗）の貢を阻止し、百濟の城を併合している。朝聘はすでに参らず、貢物を納めることもない。狼の子の荒い心ありて、満腹すれば散り、飢ゑては群れる。汝、四卿を以て、大將を任せる。王師を以て攻め伐ち、天罰を慎みて行へ(22)。」即位して8年新羅は従ふどころか、新羅に向かう要衝の草羅を脅かし、対馬に出没している。九年に天皇は胸方神に凡河内直（おほしかふちのあたひ）香賜（かたぶ）と采女を遣して新羅親征の神託を求めた。しかし、あろうことか、香賜が神所で采女を犯すという不祥事が起こり、天皇親征はとりやめとなり、紀小弓宿禰（きのをゆみのすくね）・蘇我韓子宿禰（そがのからこのすくね）・大伴談連（おほとものかたりのむらじ）・小鹿火宿禰（をかひのすくね）等が派遣された。不吉な象であった。紀小弓宿禰は紀角宿禰の孫、蘇我韓子宿禰は石川宿禰の子孫、大伴談連は大伴室屋連の子、小鹿火宿禰は紀小弓宿禰の子であるが、対馬に新羅が出没する軍事情勢のなか、その親の代からすれば経験と力に劣り、大伴談連は戦死、紀小弓宿禰は病死する。息子の紀大磐宿禰（きのおひはのすくね）が新羅に向かい、小鹿火宿禰の軍を率ゐるが、用兵を巡り対立、韓子宿禰とも指揮権を巡り対立し、射殺する事態ともなり、軍としての統一を欠き、散々な敗戦となる(23)。

この処理を機に、大伴室屋大連は、小弓宿禰の妻、采女大海に請はれて紀小弓宿禰の葬儀を行ひ、紀氏の水軍と手を結び勢力を難波津、住吉津、男水門、紀水門へと拡大し、更に、采女大海の里、吉備上道にも進出した(24)。吉備下道の乱を押さえた物部氏も着実に勢力を拡大していた。二年条に、「天皇、心を以て師としたまふ。誤りて人を殺したまふこと衆し。天下、誹謗（そし）りて言（まう）す、『大（はなは）だ惡しくまします天皇なり。』唯愛寵（めぐ）みたまふ所は、史部（ふみひと）身狹村主（むさのすぐり）靑（あを）、桧隈民使（ひのくまのたみのつかひ）博德等（はかとこら）のみなり。」とあった。かつての武内宿禰のごとき師に恵まれず、この激動の時代に、己の心に照らし一切を塗り替へてきた大泊瀬幼武天皇である。心をゆるせたのは、渡来漢人系の身狹村主靑、桧隈民使博德等のみといふ、恐らく武の上表書も彼等の手になるものであり、当時の最大の懸案、対宋外交を委ねていたのであろう。十年（466年）に呉より二羽の鵝を持ち帰った、十二年（468年）に呉に使はした、十四年（468年）に呉國の使と共に、呉の獻れる手末の才伎、漢織・呉織及び衣縫兄媛・弟媛等を連れ帰った、としかその成果は記されていない。本来なら、順皇二年(478年)に再び武が「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王に除」されたこととその経緯が大書さるべき外交成果であった。書紀は、それらを一切削除し、別の記述を残した。

十一年（467年）に百濟から呉人の樂官が逃れて来たとある。自ら貴信（くゐしん、guixin）と名乗ったといふから中国音と一致する。百濟は宋から樂を学んでいたことになる。壃手（さかて、十市郡の阪手）屋形麻呂（やかたまろ、不詳）等がその琴を受け継いだとされる。中国では、樂官が国から逃れるのは、正しい樂を奏することができない、国が衰退していることを意味する(25)。これは百濟の政治の乱れを暗示している。
　十四年(468年)の呉の使者の饗応役に衆目の一致するところとして、根使主（ねのおみ）が選ばれた。根使主は穴穂天皇（安康天皇）元年条に大草香皇子の押木珠縵に目がくらみ、讒言をして大草香皇子を死に追いやったとされる坂本臣祖根使主である(26)。大草香皇子の妹、幡梭皇女（はたひのひめみこ）、今は皇后であられるが、根使主の頭にある玉縵を見て、息をのみ天を仰いでお嘆きになられた。殺された兄の玉縵がそこにあった。この経緯を知った天皇は根使主父子を誅し、子孫を二分し、一つは皇后のための大草香部民とし、もう一つは大草香皇子の忠臣、難波吉師（なにはのきし）日香蛟（ひかか）の子孫、難波吉士日香々を大草香部吉士とし、茅渟（淡路と和泉の間の海）での港湾労働に就かせたとしている。坂本臣の祖の話であるが、重用していた重臣の根使主のスキャンダルは外交的にも威信低下を招いたことになろう。

　廿年(476年)冬の条において、書紀は高句麗による百濟漢城の落城、蓋鹵王一族の滅亡を記した。高句麗の王は長寿王、高句麗の諸将は、百濟は高句麗に仕へたり、日本（やまと）に仕へたり常がない、この機に百濟を滅び尽くしてしまうべしとしたが、長寿王は、百濟は日本の官家であり、天皇に仕へていることは四隣（皆）の知るところであると、止めさせたといふ(27)。「日本國の官家」は氣長足姫尊（神功皇后）の前紀に用ゐられた表現(28)で書紀の譲れぬ立場であるが、長寿王がかような言葉を発することはあるまい。日本の反撃を招くと言はんばかりである。そして、百濟記を引いて、一族の滅亡を記したが、三国史記とは様相が異なることはすでにみた。譽田天皇（應神天皇）の時代ならば、これを座視するようなことはなかった。「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を自称しながら、救援の兵を差し出せなかったことは、倭王武としての面目のたたぬ展開であった。
　廿一年(477年)に天皇は、久麻那利（こむなり）を汶洲王（文周王）に賜ひて國を救い興したとし、日本舊記が久麻那利を末多王に賜ふとしたのは誤りで、久麻那利は、任那國の下哆呼唎縣（あろしたこりのこほり）の別邑とした。更に、二十三年条(479年)によれば、崑支の第二子（末多王）に、筑紫國の軍士、五百人を与へ、東城王としたとある。ここは解釈が難しい。
　日本舊記の成立年代が分からないが日本書紀編纂時からそう遠くない昔、日本と冠されており、天武十年（681年）の飛鳥浄御原令制定の詔が発布された以降の命名とされるが、久麻那利を末多王に賜ふと記されていた。天皇が手を打てたのは、日本舊記に記されたごとく、崑支の子、末多王の時を待たねばならなかった。しかし、書紀は、即刻行動を起こしていたと訂正をした。百濟本紀では、蓋鹵王の二十一年条には、蓋鹵王が国を存続させるために文周に木劦滿致を付けて南に行かせたとしている。木劦滿致は書紀においては、譽田天皇（應神天皇）二十五年（294年）に現はれる木滿致、木羅斤資の子である。木滿致が南に向かふとなれば、倭へ救援を求めてしかるべきであるが、結局のところ、動いたのは新羅であった。一万の援軍を得たが、すでに城が落ちており、文周王は、南の熊津に新たな根拠を移すことになった、と金富軾（三国史記の編者）は、書紀の見解を否定した。
　百濟本紀によれば、文周王は朝貢して宋の協力を求めようとしたが、高句麗に遮断され果たせず、耽羅國（済州島の国）との好（よしみ）を深め、実力者の貴族、解仇（かいきゅう）を兵官佐平とし、弟の昆支を内臣佐平としている。ところが崑支は早々に亡くなり、解仇が文周王を殺し、文周の子、若年の三斤（さんきん）が王位につく(29)が、解仇と燕信が軍事政治を牛耳る。その燕信が高句麗に逃れる事件が起こり、今度は、有力貴族の眞老、眞氏等が、解仇を討ち、三斤を王位につけたが、三斤王は即位三年で没し(30)、崑支の子、末多王（東城王）が立ったとする。
　筆者は書紀の引用する百濟記にあるごとく、汶洲王（文周王）は蓋鹵王の母の弟とみる。蓋鹵王の王子は殺され、血を引くものは、弟の崑支、九州で生まれた斯摩（嶋君）であるが、共に百濟におらず、文周が王となった。危急の時であり、蓋鹵王の叔父にあたる年配の文周を王としたが、彼には正統性がなく、有力貴族が軍事と国政を巡り、主導権争いをせざるを得なく、王権は安定しなかった。解仇と燕信が主導権を握り、日本（やまと）もこの状態のなかで有効な手が打てなかった。文周の子、三斤を立てて眞老、眞氏等が王権確立をしようとするが、衆望がなく三年で亡くなる。ここでようやく出番が巡り、日本（やまと）が蓋鹵王の弟、崑支の子、末多王を送りこんだ、とすれば話がつながる。
　そこでの問題は久麻那利（こむなり）である。久麻（くま）を“こむ”と訓じるのは、朝鮮語の古訓をそのまま伝えたもの、那利（なり、ナレ、ノリ）は川、津の意の古代朝鮮語で、久麻那利は熊川、熊津となる。熊川は慶尚南道昌原郡熊川面の地で任那の一部。熊津は忠清南道公州の古称で、漢城喪失後の百濟の都。下哆呼唎縣は、錦江の上流、全羅北道東北部から忠清南道の東南部にわたる地方（鮎貝説）、全羅南道の西南部、栄山江の東岸一帯（末松説）があると注(31)されている。
　譽田天皇八年条に、阿花（阿莘）王が日本（やまと）の枕彌多禮（とむたれ）、峴南（けんなむ）、支侵（ししむ）、谷那（こくな）（[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）、東韓の地を奪はれた、といふ記事、また、東韓の地とは甘羅城、高難城、爾林城といふ記事があり、氣長足姫尊と譽田天皇政権（注20）のところでそれを検討した。錦江の南岸、万項江を中心とした一帯を何故東韓といふのか、東韓ではなく南韓と疑問視した地域である。倭は後漢に朝貢し、卑弥呼の時代に魏に朝貢しており、帯方郡、楽浪郡、洛陽への海路を、加羅とともに開発し、中継地点として、栄山江、万項江、錦江下流に進出していたのであろう。あるいは洛東江から鳥嶺、竹嶺を越えて帯方郡へ向かうルートにも進出しており、辰韓、後の新羅と手を結んだり、衝突したりしている。倭王武が476年、宋に「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を求める使者を派遣しており、百濟情勢を好転させねば叙任はおぼつかない。日本舊記を訂正し、廿一年(477年)に天皇が、久麻那利を汶洲王（文周王）に賜ひて國を救い興したとする記述は、これに合致させるために必要であり、日本（やまと）は東韓に培った勢力を動員して、熊津における安定政権樹立に動いたと思はれる。しかし、478年に宋は「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」と百濟を除外して武を叙任しており、宋も百濟は独自の政権とみなしていたことになる。百濟情勢は、この時期には、百濟貴族の力のバランスと合議の中にあったとみるべきなのであろう。
　大泊瀬幼武天皇は雄略天皇と諡号を与へられ、倭王武ともみなされ、雄略、武といふイメージがあり、強力に半島外交を推し進めたように思はれがちである。倭王興のときと比べれば、一歩体制を立て直すことが出来ていた。しかし、国内粛清、世代交代により、新たに大伴氏や物部が勢力を拡大しているとはいへ、氣長足姫尊と譽田天皇政権と比較すれば、雲泥の差があり、高句麗の南下に対抗する力は衰へていた。

(1) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇前紀　冬十月
(2) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇前紀　冬十一月
(3) 葛城襲津彦━┳葦田宿禰┳蟻臣

　　　　　　　┃　　　　┗黒媛

　　　　　　　┣●●━━━玉田宿禰━━圓大臣━━韓媛

　　　　　　　┗磐之媛

雄朝津間稚子宿禰天皇紀（允恭天皇）では、玉田宿禰を襲津彦の孫とする。大泊瀬幼武天皇紀では子とする。
(4) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[二年秋七月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#二年秋七月)
(5) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[五年春四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#五年春二月)
(6) 論語、季氏篇に、「邦君の妻、君はこれを稱して夫人と曰ふ」とある。
(7) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[五年春四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#五年春二月)
(8) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇 廿三年夏四月
(9) 三國史記 、百済本紀第四、文周王、「文周王　或は汶洲と作す。蓋鹵王の子なり。初め毗有王、薨じて、蓋鹵位を嗣ぎ、文周之を輔け、位は上佐平（宰相の位）に至る。　蓋鹵の在位二十一年(475年）、高句麗來侵し漢城を圍む。蓋鹵嬰城し自らを固め、文周をして新羅に救を求めしむ。兵一萬を得て廻り、麗兵退くと雖も、城破れ王は死す。遂に即位す。性柔不斷にして亦民を愛し、百姓之を愛す。冬十月に、都を熊津（忠清南道公州市）に移す。
二年の春二月に、大豆山城（忠清北道清州市）を修葺（修復）し、漢（漢江）の北の民戸を移す。三月に、使を朝宋に遣すも、高句麗、路を塞ぎて達せずして還る。夏四月に、耽羅國（済州島の国）方物を獻じ、王喜びて、使者を拜して恩率（3等官の位）と爲す。秋八月に、解仇（実力者の貴族）を拜して兵官佐平と爲す。
三年の春二月に、宮室を重修す。夏四月に、王の弟の昆支を拜し内臣佐平と爲す。長子、三斤を封じて太子と爲す。五月に、黑龍、熊津に見ゆ。秋七月に内臣佐平の昆支卒す。」
(10) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[三年夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#三年夏四月)
(11) 前掲書　[四年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#四年春二月)
(12) 前掲書　[七年秋七月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#七年秋七月)
(13) 前掲書　四年秋八月
(14) 前掲書　[六年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#六年春二月)
(15) 前掲書　七年八月、「前津屋、小女を以ては天皇の人にし、大女を以ては己が人にして、競ひて相闘はしむ。幼女の勝つを見ては、即ち刀を拔きて殺す。復小なる雄鷄を以て、呼びて天皇の鷄として、毛を拔き翼を剪りて、大なる雄鷄を以て、呼びて己が鷄として、鈴・金の距を著けて、競ひて闘はしむ。禿なる鷄の勝つを見ては、亦刀を拔きて殺す。」
(16) 前掲書　七年是歳　吉備上道臣の女（むすめ）である稚媛と吉備上道臣田狹の妻の稚媛が別人で、片やの稚媛は妃で、磐城皇子と星川稚宮皇子を生み、片やの稚媛は女御（後に婦）で、兄君、弟君を生んでいるとなる。
(17) 前掲書、「別本に云く、田狹臣が婦の名は毛媛といふ。葛城襲津彦の子、玉田宿禰の女なり。天皇、體貌閑麗しと聞しめして、夫を殺して自ら幸しつといふ。」ともあり、吉備上道郡では葛城との縁が深く、半島での活動を行う上での中継拠点となっていた。
(18)この弟君は注16の兄君、弟君の弟君とは別で、田狹臣と稚媛の間の子、すでに成人であり、樟媛といふ妻を持っている。
(19)　大嶋は慶尚南道の南海島か、と注される。日鷹吉士堅磐固安錢は未詳、堅磐と固安錢の二人説あるいは、日鷹を九年条の難波の日鷹吉士と堅磐固安錢（堅磐を筑前国穂波郡堅磐郷）の二人説がある。日鷹を地名とすると、紀伊国の日高郡となり、ここの吉士が後に難波の吉士に包括されたとする説もある。いづれにせよ、膝下の難波、紀伊の水軍の援護を得て、赤尾、樟媛など吉備勢力と百濟の才伎、歡因知利などの一行を帰還させた。広津は難波の津の古称とも、大和川水運に通じる寺川の潮航点（奈良の安堵町）ともされる。広津邑に才伎等を安置したが病死するものが多かった。湿地帯の風土と合はなかったと思はれる。大伴大連室屋と東漢直掬に命じて、新漢陶部高貴・鞍部堅貴・畫部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等を、上桃原・下桃原・眞神原の三所に遷している。
(20) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[八年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#八年春二月)

(21) 日本書紀　足仲彦天皇　[八年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki20.htm#八年春正月)　橿日宮での神託
(22) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[九年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#三月（やよひ）)
(23) 前掲書　[九年夏五月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#夏五月（さつき）)
(24) 前掲書
(25) 論語、[微子篇9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/bishi.doc))に、「大師摯（し）齊に適（ゆ）く、亞飯（あはん）干（かん）楚に適く、三飯繚（りょう）蔡に適く、四飯缺（けつ）秦に適く。鼓（こ）方叔（ほうしゅく）河（か）に入り、播兆鼓（はとう）武漢に入り、少師陽、撃磬（げっけい）襄（じょう）海に入る。」とある。周が衰へ、その樂官が各国に逃れてゆく様とされる。
(26) 日本書紀　穴穂天皇　[元年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#元年（はじめのとし）春二月)
(27) 日本書紀　大泊瀬幼武天皇　[廿年冬](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki32.htm#廿年冬)
(28) 日本書紀　氣長足姫尊前紀　仲哀天皇九年[冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)
(29) 三國史記 、百済本紀第四、文周王
(30) 三國史記 、百済本紀第四、三斤王
(31) 岩波文庫　日本書紀　大泊瀬幼武天皇　P.83 補注14-23, P.363

**６．****倭の五王**

倭王讃は宋の高祖（劉裕）、珍と濟は太祖（文帝）、興は世祖（孝武帝）、武は順帝の時のこととして、沈約によって宋書に記された。武は南斉書、梁書にも記され、西暦では413年から502年の約百年間にあたる。中国では宋王朝の興亡の時代となる。
　三国時代の末に、魏が倭の卑弥呼と結び、平壌から楽浪、帯方郡を支配していた公孫氏を討ち、玄菟郡から帯方郡に至り太守を派遣し（1）、中国王朝による半島支配が復活したのであるが、長くは続かなかった。司馬氏が晋を開くが二代の恵帝の時代に内部から乱れ八王の乱となり、北中国は五胡十六国といふ非常に不安定な時期を迎へ、半島への支配力も急速に落ち、残された漢人受難の時代となる。反面、これらの漢人を取り込むことによって、部族連合体から王権を樹立した高句麗や百濟が勃興し、海の彼方の倭にも波及する。また、中国北方においても、匈奴・鮮卑・羯・氐・羌等の中には、漢化政策により急速に力をつけ、国家体制を整へ、東晋や宋を脅かす存在となっていたことは既にみた。

大局的にみれば、倭の五王の政策もその一環と言へよう。倭は、[対外観その１](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taigaikan-1.doc)、でみたごとく、奴國、邪馬台國の時代から、後漢や魏に入貢しており、また鏡や銅製品、鉄（鉄は通貨の役割も果たしていた）、陶器などとの交易を行っており、帯方郡、楽浪郡から洛陽に至るルートを確保するために、半島における中継となる港に進出もし、加羅諸国や辰韓や馬韓との協力関係を模索してきたのであろう。公孫氏が楽浪郡、帯方郡を支配したことは、倭の交易ルートを遮断する方向に動き、公孫氏を通さないと事が動かなくなり、その公孫氏を討つ魏と卑弥呼が手を結んだのは絶妙の外交であった。倭の五王からすれば、高句麗が、平壌、楽浪郡、帯方郡へと南下政策をとったことが脅威となり、百濟の利害と一致した。卑弥呼の時代と違って、そのルートを維持するためには、軍事力の投入が求められた。これを優位に進めるために、「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王」の叙授を宋に求め、「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を叙任したことは、外交的にも大成果であった。当時の記録が残されておれば、卑弥呼を凌駕した成果をあげたと大書されていたことであろう。
　ところが書紀編纂時の事情から、入貢して叙任した痕跡を残さない史書編纂を余儀なくされ、倭を奈良地方をさすものへと誘導し、独立自尊の日本（やまと）を用ゐ、それ以前の記録の不都合な部分を書き換へせしめた。このような傾向は、聖徳太子の時代から顕著となり、蘇我馬子と録したとされる「国記」・「天皇記」あたりから懸案とされていたことかもしれない。皇室の帝紀や本辞のみならず、諸家にもある帝紀や本（旧）辞（2）や墓碑などをそのまま放置しておくことは出来ず、有力豪族からはそれらを提出させて検閲をしたことであろう。

（1）「六年(正始245年)、復た之を征す。宮を遂（お）ひ買溝（地名）に奔る。儉（毋丘倹：魏の将軍）玄菟太守、王頎を遣し之を追はしむ」（三國志　魏書　卷二十八　王毋世丘諸葛鄧鍾伝　裴松之注）。正始八年に王頎は帯方太守に着任。
（2）「ここに天皇詔りたまひしく、「朕聞きたまへらく、『諸家の賷（もた）る帝紀及び本辭、既に正實に違（たが）ひ、多く虚僞を加ふ。』といへり。今の時に當たりて、その失（あやまり）を改めずは、未だ幾年をも經ずしてその旨滅びなむとす。これすなはち、邦家の經緯、王化の鴻基なり。故これ帝紀撰録し、舊辭討覈して僞を削り、實（まこと）定めて後葉に流（つた）へむと欲ふ」古事記、岩波文庫。単に皇室との異同、改変にとどまらず、朝貢に連なる記述をチェックした。難波吉士男人書、日本舊記などにそういうことが記されていた可能性もあろう。

**氣長足姫尊（神功皇后）の役割**
　さて、書紀は、氣長足姫尊が新羅に遠征する前に、大足彦忍代別天皇（おほたらしひこおしろわけのすめらみこと、景行天皇）が西国と東国を平定したことを記した。日本武尊による軍事遠征があり、大足彦忍代別天皇の東西にわたる多彩な婚姻政策や九州への巡行が記され、稚足彦天皇（わかたらしひこのすめらみこと、成武天皇）時代に力を貯える武内宿禰（たけしうちのすくね）の存在がクローズアップされる。日本武尊は吉備系、稚足彦天皇は美濃系、武内宿禰は紀系の血を引く。日本武尊による軍事遠征は建部（たけるべ）の存在に依拠し、また遠征により建部が拡張し、東西の兵を動員することを可能にした。稚足彦天皇の即位により、東国との関係が深まり、その後を日本武尊の子、足仲彦天皇（たらしなかつひこのすめらみこと、仲哀天皇）が継ぎ西国との関係にも配慮がなされた。この平定をうけて半島への進出が行はれたと解釈したくなるが、書紀は意外な展開を伝へている。
　足仲彦天皇二年（193）三月条に、「熊襲が叛きて朝貢らず。天皇、是に、將に熊襲國を討たむとす。」とある。天皇は武内宿禰を中心とする紀系の水軍を率ゐて（1）、穴門豐浦宮に入った。長府の忌宮神社境内に位置するのであるが、「数方庭祭」が八月に行はれ、社伝には、「第十四代仲哀天皇の御代、この地に豊浦宮が置かれましたが、九州の熊襲を扇動して新羅の塵輪（じんりん）が攻め寄せてきました。大変な苦戦をさせられましたが、最後に仲哀天皇自ら弓を引かれ、敵の大将塵輪を打倒されましたので、賊軍は色を失って退散し、人々は矛をかざして旗を振って歓喜のあまり踊り廻ったといわれます。これが数方庭の由来とされます。（2）」また、「蚕種渡来之地」という碑があり、「中国より秦の始皇十一世の子孫功満王がここ豊浦宮に滞在の仲哀天皇に蚕種（カイコの卵）献上し、我国養蚕の始まり」ともあり、漢人の渡来もあり、書紀や古事記には記載されていないが、熊襲が半島の勢力と関係を持ち、背いたと伝へている。朝貢せずといふ表現も、熊襲が外国のような印象を与へる。ところが193年は、新羅の前の辰韓の時代、卑弥呼の時であり、それ自体が矛盾しており、新羅とすれば、300年代後半のことになる。皇后、氣長足姫尊は角鹿（敦賀）から和珥（和邇）系の水軍を率ゐて、天皇と合流し、八年に橿日（香椎）宮に入った。瀬戸内海側と日本海側の水軍が結集した。六年をかけており、政府機能が山口、九州に移っていたことになる。ここで再び群臣に熊襲征伐を謀ったとき、新羅を討てといふ神託を得たとある。
　纒向（まきむく、奈良）からみる熊襲と橿日でみる熊襲の実体は違った。半島諸国の影が熊襲の背後にあり、決着をつけるには、熊襲のみならず、半島を制圧しなければならない。この認識は、纒向では現実感の薄いもので、天皇もこれを退けた。水軍をかかえる武内宿禰と氣長足姫尊は、かつて卑弥呼の時代、一大率が置かれ交易を管理していた当地の勢力から情報を得（3）、鉄の調達や諸々の技術の導入、それらを組織化できる人材を手にいれるためにも、この遠征に死活的重要性をみたのであろう、こういうことには疎い日本武尊の子等と袂を分かち、北陸及東方の諸國の視察（4）を行ったこともある武内宿禰が、千熊長彦、荒田別、鹿我別などの東国武人に手をのばし、天照大神の荒魂、天照大神の分身でもある稚日女尊、軍神、予知神、航海神を含む神託（5）を拠り所として新たな勢力を結集した。吉備の勢力を用ゐて熊襲国を討ち、遠征軍を募ったが集まりが悪く、三輪の大物主神に刀矛を奉じ、遠征は神の心と訴へ（6）、やっと兵を整へたようである。
　書紀は、神託が実現し、新羅王、波沙寐錦を捕え、飼部とし、重寶の府庫を封印し、圖籍文書を收め、内官家屯倉を定め、王の子を質とし、朝貢を約せしめて、日本（やまと）に連れ帰ったこと、蹈鞴津から草羅城を拔き、捕虜として漢人（鍛冶技術者）を連れ帰り、桑原・佐糜・高宮・忍海、凡て四の邑（村）の漢人等が始祖となったと記した。また、百濟の近肖古王の使者、久氐（くてい）等との接触が始まり、百濟の将軍木羅斤資（もくらこんし）等の加勢を得て新羅と加羅七国を平定したこと、王子の貴須と合流し、比利、辟中（万頂江流域）、布彌支、半古（栄山江流域）も平定し、これらを百濟の地とし、日本と百濟との固い絆が結ばれ、近肖古王からの七枝刀一口・七子鏡一面、及び種種の重寶を得たとも記した。これは350年以降の出来事であり、氣長足姫尊はその時代に生きておらねば成立しないことも既に見た（P.24～25）。書紀はこの部分の役割を氣長足姫尊（神功皇后）に割り振った。
　しかし、この最初の遠征の帰国を待っていたのは、日本武尊の子、麛坂王（かごさかのみこ）、忍熊王（おしくまのみこ）等の反目であった。足仲彦天皇の喪を伏し、神託と称して強引に遠征を行ひ、その子（後の誉田天皇）を太子にし、あとを継がせるのではないかと疑ひ、麛坂王や忍熊王等は、父、足仲彦天皇の陵を造るとして兵を結集し、東国の兵に援軍を求めた（7）。氣長足姫尊は、表筒男、中筒男、底筒男（航海神）の荒魂（あらみたま）を穴門の山田邑に、天照大神の荒魂を廣田（摂津国武庫郡広田神社の地）、稚日女尊を生田（生田神社の地）、事代主尊を長田（長田神社の地）、表筒男、中筒男、底筒男の和魂（にきみたま）を長峽（摂津国菟原郡住吉郷）に祭り（8）、神意を喧伝し味方を募り、古事記によれば喪船を用意して、御子をそこに乗せ、死んだと流言を放ち纒向に向かうが、危険を感じ、御子を紀國の日高に避難させている。日本武尊の威光を継ぐ忍熊王方の兵力は、東国の兵と合流すれば、圧倒的に優位であるが、氣長足姫尊方は紀國において諸臣と謀り、忍熊王を攻める決意を固める。この時日食が起こり、ここでも、古事記によれば、氣長足姫尊側は皇后が亡くなったと噂をばら撒き、武内宿禰は、地の利のある和珥臣を主力として軍を進め、宇治川において対峙し、互いに武器を捨て和そうともちかけ、忍熊王が武装解除したところを襲い、山科、瀬田へと追い、東国の兵と合流する前に忍熊王を瀬田川に討った（9）と伝へている。余程の劣勢とみへるが、謀略、奇策により、なりふり構はず旧勢力を分断し、ひたすら御子を守り、新しい時代を開いた。紀伊、難波、淀川から宇治、近江、敦賀、また播磨から吉備、穴門、橿日、半島というルートを、物と人の流が活性化した時代である。
　氣長足姫尊の本来の姿は、和珥氏と武内宿禰一族に支へられ、この新旧交代を成し遂げた女傑であったのかもしれない。卑弥呼を打ち消すために200年代の世界にワープされ、臨月の身重で男装して新羅に遠征した神がかり的な皇后とされたように思はれるがどうであろうか。

（1）「紀の国は古来より高句麗や加羅とつながりが深く、また紀ノ川の治水等も古くから行われており、農産物倉庫・馬具の出土と岩橋千塚の中心とするおびただしい古墳群は、その農業力、海運力、また良馬を入手できた（[神奈備](http://www.kamnavi.jp/ki/nichizen.htm)）。」とされる。
（2）仲哀７年（198）７月７日 仲哀天皇が豊浦宮に滞在していた時に、熊襲（くまそ）の扇動により、新羅の軍が攻めてきました。新羅軍の首領塵輪は、雲に乗って空を飛び、空から矢を放って皇軍を苦しめ、宮守護の阿部高麿と弟の助麿が戦死してしまいました。それを聞いた仲哀天皇は激怒し、自ら弓と矢を取って、塵輪に放ちました。　矢は見事 塵輪に命中し、地に落ちて息絶えました。首領を失った新羅軍は総崩れとなって逃げて行き、皇軍は勝利の歓声を上げて、塵輪輪の死体の周りを、刀や矛を振りかざしながら踊り回りました。死んだ塵輪の顔は鬼のようであったため、その首を埋めて大石で封印し、鬼石と名づけられました。数方庭祭、[ぶちしものせき](http://buchi-shimo.web.infoseek.co.jp/)
（3）日本書紀、足仲彦天皇二年八月条に、筑紫の伊覩縣主（いとのあがたぬし）の祖、五十迹手（いとて）が天皇に協力を申し出、天皇が五十迹手の本土を號けて、伊蘇國（いそのくに）としたとある。これは、魏志倭人伝の伊都國にあたる。「女王國より以北には、特に一大率（いちだいそつ）を置き、諸國を検察せしむ。諸國これを畏憚（いたん）す。常に伊都國に治（ち）す。國中において刺史の如きあり。王、使を遣わして京都・帯方郡・諸韓國に詣り、および郡の倭國に使するや、皆津に臨みて捜露し、文書・賜遣の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず。」と魏志倭人伝にある。
（4）日本書紀、大足彦忍代別天皇廿五年秋七月、廿七年の春二月
（5）日本書紀、氣長足姫尊前紀足仲彦天皇九年三月条、神風（かむかぜ）伊勢國之百傳（ももつたふ）度逢縣（わたらひのあがた）之拆鈴（さくすず）五十鈴宮（いすすずのみや）所居（ます）神　名撞賢木嚴之御魂（つきさかきいつのみたま）天疎向津媛命（あまさかるむかつひめのみこと）＝天照大神の荒魂、幡荻（はたすすき）穂（ほ）出吾也　於尾田（をだ）吾田節（あがたふし）之淡郡（あはのこほり）所居（をる）神＝天照大神の分身、稚日女尊、天事代於虚事代（あめにことしろそらにことしろ）玉籤入彦嚴之事代神（たまくしいりびこいつのことしろのかみ）＝予知神、日向國（ひむかのくに）橘小門（たちばなのをど）之水底（みなそこ）所居（ゐる）　而水葉（みなは）稚（わかやか）之出居神　名表筒男（うはつつのを）・中筒男（なかつつのを）・底筒男（そこつつのを）神＝航海神
（6）前掲書九年[九月条](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#秋九月（ながづき）庚午)　大物主神の助力が不可欠とされた。
（7）前掲書明年（10年）[二月条](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)
（8）前掲書
（9）前掲書[冬十月条](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）癸亥)

**譽田天皇（應神天皇）の役割**

八王の乱で弱体化した西晋は半島を維持できず、高句麗の美川（びせん）王が302年に玄菟郡、313年に楽浪郡、314年に帯方郡を落し、馬韓や辰韓に刺激を与へ、百濟や新羅が勃興する。百濟は、楽浪郡、帯方郡の漢人、漢文化を取り入れ、律や令を備える中央集権的国家建設を目指し、近肖古王の時に結実し、高句麗を破り、北は、遼東、遼西、晋平二郡まで、南は馬韓といふ広大な地域を併合し、369年、廃帝の東晋と結び、372年新たに即位した簡文帝から「鎮東将軍領楽浪太守」に叙せられたことは既に見た。

しかし、それは長く続かず、391年以降には、広開土王、談德、その子、長壽王により攻め込まれ、百濟も日本（やまと）も厳しい対決にさらされた。392年に辰斯王が談德に漢江の北を攻められ、恐れて兵を出すことなく、関彌（かんみ）城を落されたことを日本（やまと）側が紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を遣して厳しく詰問したことも既に見た。書紀はこれを、譽田天皇の時代のこととして記した。この間、広開土王碑や百濟本紀にもあるごとく、高句麗との戦闘においては倭の兵がむしろ前面に出ることがあり（P.10）、百濟が高句麗と倭の両方から臣従を迫られ、揺れている様が伺へる。
　その子阿花（阿莘）王が日本（やまと）の枕彌多禮（とむたれ）、峴南（けんなむ）、支侵（ししむ）、谷那（こくな）を失ひ、王子直支（とき：典支）を日本に質として送ってきたとも記し、これは、百濟が関彌城奪回を目指すも談徳に大敗を喫し、397年に太子の典支を倭國に送ったとする百濟本紀の記述と一致している。また、405年に阿花王が亡くなった時、質となっていた直支（典支）を百濟に戻し、錦江の南岸一帯の甘羅城、高難城、爾林城を与えて王としたともあり、譽田天皇は半島において平壌にまで軍を進め高句麗と対決した時の天皇となる。また、典支王が亡くなり（420年）、その子、久爾辛が王となったとき、木滿致（もくまんち）が王の母と通じ国政を乱したことにも言及しており、譽田天皇はこの時期まで生きていなければ成立しない。

　典支王は日本（やまと）の支援を得て王となったものの、416年に東晋に入貢し、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王に叙されている。410年に、劉裕が南燕の慕容超を滅ぼし、海路が開けて入貢が可能となり、東晋はかつての近肖古王との関係からこれを叙授したのであろう。高句麗は413年に使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公を叙任しており、倭王にとっては、典支王の叙任は、外交的な大きな失点となった。ただ東晋はすでに力を失っており、実権は417年に後秦を滅ぼし、宋王となった劉裕が握っていた。彼は、恭帝を擁立し安帝を殺害し、恭帝から禅譲の形をとり帝位につき、420年に宋を開いた。この時も、高句麗も百濟も倭も一斉に宋に朝貢し、叙任を求めた。高句麗は、すぐさま、使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公を叙授され、北魏対策から422年に、散騎常侍を加へ、督平州諸軍事をも叙授された。百濟は420年使持節、督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王を叙授され、少帝の景平二年（424）長史の張威を朝貢させ、元嘉二年（425）、太祖（文帝）より、使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王を再度叙授された。宋の帝位が代わる度に、その叙任を新たにするため、入貢を余儀なくされていた。

「晋書」安帝紀、 義熙九年(413) 条に、「是の歳、高句麗・倭国及び西南夷の銅頭大師、並びに方物を献ず」、「梁書」諸夷伝には、「晋の安帝の時、倭王讃有り」と記されており、倭王讃も入貢を試みていた。太平御覧九八一、義煕起居注に、「倭国は貂皮、人参等を献ず。詔して細笙・ 麝香を賜ふ。」とあり、貂皮、人参が高句麗の特産物であり、楽器と香料が倭に与へられており、高句麗と倭が一緒に入貢した（池田温氏：1977年共同入貢説）、あるいは、高句麗に捕えられた倭の捕虜が使者にされた（坂元義種氏：1981年捕虜倭人説）とみられている（1）。これは、譽田天皇の卅七年の春二月条の、「阿知使主・都加使主を呉に遣して、縫工女を求めしむ。爰に、阿知使主等、高麗國に渡りて、呉に逹らむと欲ふ。則ち高麗に至れども、更に道路を知らず。道を知る者を高麗に乞ふ。高麗の王、乃ち久禮波・久禮志、二人を副へて、導者とす。」と関連し、書紀における呉とは東晋あるいは宋のことであり、単独で入貢したともされる。どうやら、後漢や魏の時、洛陽へのルートを有していた倭であるが、南方の東晋、宋へのルートは有していなかったようである。高句麗とはすでにみたように対決ばかりでなく、交流があったことが記されており、書紀の認識によれば、高句麗を頼って東晋へのルートを確保したことになる。梁書、倭伝では、「其の後、復た男王を立つ。並びに中国の爵命を受く。晋安帝の時、倭王賛有り。」とされ、この倭の入貢に際しては、倭の存在を明らかにすることはできたが、叙任があったとしても、倭國王を認められた程度のものとされるにすぎない。倭王賛が非常に焦ったとしてもおかしくはない。百濟はこれを機に、日本（やまと）の影響力に距離を置き、新羅との友好を模索し、高句麗と対峙する方向へと舵をとり、このことは、余毘王の時に顕著となる。

倭王武の上表書に、「高祖永初二年（421年）、詔して曰はく、“倭の贊、万里、貢を修む、遠く誠に宜しきこと甄（あきら）かにして、除授を賜ふ可し。”太祖、元嘉二年（425年）、贊、又、司馬曹達を遣はし表を奉り方物を獻（たてまつ）る。贊、死す。弟の珍、立つ。使を遣はして貢獻す。自ら使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王を稱す。表して除正を求む。詔して安東將軍、倭國王に除す。珍、又、倭隋等十三人を平西、征虜、冠軍、輔國將軍に號（なづ）くことの除正を求む。詔して并せて听（ゆる）す。」とある。倭王が「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を自称し、叙任を求め、半島に将軍府を置き、武官、文官を任命し、挽回を図ったとして不思議は無い。

　譽田天皇は百濟から縫衣工女や馬を得、技術や物のみならず、阿直伎、王仁や弓月君等漢文化に長けた人材を求め、呉（東晋、宋）に至るためには、高句麗とも好を結び、高句麗の仲介で東晋へのルートを見い出した。しかし、太子の菟道稚郎子が王仁を師としたが、諸々の典籍に通じないもの無かった（十六年条）とか、高句麗の使者が「高麗の王、日本國に敎ふ。」とする表を差し出した時、激怒したといふ記述も行っており、知的水準を低いとみなされることへの反撥もあったようである。
　また、海人及び山守部を定め、長さ十丈の船（軽野船）を伊豆で造らせている（2）。海人部は、海産物を貢納する品部であるが、新羅遠征に寄与した住吉三神や古くから宗像三神を祭る海人族が力を得たことを意味する。十丈の船は、軽野船と称され、全長30m、100ﾄﾝ以上のもの（3）で、山守部は、船材を含め建築や土木工事用（陵墓、橋、港の整備）の材木管理、また、製鉄など火力としての需要も増大しており、有用材の植林や管理が重要視されたのであろう。高麗、百濟、任那、新羅の工人を招き、韓人池を造り（4）、続いて、劔池・輕池・鹿垣池・廐坂池（5）を造成しているが、これはかつての灌漑用や造田用の水抜き池でなく、韓風の趣のある宮殿と関連する池、外国よりの来朝者を意識した庭園であったと想像される。また、難波、淡路、吉備、日向との関係を深めており（6）、これは半島との海路をしっかり固める上で不可欠であった。
　しかし、母の氣長足姫尊（神功皇后）が卑弥呼の時代の干支で描かれたため、譽田天皇（應神天皇）も270～310年代の干支で記述されねばならなかった。通常倭の五王には譽田天皇は入らないが、書紀における事跡からすれば、賛とオーバーラップしており、除外することはできない。事跡からすれば、半島において果敢に行動を展開した天皇と云へよう。

（1）氣長足姫尊と譽田天皇政権　Ｐ.28の注26、27参照。貂皮、人参、細笙・ 麝香の解釈については、以下に詳しく論じられている。[5世紀の日韓関係](http://www.jkcf.or.jp/history/first/1/1-03-ishii_j.pdf)―倭の五王と高句麗・百濟　石井正敏氏

（2）日本書紀、譽田天皇[五年秋八月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#五年秋八月（はつき）庚寅)
（3）[書評「伊豆水軍」](http://www.burat.jp/members/blog/entry_disp.200610091750-3000000.200610091750-3000001.200803241712-3000094)永岡治著
（4）日本書紀、譽田天皇[七年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#七年秋九月（ながづき）)
（5）前掲書[十一年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#九年夏四月（うづき）)
（6）難波の大隅宮、前掲書[廿二年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿二年春三月（やよい）)
　　　淡路、吉備への巡行、吉備の下道臣、上道臣を定め、影響力を確保。前掲書春四月
　　　髪長媛の父、日向の諸縣君牛諸井の播磨の鹿子水門に入る姿は日向水軍。[十三年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十三年春三月（やよひ）)

**大鷦鷯天皇（仁德天皇）の役割**
　半島への遠征、近肖古王から典支あたりの百濟との関係、広開土王、談徳や初期の長寿王の高句麗との関係などは、氣長足姫尊（神功皇后）、譽田天皇（應神天皇）の治世で記されてしまい、大鷦鷯天皇には異なる役割が与へられた。
　対外的な面での言及は少ない。意外なことは、高句麗との交流が記され、高句麗とは対立ばかりしていたものではないことが伺へる。また、新羅に詰問の使者を派遣し、八十艘の貢獻を回復したこと、百濟に紀角宿禰を派遣して國郡の境界を分かち、記録させたことが記されている。貴族との、あるいは貴族間の境界紛争でもあったのか、百濟王の権威が落ちていたのであろう、これに介入する力を有していたことになる。また、呉國、高麗國が朝貢してきたとも記し、それは大鷦鷯天皇の聖徳のゆえであり、日本（やまと）が朝貢するなどありえないとした（P.29～30）。倭王武の上表書によれば、大鷦鷯天皇は歴史的には、安東将軍、倭國王を叙任した時期にあたる。
　書紀にはそのような素振りはなく、中国の聖王のごとき政治を行ったことを強調する。まずは、太子の菟道稚郎子（うぢのわきいらつこ）と政権を禅譲しあったことが記される。明徳ある菟道稚郎子であるが、統治能力に優れ仁徳のある大鷦鷯尊に皇位を譲るという立派な考え方が二人にあったと言ひたい。大鷦鷯尊は末子であり、太子を殺そうとする大山守皇子（おほやまもりのみこ）の動きを太子に伝へ一命を救い、太子は宇治に身を引き自ら命を絶ち、大鷦鷯尊に皇位を託した（1）。大鷦鷯天皇は、当時民が疲弊しており、三年租税を免除し、宮殿朽ち壞れて、府庫已に空しくも、民生の回復を待ったと云ふ。また、難波を中心として、淀川や大和川等の治水工事や港の造成、橋の整備、難波から丹比（曳野市）までの大道の建設など、交易を盛んにし、造田を行ひ、国を富ましたことは既に見た（P.29～30）。

　大山守皇子が不満を抱き、皇位を狙うという話は、難波を中心として海人が勢力を得る一方、山守、内陸部にある勢力の相対的な力の低下による苛立ちを象徴するものでもあった。内陸部であっても、葛城の一族や平群の族は紀の水軍と連携し、力を貯えていたが、乗り遅れる族も多くいた。氣長足姫尊や武内宿禰等と日本武尊の子等との争いの構図がその源にあった。難波、河内における急速な発展は奈良盆地からみれば、浮ついたものに見へたことであろう。また、百濟、新羅、高句麗との交流が深まるにつれ、親百濟、親新羅、親高句麗などと微妙に色合いがつき、百濟、新羅、高句麗の側からの工作も行はれる。
　女（むすめ）を大鷦鷯天皇の皇后（磐之媛命）とした葛城襲津彦（2）に関しては、妙な噂が流された。新羅からの美女に誘惑され、これをもらいうけ、加羅國を討った百濟記の沙至比跪（さちひこ）と同一視され（3）、半島から帰れなくなったとある。半島の武官や文官にはさまざまな誘惑があった。ハニートラップは古今東西を問わぬ謀略の手段である。交易の利をもって引き込まれることも同じ。また、その父、武内宿禰が弟の甘美内宿禰に「筑紫を割いて、三韓（馬韓、辰韓、秦韓）を招いて天下をとる」疑いありと讒言され、探湯（くがたち）により身の潔白を示すといふ事件（4）以降、力にかげりが見へ、半島政策が揺らぎ始める。磐之媛命と大鷦鷯天皇の不仲は大鷦鷯天皇の女性問題のみならず、その父、祖父の運命の変転が影響していた。開国政策、河内の急速な発展といふものは、スキャンダルとは無縁でなく、聖徳に満ちた政策でスタートしたはずの大鷦鷯天皇（仁徳天皇）の治世も歯止めが利かなくなったようである。西がガタつけば、東も不穏となり、蝦夷（5）や飛騨（6）で反乱も起こった。

かつて、蝦夷を偵察したのが武内宿禰、討伐したのが日本武尊、それに大足彦忍代別天皇（景行天皇）が従はせたのが、吉備武彦と大伴武日連であった。東征には西国の武人集団が動員されていた。日本武尊亡き後、蝦夷の騒乱を鎮めたのが御諸別王、毛野氏が東国で根を張ることとなった。そして、東国の武人集団が半島にまで動員された。西国と東国の実力者を共にまとめる力を有していたのが武内宿禰であり、その武内宿禰の凋落が大きな影を落としはじめていた。

（1）日本書紀、大鷦鷯天皇（仁德天皇）前紀　菟道稚郎子は、譽田天皇（應神天皇）と和珥臣（わにのおみ）祖（おや）日觸使主（ひふれのおみ）の女（むすめ）宮主宅媛（みやぬしやかひめ）との間の子。

（2）葛城襲津彦は武内宿禰の子とされるが、葛城垂水宿禰の地盤を継承すると見られている。稚日本根子彦大日日天皇（開化天皇）と葛城垂水宿禰の女（むすめ）、鸇比賣（わしひめ）の子、建豊波豆羅和気（たけとよはづらのわけ）王は、道守臣・忍海部造・御名部造・稲羽の忍海部・丹波の竹野別・依網の阿毘古等の祖とある。葛城のみならず、河内、そこから稲羽（因幡：鳥取県東部）あるいは竹野（丹後）へとルートが延びている。これは天日槍が播磨から出石、宇治川から琵琶湖を経由して敦賀から出石に入ったルートを想起させる。それは和珥氏のルートでもあった。葛城襲津彦は紀國に根を持つ武内宿禰と日本海ルートを固める和珥氏双方に関連をもつ系統を受け継いでいるものと思はれる。
（3）日本書紀、氣長足姫尊[六十二年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#六十二年)
（4）日本書紀、譽田天皇[九年春四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#九年夏四月（うづき）)
（5）日本書紀、大鷦鷯天皇[五十五年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#五十五年)
（6）前掲書、[六十五年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#六十五年)

**去來穗別天皇（履中天皇）、瑞齒別天皇（反正天皇）、雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）政権の役割**

大鷦鷯天皇（仁德天皇）と皇后、葛城襲津彦の女（むすめ）磐之媛命には、大兄（おほえの）去來穗別天皇（いざほわけのすめらみこと）、住吉仲皇子（すみのえのなかつみこ）、瑞齒別天皇（みつはわけのすめらみこと）、雄朝津間稚子宿禰天皇（をあさづまわくごのすくねのすめらみこと）の四人の御子がおられた。大鷦鷯天皇は去來穗別皇子を太子としておられたが、大鷦鷯天皇の喪室での喪を終へ、即位まで身を清めておくべきところを待てず、羽田矢代宿禰（はたのやしろのすくね）の女（むすめ）、黑媛との婚儀をすすめるために住吉仲皇子を遣はしたが、住吉仲皇が去來穗別皇子になりすまして、黑媛を寝取るという事件が起こった（1）。住吉仲皇子は去來穗別皇子の宮を密に囲んで殺そうとし、平群木莵宿禰（へぐりのつくのすくね）、物部大前宿禰（もののべのおほまへのすくね）、阿知使主（あちのおみ）が去來穗別皇子にそれを告げたが信ぜず（一説には酔いつぶれていた）、三人が去來穗別皇子を馬に乗せて脱出し、奈良に逃れようとしたといふ。阿曇連濱子（あづみのむらじはまこ）が、淡路の野嶋の海人に追跡させ、奈良に通じる道を塞いでいたのが倭直（やまとのあたひ）吾子籠（あごこ）であった（2）。いづれも半島と関連の深い族である。阿知使主は漢直（あやのあたひ）の祖（おや）、渡来人で外交交渉にもあたっており、これらの海人の勢力の不穏な動きを察知していたのかもしれない。平群木莵宿禰は大鷦鷯天皇と同じ日に生まれた武内宿禰の子、奈良の平群が拠点、物部大前宿禰は奈良石上を拠点とする。これらの勢力の助力により、危うく難を逃れ、奈良に入ることができた。

弟の瑞齒別皇子が難波を出て去來穗別皇子に協力を申し出たが、これを疑ひ、異心がないなら住吉仲皇子を殺せと申し渡した。誰を信じてよいのか、敵と味方に関して、錯綜した状態にあったのであろう。瑞齒別皇子は住吉仲皇子の近習の隼人、刺領巾（さしひれ）を謀（たばか）り、住吉仲皇子を殺さしめた（3）。この後、去來穗別天皇は、難波から磐余（いはれ）に都を移し、平群木莵宿禰、蘇賀滿智宿禰（そがのまちのすくね、蘇我石川宿禰の子）、物部伊苢弗大連（もののべのいこふのおほむらじ、物部大前宿禰の父）、圓大使主（つぶらのおほみ）（葛城襲津彦の子、玉田宿禰の子）に國事を任せている。いささか放縦に過ぎる難波から一旦距離を置かざるを得なかった、といふより、奈良盆地の勢力が世代交代をして難波に対する巻き返しを図り、体制の再編の時を迎へていたことが分かる。

阿知使主の果敢な行動は漢人系渡来人の評価を高めた。書紀は去來穗別天皇四年に國史（ふみひと）を置き、六年に藏部を定めた、とする。歴史的には大化の改新のごとき中央集権的組織の形成を要するが、そのような仕組みに理解があり、文書と計数に明るい人間が必要とされ、漢人系渡来人の進出を物語る挿話でもあった。阿知使主は百濟王が遣した阿直伎とは別で（4）、阿直岐（伎）は馬飼い役として派遣されたものであり、能く經典が讀めたが、これに関しては書首等の始祖（西文、河内書：かふちのふみ氏）となった王仁が本命となる。阿直岐は阿直岐史の始祖にすぎず、倭漢直の祖（東文、倭漢書：やまとのふみ氏）となった阿知使主は、都加使主等黨類十七縣を率て帰化し、坂上田麻呂等の上表では、高麗（高句麗）と百濟の間、帯方郡から逃れてきた漢人と称し、姓氏録では、高麗、百濟、新羅等の国に遍在していたが、大鷦鷯天皇（諡仁徳）の御世に来朝し、檜前に居を賜ひ、今来郡（後の高市郡）をたて、諸国にひろがり、摂津、参河（みかは）、近江、播磨、阿波等、漢人の村主、是なり、としている（5）。これに先立って渡来していたのが、人夫百廿縣を領ゐて歸化したとされる弓月君のグループであった（6）。広範な拡がりをみせる、いわゆる秦氏のグループである。倭人には半島の楽浪の彼方の漢人文化に対する憧れがあり、漢人の系譜は値打ちが高かった。辰韓の耆老の所伝によると秦滅亡時、秦人が逃れて馬韓に来り、馬韓はその東界を割いてこれに与へた（7）、と伝へられている。この集団は百濟、新羅が起こると半島南部、加羅に追い込まれ、更に、倭に逃れて来たとされる。時代的には魏が公孫氏を滅ぼし半島に圧力をかけ、部族連合の半島に国家としての高句麗、百濟、新羅が形成される時代であり、卑弥呼の後の時代のことである。書紀は、弓月君については、阿莘王の時代としている。これらの渡来人が政治の舞台に登場してくる時代でもあった。

難波で起こった反乱は、筑紫にも飛び火していた。五年の春三月に筑紫の三神（筑紫の胸肩（宗像）等が祭る神、田心姫、湍津姫、市杵嶋姫）が磐余稚櫻宮に現れ、何故我が民を奪うのか、恥を知れという不吉な憤りが天皇に告げられた。車持君が、三神の神戸を奪っているといふ訴へであった。この時代半島から馬の導入が行はれ、飼部、車持部が急速に肥大化したものと思はれる。馬のみならず、馬具をはじめ馬車、輿などの輸入にはじまり、筑紫がその窓口となったのであろう。車持君はいち早く、筑紫の車持部を押さえ、この流通の主導権を握った。しかるに去来穂別天皇（履中天皇）は、住吉仲皇子との対立から難波から磐余（稚櫻宮）あるいは石上へと撤退をしていた。阿曇連濱子と連携していた住吉仲皇子が討たれ、これらの統制が揺るぎ、車持君はその空白をついて三神の神戸を取り込んでいたのであろう。車持君は筑紫の車持部を兼ねることをやめ、車持部の神戸を三神（宗像神社）に返還したのであるが、半島への窓口にあたる筑紫におけるこの事件は、日本（やまと）の半島政策の足並みの乱れを更に大きくしたことであろう。

都が難波から磐余に移されたことは、奈良盆地への人と物の流れを拡大することになり、旧来の大和川の水運のみならず、難波から丹比に建設された街道、堺から泉南にかけての港が活性化させられ、大鷦鷯天皇（仁德天皇）の陵や百舌鳥耳原陵から古市の周辺が賑はいをみせ、讚岐國、阿波國の海人を取り込む婚姻政策もとられた（8）。この地の海人族は古くから吉野川、那賀川流域の湾岸に住み着いており、その南から入り込み、讚岐へと勢力を広げたことになろう。その姫達の兄は住吉邑に住んでいたとあり、阿波、讚岐、淡路、紀伊の水運に携はる勢力を取り込んだことになろう。
　氣長足姫尊（神功皇后）以降の開国政策、旧勢力との対決、難波・河内の興隆といふものから生じて来た社会の歪み、世代交代の流れが押し寄せていた。

　瑞齒別天皇（反正天皇）は五年で崩御され非常に短い治世であるが、都を河内の丹比（たじひ）に置かれている。難波から奈良に向かう大道が竹内街道と交はるあたり、半島との交渉を考へ、難波も磐余も双方を睨むことが出来るこの地に着目された。これが、この地の族の勢力拡大に資したことは、後にみることにする。

（1）日本書紀、去來穗別天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki28.htm)

（2）淡路の野嶋の海人は、倭の屯田及び屯倉について額田大中彦皇子が悶着を起こしたとき、大鷦鷯尊（仁徳天皇）が倭直の祖、麻呂に韓国へ行かせ吾子籠を連れ戻すことを命じたとき、水手として手配をした淡路の御原の海人（[書紀巻11](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/shoki25.htm)）を連想させる。阿曇連濱子、阿曇（安曇）氏は海人族、氣長足姫尊（神功皇后）の水先案内をしたのが志賀島の海人、阿曇磯良であり、淡路島も阿曇氏の本拠地の一つ。仲皇子は住吉であり、海人の協力を得ていた。

（3）日本書紀、去來穗別天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki28.htm)

（4）日本書紀、譽田天皇[十五年秋八月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十五年秋八月（はづき）)

（5）日本書紀、譽田天皇[廿年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿年秋九月（ながづき）)　坂上田麻呂等の上表では、「臣等、本より是れ後漢靈帝の曾孫、阿智王の後なり。・・・七姓の民を携へて、歸化、來朝す」とある。姓氏録第廿三巻に、「七姓第一は段。これは高向村主、高向史、高向調使、評首、民使主首等の祖なり。次、李姓。これ刑部史の祖なり。次、皂郭姓。これは坂合部首、佐大首等の祖なり。次、朱姓。これは小市、佐奈宜等の祖なり。次、多姓。これは檜前調使等の祖なり。次、皂姓。これは大和国宇太郡、佐波多村主、長幡部等の祖なり。次、高姓。これは檜前村主の祖なり」、とある。
（6）日本書紀、譽田天皇[十四年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十四年春二月（きさらぎ）)　弓月君は融通王ともされ、姓氏録、左京諸蕃に、「太秦公宿禰、秦始皇帝三世孫孝武王より出るなり。男功満王。帯仲彦天皇（謚仲哀。）の八年に来朝す。男融通王（一に、弓月王と云ふ。）誉田天皇（謚応神。）十四年。来廿七県の百姓を率ゐ帰化す。金銀玉帛等の物を献る。」山城国諸蕃に、「秦忌寸、太秦公宿禰と同祖、秦始皇帝の後なり。功智王。弓月王。誉田天皇（謚応神。）の十四年に来朝す。上表して更に帰国す。百廿七県の伯姓を率ゐ帰化す。并せて金銀玉帛種々の宝物等を献る。天皇これを嘉ぶ。大和朝津間腋上の地を賜ひここに居す。」とある。
（7）三國志魏書**、**辰韓伝に、「辰韓、馬韓の東に在り。其の耆老（古老）世に傳ふ、自ら言ふに古の亡人にして秦役を避け來たりて韓國へ適く、馬韓、其の東界の地を割き與ふ。」とある。
（8）日本書紀、去來穗別天皇[六年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki28.htm#六年春正月)

　瑞齒別天皇は後継者を決めないまま崩御され、末弟の雄朝津間稚子宿禰、大鷦鷯天皇と日向髮長媛との間の子、大草香皇子、去來穗別天皇の子、磐坂市邊押羽皇子が候補とされたことであろう。雄朝津間稚子宿禰は、母、磐之媛の故郷、朝津間（あさづま）、大和葛上郡（御所市朝妻）、弓月君が入った地、大和朝津間腋上、いささか異国的雰囲気のある地で育ったゆえの命名であろう、成人されて病を得て身の不自由があり、大鷦鷯天皇からは後継者となることはないとされていた。大草香皇子は日下に居られ、新羅や高句麗との交易にも携わっておられた。群臣から皇位に就くことを推されたのは、雄朝津間稚子宿禰であったが、首を縦に振られなかったといふ（1）。書紀によれば、三年目の冬に、妻の忍坂大中姫命の決死の覚悟におされて帝位に就かれたとあり、本来ならあり得ないとされた天皇就任となった。

　皇后のこの功績をもって、刑部（おしさかべ）を定めている。これは忍坂部であり、忍坂は皇后の生まれた地、息長氏の地でもある。この部は、山城、河内、摂津、美濃、尾張、遠江、駿河、武蔵、上総、下総、信濃、越前、丹波、但馬、伯耆、出雲、備中、周防、讃岐、豊前、肥後等に分布してをおり、その他、地名より伊勢、三河、下野、因幡、備後（以上郷名）、社名より播磨等に分布していたことが推定できると注されるごとく（2）、後に全国的に広がる御名代としての起源とみられている。各地において皇室の用に供する人々を豪族が提供し、地方において優位に立とうとする。また、豪族がその子弟を宮中に出仕させることも名誉なことであった。若い女性を采女、若い男性を舎人とした。出仕にあっては、出自が物を言ふ、ところが姓に関して乱れが生じていた（3）。開国がもたらす交易や開発事業、渡来人の任用など、血統を誇張、捏造、騙ることが行はれていたのであろう。しかし、姓を正すとなれば、臣にとっては死活的となる（4）。姓（かばね）とは「臣」「連」「宿禰」「別」「造」「首」「縣主」「稲置」「直」などのこと。歴史的にはこの後の雄略天皇の時代に、杖刀人（武官）、典曹人(文官）という制度の原初的形態が確認される程度で、姓の制度は成立していないのであるが、書紀においては、上古となれば、建国の時代に遡り適用をしており、この限りでない。一旦手にした姓をもし手放さねばならぬとすれば、重大事である。探湯（くがたち）という神判を用ゐており、熱湯に手を入れる、あるいは熱した鉄に手を置き、正しい申告をすれば手はそのまま無事であるが、偽の申告をすれば手がただれる（5）。神判であり、誤審を申し出ることはできぬものであるが、これを断行したといふことは、相当の政治力を有していたことを物語る。

　また、五年（416年）秋七月条に、武内宿禰、葛城襲津彦と続く勢力の象徴である玉田宿禰を捕へて誅すという事件を記している（6）。ここでは、葛城襲津彦の孫としているが、大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）七年条では葛城襲津彦の子である。これは、雄朝津間稚子宿禰天皇の政治力の強さを示すものであり、姓を正された族の不満が玉田宿禰のもとに集まっていたことも考へられる。また、倭王武の上表書に、倭王濟が大軍を興して高句麗を攻めようとしたが、俄かに父兄を失ひ喪に服すため派兵をとりやめたとする記述に合致する天皇でもあり、半島における外交の主導権を葛城一族からシフトさせたとも見られる。

　雄朝津間稚子宿禰天皇は、本来は自分を天皇に押し上げた皇后忍坂大中姫命には頭が上がらないのではあるが、その妹で近江の坂田にいる弟姫（おとひめ）を召された。坂田は、息長氏の本貫地であり、半島政策を進めるために息長氏に更なるテコ入れをしたのであろうが、「容姿絶妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて晃れり。是を以て、時人、號けて衣通郎姫と曰す。」といふ美女であり、藤原宮に置くも、皇后の嫉妬甚だしく、更に、姫の宮室を河内の茅渟（ちぬ）に移したとある（7）。泉佐野市日根野、狩場のあったところであるが、男里川の流域は、良港があり、佐野川流域では、鉄生産も行はれており、堺周辺と同じく物資の流通が盛んになっていた地でもある。丹比に宮が置かれたことにもよろう。

　この衣通郎姫とは、色香が衣を透して昇る、つまり肌がすすけて見える絹織物が前提となり、また肌そのものが美しい女性である。書紀では、絹織物、裁縫技術の導入についてしきりに記され、宮中には采女や舎人が送りこまれており、そのような衣服を若い女性が着用して、天皇や皇族、舎人の目を集めるという現象が起こっていた。また、天皇が肉と野菜の温スープを食されたとあるごとく、難波には豚を飼う渡来人が集められ、禽獣の狩りの話も頻繁にあらはれ、肌に潤を与へる脂質を食する習慣も始まっていた。おそらくは、半島を通じて中国の白塗りの化粧が輸入されてもいたのであろう。どうやら、宮中の生活のスタイルに変化が起こっていた。皇族の男女間の恋愛、兄弟姉妹の間の恋が皇位継承にからみ、政治に影響を与へることが多くなる。天皇が最終的に、衣通郎姫を藤原の宮に置き、姫のために諸国に藤原部を定めたのは、大伴室屋連の働きがあった（8）。これは、大伴氏台頭を告げるものでもあった。

　雄朝津間稚子宿禰天皇紀には、新羅に医師を求め治癒されたこと（9）、死に際して、新羅の王が非常に悲しみ、弔問の使者団、調の船八十艘、及び種々の樂人八十を難波経由で、遠飛鳥宮まで派遣したこと（10）が記されている。新羅本紀においては、高句麗が新羅北辺や百濟をしばしば侵犯し、新羅は百濟を救援するなど、共同歩調をとる姿が記され、倭は新羅の東に侵犯するという記述が目立っているものの、ここではがらっと異なる世界が描かれている。雄朝津間稚子宿禰天皇は東晋から宋への政権交代や北魏の勢力拡大といふ大陸での情勢の変化のなかで、新たな半島政策を模索しておられたのかもしれない。新羅との関係改善にも着手しておられたのかもしれない。しかし、晩年には、膝元の太子と妹の間の恋をきっかけに、兄弟姉妹間の骨肉の争い、スキャンダルが渦巻き、それどころではなくなっていた。

（1）日本書紀、雄朝津間稚子宿禰天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm)

（2）岩波文庫、日本書紀（二）雄朝津間稚子宿禰天皇二年条　P.311　注四
（3）日本書紀、雄朝津間稚子宿禰天皇[四年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#四年秋九月)　、「上古、治ること、人民所を得て、姓名錯ふこと勿し。今朕、踐祚りて、茲に四年。上下相爭ひて、百姓安からず。或いは誤りて己が姓を失ふ。或いは故に高き氏を認む。其れ治むるに至らざることは、蓋し是に由りてなり。朕、不賢しと雖も、豈に其の錯へるを正さざらむや。群臣、議り定めて奏せ。群臣、皆言す、「陛下、失を擧げ枉れるを正して、氏姓を定めたまはば、臣等、冒死へまつらむ。」
（4）前掲書
（5）前掲書　「群卿百寮及び諸の國造等、皆各言す、『或いは帝皇の裔、或いは異しくして天降れり。』　然れども三才顯れ分れしより以來、多に萬歳を歴ぬ。是を以て、一の氏蕃息りて、更に萬姓に爲れり。其の實知り難し。故、諸の氏姓の人等、沐浴齋戒して、各盟神探湯せよ。」　則ち味橿丘の辭禍戸砷に、探湯瓮を坐ゑて、諸人を引きて赴かしめて曰はく、「實を得むものは全からむ。僞らば必ず害れなむ。【盟神探湯　此を區訶陀智と云ふ。或いは泥を釜に納れて煮沸して手を攘りて湯の泥を探る。或いは斧を火の色に燒いて掌に置く】　是に、諸人、各木綿手繦を著て、釜に赴きて探湯す。則ち實を得る者は自ら全く、實を得ざる者は皆傷れぬ。是を以て、故に詐る者は、愕然ぢて、豫め退きて進むこと無し。是より後、氏姓自づから定りて、更に詐る人無し。」
（6）日本書紀、雄朝津間稚子宿禰天皇[五年秋七月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#五年秋七月)
（7）前掲書、[七年冬十二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#七年冬十二月)、[八年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#八年春二月)

（8）前掲書、[十一年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#十一年春三月)
（9）前掲書、[三年春正月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#三年春正月)
（10）前掲書、[四十二年春正月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#卅十二年春正月)

**穴穂天皇（安康天皇）の役割**
　雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）と皇后、忍坂大中姫の間には、木梨輕皇子（きなしのかるのみこ）名形大娘皇女（ながたのおほいらつめのひめみこ）境黑彦皇子（さかひのくろひこのみこ）穴穂天皇（あなほのすめらみこと）輕大娘皇女（かるのおほいらつめのひめみこ）八釣白彦皇子（やつりのしろひこのみこ）大泊瀬稚武天皇（おほはつせのわかたけのすめらみこと）但馬橘大娘皇女（たぢまのたちばなのおほいらつめのひめみこ）酒見皇女（さかみのひめみこ）の九子がおられた。雄朝津間稚子宿禰天皇は木梨輕皇子を太子と定めておられたが、輕大娘皇女との間の近親相姦の恋に落ちてしまはれた。古事記によれば、木梨輕皇子は皇位より妹を求め讃岐に流され、輕大娘皇女もすべてをなげうち讃岐へ渡り、二人はそこで心中をされる姿が描かれている（1）。書紀では、輕大娘皇女が流罪となり、雄朝津間稚子宿禰天皇の死後、葬儀の後、木梨輕皇子が、今度は婦女暴行を犯し、人心が穴穂皇子に傾き、穴穂皇子を襲おうとしたところ逆襲にあい、物部大前宿禰の家に逃げ込み、そこで落命されたとする（2）。
　穴穂天皇は、驚いたことには、あわただしくもその年の12月の中旬に、物部大前宿禰の拠点である石上に宮を移し、穴穂宮としている（3）。かように強引な遷都は事前の準備なくしては困難であり、木梨輕皇子を陥れ死に追いやったのは、どうやらこの二人の既定の路線であったと筆者はみている。更に、妙なことに、穴穂天皇は自らの皇后選びに先立ち、大泊瀬皇子と大草香皇子の妹、幡梭皇女（はたひのひめみこ）の結婚話をすすめた。この使者に立った坂本臣（さかもとのおみ）祖、根使主（ねのおみ）は、大草香皇子の持つ「押木珠縵（おしきのたまかづら）」に目が眩み、大草香皇子がこの婚儀に反対していると讒言し、怒った天皇が大草香皇子を殺し、根使主が押木珠縵を手中にしたといふ（4）。押木珠縵は、新羅の古墳の遺物に多くみられる、金銅を縵のごとく加工し、珠を埋め込んだ冠とみられている。自らを「物を船に積みて潮を待つ者」とたとえておられる大草香皇子が、押木珠縵を秘蔵しておられるといふは、新羅との交易に携わっていたとみられ、難波吉師が家来でもあり、姓氏録、右京諸蕃下に、「難波連、高麗国好太王より出ず」と注されており、高麗（高句麗）との関係もお持ちであり、雄朝津間稚子宿禰天皇の新羅、高句麗との交渉を担当しておられたのであろう。

実は、その大草香皇子の妻、中蒂姫（なかしひめ）を穴穂天皇は皇后とすることを求めておられた。この中蒂姫は、公式には、去來穗別天皇（履中天皇）と次妃、幡梭皇女（はたびのひめみこ）の間の子とされるが、「更名（またのな）長田大娘皇女（なかたのおほいらつめのひめみこ）」と大泊瀬幼武天皇前紀に記されている（5）。古事記が「（穴穂御子は）大日下王を殺して、その嫡妻、長田大郎女を取り持ち来て、皇后としたまひき。」としていることを受けてのことであろうが、その音が名形大娘皇女（ながたのおほいらつめのひめみこ）に通じており、穴穂天皇の姉にあたる。このスキャンダルは封印されたのであるが、更なるスキャンダルを産み出していた。穴穂天皇は、大草香皇子と中蒂姫との間の子、童子であった眉輪王（まよわのおほきみ）に殺された（6）。大泊瀬幼武天皇前紀によれば、「穴穗天皇、皇后の膝に枕したまひて、晝醉ひて眠臥したまへり。是に、眉輪王、其の熟睡ませるを伺ひて、刺し殺せまつりつ。」とあり、皇后も同意されていたとみている。眉輪王は父の仇を討ったのみで、天位を求めるものではないとしており、眉輪王を操る者がいた。末弟の大泊瀬幼武皇子は二人の兄、境黑彦皇子と八釣白彦皇子を疑い、八釣白彦皇子を問い詰めたところ沈黙してしまったので伐り殺した。眉輪王と境黑彦皇子は恐れて、圓大臣の宅に逃げ込んだが、大泊瀬幼武皇子は火をかけて全てを焼き殺している（7）。また、皇位継承が可能な市邊押磐皇子（いちべのおしはのみこ）をも狩に誘い射殺し（8）、一切を封印し、穴穂天皇の皇后は中蒂姫とし、スキャンダルの幕引きをしたこともすでにみた（P.31）。

　書紀では穴穂天皇の治世は454～456年、皇位継承と兄と妹、弟と姉の恋心がからみ、政権は揺れに揺れており、このような状況で如何なる大陸や半島政策が執られていたのか分からないが、宋書には世祖孝武皇帝諱駿の大明四年（460）十二月、「倭國遣使獻方物」とあり六年（462）三月、「以倭國王世子興為安東將軍」とある。451年に「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事」を加へられ、上表していた二十三人を軍、郡に叙されたという倭王濟からは、大きく後退をしていた。

（1）古事記、木梨輕太子と輕大郎女　又、経緯については、拙著に述べた。岩倉紙芝居古典館、[木梨輕太子と輕大郎女](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/karunoiratume.doc)
（2）日本書紀、雄朝津間稚子宿禰天皇[廿三年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#廿三年春三月)、[廿四年夏六月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#廿四年夏六月)　穴穂天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#穴穂天皇)
（3）日本書紀、穴穂天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#穴穂天皇)
（4）日本書紀、穴穂天皇[元年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#元年（はじめのとし）春二月)
（5）日本書紀、大泊瀬幼武天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm)
（6）日本書紀、穴穂天皇[三年秋八月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki29.htm#三年秋八月)　このスキャンダルについては、拙著に述べた。岩倉紙芝居古典館、[穴穂天皇と中蒂姫](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/anahomiko.doc)
（7）日本書紀、大泊瀬幼武天皇[前紀](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm)

（8）前掲書、冬十月

**大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）の役割**

大泊瀬幼武天皇は、強引な手法で政権を樹立したものの、政権の基盤は危うかった。草香幡梭姫皇女を皇后とし、圓大臣の女（むすめ）、韓媛と吉備の上道臣（あるいは吉備窪屋臣）と和珥臣の女（むすめ）の三人を妃にして、日下、葛城、吉備、和珥の族の協力を求めた。草香幡梭姫皇女は、書紀では去來穗別天皇の皇后ともされ非常に紛らわしいが、ここでは大草香皇子の妹である。古事記によれば、天皇が日下に居られた皇后のところへ行こうとして河内をみると、天皇の御殿のような立派な家が目に入った。河内の志幾（河内国志紀郡）の大縣主の家であった。丹比の周辺の大縣主がさような邸宅を営んでいる、これは河内の発展ぶりを示すものであり、奈良とは大きな格差が生じていた。「日下部（くさかべ）の　此方（こち）の山と　畳薦（たたみこも）　平群（へぐり）の山の　此方此方（こちごち）の　山の峡（かひ）に　立ち栄（ざか）ゆる　葉広熊白檮（はびろくまかし）　本（もと）には　いくみ竹生（だけお）ひ　末方（すゑへ）には　たしみ竹（だけ）生（お）ひ　いくみ竹　いくみは寝ず　たしみ竹　たしには率寝（ゐね）ず　後もくみ寝む（古事記）」とあるは、奈良の側には「い組む竹」が生まれ育ち、河内には「嗜む竹」が生まれ育つ。い組む竹はい組むが寝ず　嗜む竹は嗜むが率寝ず、と性が合わないが後には一緒に寝ましょうと融和を求めたものである。泊瀬の朝倉に宮を定めた大泊瀬幼武天皇にとっては、草香幡梭姫皇女との婚姻は、難波と丹比の双方をにらむことができる日下を手中におさめるために欠かせないものであった。半島政策を行ふには、河内を押さへ、葛城、吉備、和珥の族の協力は欠かせない。大臣の平群臣眞鳥、大連の大伴連室屋と物部連目の布陣では実績がともなっていなかった。

初瀬川は大和川となり難波に通じていた。難波からの船は三輪山南西の海柘榴市（つばきいち）に至り、その地は「八十の衢（ちまた）」と称され人々で賑わった。去來穗別天皇の時、幅15m、深さ2mの石上溝が整備され（1）、護岸施設と倉庫跡が発掘されており運河でもあり開発が進められており、大鷦鷯天皇の時には、闘鷄（つげ、大和国山辺郡都介郷「奈良市都祁小山戸」）の氷室の話があり、有力者による闘鷄の行はれた地でもあり（2）、大泊瀬幼武天皇はここに樓閣（たかどの）を建て（3）、中国からの使者を石上の高拔原で饗応している（4）。泊瀬の朝倉は、また、伊賀、伊勢へと通じる初瀬街道の地、東国や伊勢を視野に入れる要衝でもあった。その子、稚足姫皇（わかたらしひめのひめみこ）を、不幸な結果を招くのであるが、伊勢大神の斎宮に納（い）れておられる。

また、古事記によれば、韓媛との間の白髪（しらか）御子を太子とし、「御名代（みなしろ）として、白髮部（しらがべ）を定め、また長谷部（はつせべ）の舎人（とねり）を定め、また河瀬の舎人を定めたまひき（古事記）。」とある。後名代は、雄朝津間稚子宿禰天皇の頃から盛んとなっており、大泊瀬幼武天皇は舎人を多く定めた。杖刀人（武官）、典曹人(文官）という制度の人材を募るもので、大臣の平群臣眞鳥が典曹人、大連の大伴連室屋と物部連が杖刀人の長にあたり、全国から優秀な族の武人や渡来人を集める仕組みが整備されたのであろう。ただ、すでにみたごとく（P.34）、武内宿禰のごとき宰相もおらず、心を以て師とし、誤って人を殺すことが多く、天皇が心をゆるせたのは、史部身狹村主靑、桧隈民使博德等といふ外交交渉を担当させた渡来人といふ状況であり、統合力を発揮できぬ悩みがあった。

多くを粛清し、殺め、伊勢大神の斎宮に納れた長女をも死に追いやった天皇が、自ら新羅を討つべく神託を求め、得られなかったことは（P.34）、象徴的な出来事であった。神々との和解も思はしくなく、神託も不調、半島における対応においても後手に回った。しかしながら、倭王武は、興に勝る外交を展開し、その上表書が宋に残され、478年に「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を復活せしめている。ところが、書紀にあっては、廿三年（479年）八月条に、征新羅將軍吉備臣尾代（きびのおみをしろ）が五百の蝦夷等を率ゐ吉備の自分の家を過ると、天皇が崩御された報が入るや、蝦夷等がそれを聞き、「吾が國を領べ制めたまふ天皇、既に崩りましぬ。時失ふべからざる。」とばかりに近隣の郡を攻めたと記している。氣長足姫尊の時に比べれば随分と雰囲気が異なる。あまりよい例えではないが、戊辰戦争を戦い日清、日露戦争を行った頃の政治家、軍人と満州事変から太平洋戦争を遂行した政治家、軍人ほどの差があろう。譽田天皇（應神天皇）、大鷦鷯天皇（仁德天皇）の時代の河内の発展、国土開発、半島交流の活性化を経て経済、海運、軍事力は相当大きく成長していたのであるが、内紛や世代交代で力を結集できずにいるところを大泊瀬幼武天皇が独裁的に引っ張ろうとするが、天皇が崩御された途端、その亀裂が吹き出る始末であり、有力者同士が内面では牽制しあって、強力な紐帯を見出すことができていなかったようにみへる。

一方、武に叙授した宋の順帝であるが、実権は兄の後廃帝を殺害した蕭道成（しょうどうせい）の手中にあり、479年に政権禅譲を余儀なくされ、殺害されている。蕭道成は、宋の皇族の多くを殺しており、武の叙任も翌年には色あせたものとなっていた。東晋から宋、宋から斉、斉から梁への王朝の変転があり、日本（やまと）の政権が中国の政権交代の様に懸念を抱いていたかもしれない。臣下が帝位を禅譲とはいへ奪い取るようなことが、日本（やまと）であってよいものか？それで権威は保てるのか？文物や制度の吸収は欠くべからざるものであるが、叙任が半島における如何なる実利をもたらすのか？再考を迫られたことであろう。一貫して存在していた北魏への関心が高まれば、高句麗との交流も欠かせない。平成の我々が想像している以上に、複雑な国際関係の中を生きていたのかもしれない。しかし、古事記や日本書紀の時代の人々は、日本（やまと）が入貢し、叙任をもって半島で優位に立とうとしたことも、なかったことにした。

（1）日本書紀、去來穗別天皇[四年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki28.htm#四年秋八月)冬十

（2）日本書紀、大鷦鷯天皇[六十二年夏五月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#六十二年夏五月)

（3）日本書紀、大泊瀬幼武天皇[十二年夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#十二年夏四月)

（4）前掲書、[十四年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#十四年春正月)夏四月

冒頭にみたごとく、沈約は蕭道成の長子、蕭賾（しょうさく）、斉の武帝永明五年（487年）に宋書の編纂を命じられ、翌年に完成しており、蕭道成の族弟蕭衍（しょうえん）、梁の武帝（502年即位）のもとでも尚書令に任じられ、政権中枢にいたが、後に武帝の不興を買ひ、513年73歳で没している。多くが殺されたなか、沈約自身がよくこの動乱を生きのびたのは、宋書を編纂せねば死ねぬとする執念あってのことと思はれる。それは四川の人、陳寿が魏志倭人伝を記したことにも鼓舞されていよう。中国の王朝は朝貢を重んじた。それは、自らの王朝の徳と威光が東夷、南蛮、北荻、西戎の果てまで行き届いていることの証をもたらすものであり、その記録を万世まで残そうとする意志が根底にあってのことである。さりとて、東夷の果ての倭にまで目を及ぼし、資料を収集し記すとなれば、その志のすざまじさは並大抵ではない。その資料が集められ、記すことをゆるされるには、ふさわしい官職にあらねば実現されない。その沈約が、倭の五王の朝貢の記録を整理し、武の上表書を記し、百濟の北魏外交を記さなかったこととは、興味深い選択である。膨大な情報が一行に凝縮されねばならないことも、また、全く書かれないこともある。いづれにせよ、今日まで倭の五王の軌跡が知られるのは、沈約の眼力に負ふ。

**７．****まとめ**

書紀に表れている半島、大陸関連の記述、それを沈約や金富軾等の記述と比較し、該当する天皇の役割をみてみた。
　書紀は干支で記しており、キリスト歴ですれば氣長足姫尊は200年、卑弥呼の頃の人になる。しかし、新羅を討ち、その腹の子（譽田天皇）を皇位につけるために、日本武尊の子孫の勢力と戦ったのは、百濟の近肖古王の時の干支にあたるとしている。譽田天皇は、百濟の直支（典支）王と相対しており、書紀の編者達が、その事跡を捏造したとは思はれない。

皇帝から勅許を得て宋書を編纂した同時代の沈約が「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を倭王に叙授した記録を残している。沈約の史観に照らしても、捏造ではない。書紀の記述、広開土王碑の記述、金富軾等の記述からすれば、倭が半島に於いて、軍事的なプレゼンスを有していたことは明らかである。そのプレゼンスを正当化するにも、宋からの叙任が有効であると考え、入貢したことは当然であり、その叙任を実行するために半島に将軍府を置くのが自然の成り行きである。宋は、将軍府を置く叙任を高句麗にも百濟にも倭にも与えた。倭にとってそれを、日本列島内に置いて何の益があろうか、半島に置くがために入貢し、叙授を求めた。書紀からすれば、任那日本府であろう。

倭の軍事プレゼンスが一気に高まったのは、近肖古王が高句麗を討ち、平壌から、遼西、晋平を平定し、そして東晋に入貢する領土拡大を成し遂げた時かと思はれる。どう考えてみても、百濟の軍事力のみではまかないきれない版図である。倭の軍事的貢献に対して、近肖古王は漢文化を導入し、国家を組織し王たることを可能にするための漢人を提供した。倭の五王は、百濟や高句麗にならいその方向を目指したのであるが、書紀の時代の人々はそれを嫌って、日本（やまと）は文物を大いに取り入れたが、独自に天皇のシステムを発展させてきたと、突っ撥ね、その過程の記録を削除した。編纂者達は、そうせねばならない立場にあったといふことになる。通説によれば、倭が中央集権的な国家を形成するのは、聖徳太子の時を経て大化の改新を待たねばならないとする。しかし、書紀の記述に表はれる日本（やまと）の変貌をみれば、倭の五王の時代をその準備期間と片づけるわけにはゆくまい。350年～500年の150年間の倭は半島出兵を巡って激動していた。その一端が描けておれば、幸いである。

倭の五王の時代は、分裂をしている中国が前提であった。分裂をしている時代の中国は、半島や列島の勢力を利用することを考へる。しかし、統一された時代の中国は半島を手中に収めようとする。

平成の時代に生きる日本人にとっても無縁なことではあるまい。
2010.12.0７